345
6

始

345-6

懺悔

ゴーリキー著
鈴木三重吉譯

東京 博文館藏版

西洋文藝叢書第十冊
30
5. 3. 29
購求

序

□懺悔は、現代露西亞文壇第一の巨匠で、世界的にも近代の最も偉大な獨創的作家の一人なる、マキシム・ゴーリキイの比較的最近の作品で、彼の代表的な長篇作の一つとして許されてゐる傑作である。

□ゴーリキイは、彼自身も自分の生れた正しい年代を知らないのださうであるが、たしか一八六八年か又は九年の出生だといふから、現在四十七か八かの年齢である。今から二十年前には、普通の下級職工としてチフリスの鐵道修復工事に雇はれてゐた下賤な一青年が、今では露西亞の主要なる智識階級の間に特種の地歩を持して、世界的の一大文豪として高大な輝きを投じてゐる。人間の外面的變移に於て、こんなに愕くべき飛躍をした人も稀である。

彼は前述の疑はしい二つの年代のいづれかの、三月十四日といふ日に、母の實家なるニイズニイ・ノヴゴロッドの或富裕な染物師の家で生れたのである。マキシム・ゴーリキイといふのはゴーリキイが作品の上で用ゐる假名で、實際はアレキシス・ピイエシュコフが彼の名前である。母の名はバルバラ・カシリーナと言つた。父のマキシム・ピイエシュコフ

は貧乏な室内裝飾品商であつた。母はさういふ身分の男と結婚したゝめに實家から絶交されてゐた。ゴーリキイの三つの年に、貧しい彼の父はコレラに罹つて亡くなつた。母は後に或人に再婚したが、やがて肺病に犯されて、七つになるゴーリキイを孤兒に遺して死んでしまつた。それでゴーリキイは祖父の手に引き取られた。その祖父なる人はもとニコラス一世の下に下層な軍人を務めてゐた、薄情な頑固な人間で、交際してゐる人々からもひどく怖れられてゐた。ゴーリキイはこの祖父の手で學校へ上げて貰つて、はじめて讀み書きを習つた。けれども僅數箇月ばかり通學したきりで、疱瘡に罹つて退校した。ゴーリキイはその後永久にこれ以外に特定の學校教育を受けた事がない人である。それから間もなく九つの年に靴屋へ奉公に出されて、そこでひどい虐待を受けてゐたが、ふとした過ちから沸え湯で兩手に火傷をしたゝめに、祖父のところへ送り返された。すると祖父からひどく怒鳴りつけられたので、彼はすぐに遁げ出して、或畫工のところへ丁稚に這入つた。併しこゝでも傭主が餘りに苛刻なので辛棒がしきれなくて、飛び出して彫物師のところへ奉公し、次で園丁の家へ代つた後、十六の年にヴォルガ河を運行する小蒸汽船の一つへ厨僕として傭はれた。

ゴーリキイはこの安全な位置と共に、圖らずも彼の一生に忘れることの出來ない、彼の

眞實な教師の一人を得た。それは料理人長のスムーリーといふ男であつた。彼は、兵士上りであつたが、性來讀書好きな人間で、ゴーゴルやデュマの作物だの、聖徒傳、地理書等の他に、いろんな名高い小說を持つてゐた。ゴールキイはこの男から讀書慾を刺戟されて、彼の持つてゐる、鞄一ぱいの本を一つ〳〵讀んだ。スムーリーは自分の智識を傾注してゴーリキイの教養に役立つた。二人は時間さへあれば甲板へ出て、片隅に並んで讀書をした。ゴーリキイは、手に入るだけの本は悉く、行商人の賣り歩く、無名な人の作品をまで貪るやうにして讀んだ。

かういふ譯で智識と藝術とに對する熱狂的な渴望に捉へられた彼は、遂に船を棄てゝ、學問をするためにカザンへ行つた。けれども亂暴な彼は實際に撲つ附かつて見れば全で失望より外には何物をも得られる譯がなかつた。彼には自分を養ふにも智識を買ふためにも一錢の錢さへ持つてゐないからであつた。彼は仕方がないので麵麭屋へ傭はれた。さうして、一日十八時間働いて、やつと一箇月に三ルーブルしか貰はないまゝで、二年間、汚ないじめ〳〵した地下室で働き通した。その間與へられた食物は腐つたものばかりであつた。寢るのも狹い屋根裏へ上つて他の五人のものとごろ寢をしなければならなかつた。彼自身でも、一生の間この二年間ほど辛い目をした事はないと言つてゐるさうである。彼は後に

この時代の生活を彼の作「コナヴォロフ」や「あふれもの」に畫いてゐる。けれども彼はさういふ間にも、拾ひ得るかぎりの乏しい時間を利用して讀書に努めることを忘れなかつた。彼は仲間のコナヴォロフに於て自分の傾聽者と話相手とを見出した。二人は地下室の麵麭燒場で、いつも、ゴーゴルやドストイエウスキーやカラムジーンの作品を讀んだり、人生について議論した。稀な休日には二人は辛うじて穴倉から河や野へ出て僅かに廣濶な氣分を樂んだ。二人は屢ゝ、慘ましい流浪者どもの逓れ場になつてゐる、或古けた廢屋へ行つて、彼等の漂泊生活のさま〴〵な物語を聞いた。ゴーリキイはその代りに彼等にいろ〳〵の本を讀んで聞かせた。かうした彼等との交際のためには、ゴーリキイは警察の手入れに捉まつて、留置を食はせられたこともあつた。彼は又或數人の大學生たちのところへも度々話しに行つた。

併し最後には健康を弱めて、さうした苦しい生活に堪へ切れなくなつたので、そこを出て、木挽をやつたり、荷揚人足をしたり、いろんな一時しのぎの勞働者となつて露西亞中をうろついて廻つた。その間彼は夜も體を入れる家もないやうな、たゞ生きてゐるといふのみの生存を得るために、黑陰な、人間生活の「どん底」に沈んで、慘憺たる苦鬪を續けなければならなかつた。彼が終始それら浮浪人や廢殘者たちの仲間に投じてゐてどんなに

苦しい味を嘗めたかは殆ど想像にも附かない程である。彼はいく度となく饑ゑと寒さとに虐げられた。さうして遂に、精神的にも實際にも永久に暗黑なる、自己の保全の努力に疲れ果てゝ自殺を謀つた。ピストルの彈丸は彼の肺臟を射たが、彼は死ぬことが出來なかつた。彈丸は外科醫が拔き出した。これは一八八九年の出來事で、彼は年二十一であつた。

ゴーリキイはその負傷が回復すると、間もなく、冬中、ツァラトジーンで人の門番に雇はれたが、夏が來ると再び流浪して歩いた。その間食料を得るために、果物を行商したり、鐵道の信號手や職工になつた。かうして彼は再び、社會から拒けられ社會を拒けて流れ廻つてゐる、浮浪の徒の間に生活した。不朽なる彼の作物の最多くは彼のかうしたどん底の生活の記錄である。

けれども一八九〇年には徵兵の檢査のためにノヴゴロッドへ歸つて來た。併し、自殺を企てたときの傷痕のために兵役からは免れた。そしてしばらくの間クヴァス（らい麥から造つた酒）を賣り歩いてゐた。同時に彼はいろんな、敎育ある人々と交際する機會を得た。併しやがて又浮浪者の生活を繼續した。オデッサでは鹽業の傭人夫をした。それからベッセラビヤ、クリミヤ、クウバンなぞをうろついてコウカサスへまで流れて行つた。そして最後にチフリスで鐵道工事に雇はれた。それは一八九二年のことである。

彼はこゝで再び、教養ある人たちと親しく交ることが出來た。その中には若いアルメニア人もゐた。彼が窃かに文學上の製作を試みはじめたのはこの時分のことであつた。一八九三年に彼は處女作「マカラル・チュードラ」をチフリスの或地方新聞で發表した。それからなほさまざまな稼業に移つた後、三たびニジュニイ・ノヴゴロッドへ歸つて來た。

彼はノヴゴロッドでふとした機會からラアニンといふ法律家に才幹を見出されて彼の事務所に使はれることになつた。ラアニンは近代文學の愛好家であつた。ゴーリキイはこの人から多大な教育と刺戟とを受け取つた。そのうちに彼は當時同じノヴゴロッドにゐた、文壇の名家ヴラディミル・コロレンコに接近することが出來た。ゴーリキイが彼の文學的生涯の開發に於て最多くを負うてゐるのは最後にこのコロレンコである。彼は非常にゴーリキイの人物と才能とに打込んで、彼のためにさまざまの援助を與へた。そして彼に何よりも自分自身の文體(スタイル)を作り上げるやうに激勵した。コロレンコは當時その土地で新聞を主宰してゐたけれども、自分ではまだこの青年に何等の收入を授けることが出來なかつた。ゴーリキイは方々の小さな地方新聞に寄書して、僅かに生活費の一部分を得てゐた。一八九五年に彼の最初の傑作なる短篇「チェルカッシュ」が出た。翌年その町に、博覽會が開かれた時、彼はオデッサの新聞から、その開會中の通信記事を依囑された。この記事のた

めにゴーリキイは大いに世間の注意に上るやうになつた。併し彼の物質的の所得は極めて哀れなものであつた。彼は慘ましい生活を繼續して遂に肺を惡くした。

この時分から、彼の創作は聖ピータースブルグ等の主要な新聞に出るやうになつた。コロレンコは力を盡して彼の名前を顯はすことに努力した。彼は「チェルカッシュ」に續いて「コノバロヴ」「マルヴァ」「不安」等を發表した。最初は孤疑してゐた批評家等もやがて世人の狂熱的な賞讃に合同して騒ぎ出した。或有力な新聞は彼を永久の社員として招聘した。ゴーリキイははじめて生活の安定を得て、多くの傑作を連出した。以上は彼が世間へ出るまでの苦い經歴の大體である。(ハンス・オストワルドの「ゴーリキイ評傳」及びセルジュ、ペルスキイの「現代露西亞作家」に據る。)

ロゴーリキイがかういふ風に急速な飛躍をしたといふことは彼自身から見ても實際一つの愕異でなければならない。それには、ハンス・オストワルドが註解した如く、ゴールキイは彼の絶對的價値以外に、一面には、露西亞文學そのものと露西亞の社會との特種な狀態に負ふところも多いとしなければなるまい。元來露西亞が自己自身の文學を得た以來、彼等の社會が作家の任務として要求するところのものは、一言にしていへば、彼等の間を通して脈搏してゐる思想と感情とを代表的に具現するといふことである。彼等の意志を代理

して、社會を改造し進化させて行くことが作家の第一の使命とされてゐる。

ゴーリキイの出現に先だつた一八五〇年、六〇年、には露西亞の社會狀態に甚だしい變化が來た。奴隷制度の廢止と、階級制度の大いなる破壞とに併せて、地方の自治制が開發された。そのほかいろんな政治、敎育、經濟の部面に多くの改革が行はれた。イワン・ツルゲーニェフやゴンチャロフ、トルストイ、ドストイエフスキー等は、この活氣に滿ちた社會的の醱酵時代に併行して偉大なる働きを遺した大作家である。八十年代には、コロレンコ及びチェーホフが盛に歡迎された。けれども、やがていづれも沈默して、トルストイがただ一人實際の生存者となつた。かうしてゴールキイの出る年代が來た。この八十年代は露西亞の歷史中でも最暗黑な時代の一部分である。そこには七十年代に於ける虛無主義の必死的な奮鬪に續いて貴族主義に對する最暗憺たる反動があらゆる方面に捲き上つた。八十年の劈頭にはアレキサンダー第二世の弑逆と共に、さま〴〵の犧牲が上げられた。危險な激烈な思想はなほ未來の空にも漲らうとした。そのために若い有爲な人たちの幾十萬人が西比利亞へ放逐された。コロレンコの如きもその一人である。かうした社會狀態の陰黑は直ちに彼等の文學にも反射しずにはゐなかつた。つまりこの時代には何等靈感的な革新的勢力も產出されないで、たゞ沈痛な厭世思想が、あらゆる獨創力を窒息させて瀰漫した。

チェーホフのごときもかうした社會の萎微と頽廢とを畫いて、よりよき或ものに對する熱望を表白した。

「われ等はこのまゝでは生きて行くことは出來ない。こんな狀態の下に生活することは不可能である。」

と彼は痛言した。けれども彼は、自己を提げて何等かの解放を强行しようとはしなかつた。彼と並立してゐた他の作家たちも彼と共に暴虐の壓迫の下に縮まつてゐた。

けれども一方では六十年代の改革は着々として好良な經濟狀態を導くことに役立つた。さうして非貴族的階級は、富裕な中流階級の勃興と、勤勉なる勞働社會との湧發とに於て徐々に社會の實勢力となつて來た。ゴールキイの性格と自意識と彼の作風とはこの社會階級の步調に嵌つたのである。今再び光明ある理想の標的を得て、生活の現狀を向上しようと熱望してゐる彼等が、その階級の一人として、全力的な人生の肯定と、生活の改良に對する極積的な努力とを體現したゴーリキイを、彼等の思想の代表者として推賞したのは當然である。(私が譯出した「懺悔」のごときは、ゴールキイのこの特徵を見るに最恰好な作品の一つである。ゴーリキイの急激な成功は、半ばはかうした社會的實狀にも負うてゐるのである。——オストワルドはかういふ註解を下してゐる。

ゴールキイは多くの短篇長篇の小説と戯曲とに於て彼の絶大な才能を傳へてゐる。その著作中の最有名なものとしては、小説「フオーマ、ゴルディエフ」「兵士」「奴隷」「母」「懺悔」「間諜」の外に、戯曲「夜の宿」等の傑作がある。私は左に多くの人の便利のために、ゴールキイの作の主なる英譯書を列記して置く。

1. "The Orfoff Couple," "Malva." Translated by E. Jakowleff and D. B. Montefiore (Heineman), 1901.
2. "Foma Gordyeeff" ("Thomas the Proud"). Translated by I. F. Hapgood (Fisher Unwin), 1901.
3. "Makar Chudra." Monthly Review, 1901.
4. "The Outcasts," "Waiting for the Ferry," "The Affair of the Clasps." Translated by D. B. Montefiore, E Jakowleff, and V. Volkhovsky (Fisher Unwin), 1902.
5. "Three of Them." Translated by A. Sinden (Fisher Unwin), 1902.
6. "Three Men." Translated by C. Horne, 1902.
7. "Tales from Gorki." Translated by R. N. Bain (Jarrold & Sons), 1902:——

   In the Steppe.
   Twenty-Six of Us and One Other.
   One Autumn Night.
   A Rolling Stone.
   The Green Kitten.
   Comrades.
   Her Lover.
   Chums.

8. "Twenty-Six Men and a Girl." Translated by E. Jakowleff, D. B. Montefiore, S. K. Michel, "Greenback Library." vol. 1. (Duckworth & Co.), 1902:——

   My Fellow-Traveller.
   On a Raft.
   Tschelkasch.

9. "Song of the Falcon." Translated by E. J. Dillon, Contemporary Review, 1902, and "Maxim Gorky" (Isbister & Co.), 1902.

10. "Creatures that Once were Men" ("The Outcasts"). Translated by J. K. M. M. Shirazi, Introduction by G. K. Chesterton, (Alston Rivers), 1905.

11. "The Lower Depths."

12. "The Confession."

13. "The Spy."

□私は今彼の作品の一つ〳〵について解説する餘裕を持たない。たゞ簡單に全斑の主要なる特徴を概言すれば、彼が最多く書き、そして最多く人々を牽引したものは、やはり彼の經て來た「どん底」の實際經驗を畫いた所謂「浮浪人生活(バカバント・ライフ)」の記錄でなければならない。さうしてそれ等の作物の大なる價値は、彼に獨特なる、人間の眞實を窮極した敬虔な解剖と、人間味(ヒューマニティ)に對する摯實なる誘導と、彼自身の强固なる精力から發火してゐる、熾烈な、生の肯定の力とに存してゐると言つてよい。彼はすべてのものを人間の本性に基本した瞑想と批判とを通して敍寫してゐる。だから文學に於て、かういふ意味での赤裸々の實人生に對する直觸的な權威以外の或ものを得んとする人は、ゴーリキイを去つて他の作家によりより外はない。たゞこの方面の作品としてはゴーリキイは飽くまで第一人者的の偉大として永久に輝くべき大作家である。「懺悔」は、もとより一つの完全たるにはさまゞ〳〵の缺

點もあり得る作である。又ゴーリキイとわれ〳〵との社會の事情と、箇性との相違上、この作品が畫いてゐるすべての思想と感情とに、悉く共鳴を見出す譯に行かないのはいふまでもない。けれども少くともこの作の主人公たるマトヴの、人間としての、敬虔な根本的な生き方だけにでも、われ〳〵は眞純な人となつて頭を下げないではゐられない。或ときには全くこの人物の生活に同感して、われ〳〵の本性から出る、寂しい涙さへ滲んで來る。この作品は部分的に見れば、人生のいろ〳〵の實狀を描寫した多くの短篇の集合とも見られ得る。その各には、上記のゴーリキイの特徴以外に、それ〴〵、哀傷的な、溫純な、又は官能的な、幾多の抒情詩とロマンスとを享樂することが出來る。ゴールキイは決して意志と社會上の惡鬪とのみに生きてる作家ではない。彼は自然と實人生とを對象とせる哀感に充ちた潤麗な詩人である。

□私のこの「懺悔」の飜譯は、英譯書を臺本とした重譯である。併もその臺本それ自身が、「懺悔」の飜譯としてどれだけの價値を持つてゐるものであるかといふことが間接にも私には解つてゐない。私は眞の意味の飜譯といふものは、こんな不安定な中間譯を通して產れたものであつてはならないと考へてゐる。實のところ、私自身に取つても、さういふ不安な間接的努力それ自身すらが、しば〳〵――私の努力がいろ〳〵の意味に於て尠少でない

だけそれだけ――ばか〳〵しい徒勞のやうな氣もした。けれども私がしまひまでこれを譯了してわざ〳〵この叢書の一冊として公表するについては少くとも二つの「許され」(ユクスキュレス)がある。それは、一つには、根本に於て、私がわれ〳〵の讀書社會に導き入れたいと切望してるこの世界的傑作が、いつまでも私の期待する如き眞の意味の飜譯に於て刊行されようとしない事である。だからせめてその間は、私のかうした飜譯でも一つの一時的な便宜として全くの無意味でもないと考へたからである。それからもう一つは、已に出版されてゐる某氏のこの作品の邦譯が餘りに亂暴を極めてゐるがためである。その譯は、たま〳〵私の持つてゐる臺本そのものから重譯したものであるが、愕いたことには、臺本の全卷三百二十頁の英譯に對して總てゞ少くとも二千五百以上の誤譯を平然として包藏してゐる。ずゐぶん呆れた話である。これでは飜譯も全で害惡そのものである。實は私は、このひどい譯を見て、わざ〳〵同じ臺本について、ゴーリキイその人の爲めにより正しいものを譯出したくなつたのである。私は長い間かゝつて一字〳〵に周到な注意を注いで逐語的に飜譯した。自分自身でももとより好譯とは考へないが、たゞ誤譯は見出されないつもりである。併し決して絶對に誤譯がないと斷言するわけにも行くまい。その點にはひとへに世間の訂正を希待してゐる。それが完全に訂正された上で、もし臺本そのものが正確なるものであつた

なら、私の努力は、比較的完全にゴーリキイを髣髴し得たわけになる。私は併せてそれをも祈つてゐる。

□私は一字一行の飜譯について、たゞの一つの臆斷をも拒絶して、私の力と辭書とで解らないものは悉く人について考究した。この點では友人ハリマン嬢バートン嬢、及びプレフェアー氏に負ふところが最多い。譯語の上では、すべての表現をなるべく西洋語のまゝに字譯することに努力した。かけ離れた邦語化は一切避けたつもりである。そのためには、西洋語に親しみのない人々は、例へば、第三八九頁に見るごとく、

「彼は……恰も私が布(つぎ)の切れかなぞのやうに、寸を測つた。」

といふやうな、解りにくい直喩(メタフオア)なぞに出くはすことが少くないであらうと思ふ。けれども私はこれを「頭から足の先までじろ〳〵見究めた。」といふ風に譯出して、小さいことではあるが、原作の努力を平面化して了ふわけには行かなかつた。また、一々の特異な事實に注解を入れる閑がなかつたために、習俗上の相違や、傳說的または歷史的事實に對する準備知識の不足から來る、いろ〳〵な不可解にも逢着されるであらう。例へば、第二四六頁の、

「林檎の木は、若い娘たちが最初の聖晩餐式に出かけて行く途中のやうに、光つた美しい

露光量違いの為重複撮影

花の揃ひ着を着て輝いてゐた。」

といふ敍述のごときも、基督敎信徒の堅信禮につゞく最初の聖晩餐式には、女たちは眞つ白い着物を着て列席するといふ風習を知つてゐなければ理解が出來ない。又、三七七頁から引例しても、

「……最初の神の基督は、丁度フィーニックスが焰から生れたやうに、人間の心から生れたものだ。」

といふ記述がある。このフィーニックスのごときも、埃及の神話を知つてゐて、それが或、鷲に似た鳥で、五百年に一回アレビヤの荒野からヘリオポリスへ來て、自から祭壇の上で燒け死にをした後に、灰から再び蘇生して美しい鳥に化するといふ傳說が解つてゐなければ、與へられた比喩は了解し得られない。一々例示すればまだいくらでもある。けれどもいづれも大體から言へばほんの一さい一部分の記述であるから、解らない人は解らないまゝでづん〳〵讀んで行つても何の差つかへもないと思ふ。たゞ譯者としては氣になるから一言斷つて置くまでゝある。

口私は上條に傳記した以後のゴーリキイに就いては、彼の作物以外には詳しい動靜を知り得る便宜に出會はなかつた。彼は一九〇五年に或同盟罷工事件に際して無政府主義的の言

行に禍を得て露西亞から追放され、伊太利に亡命し、更に亞米利加へ渡つたが、もとから患はされてゐた呼吸器病のために痛く健康を害して、再び伊太利に歸り、カプリ島に棲んで攝養してゐた。それから數年前に政府から許されて露西亞に歸つたが、爾來とかく不健康であるために、しばらく一切の筆を絕つて、田舍の靜寂に退隱してゐるといふ事が傳へられた。かういふ風で彼は最近の十年間は「懺悔」以下二三の作の外には殆何等の見るべき作品を出してゐない。今度の對逸戰爭について、從軍記者として出征したといふ事が何かの新聞に電報されてゐたが、果してそれ程に健康を回復したのであらうか。彼はまだ年齡も五十に達してゐない。われ〳〵は彼が再び從前のごとき光輝ある創作的生活に歸ることを熱望せざるを得ない。

ゴーリキーは數年以來、自身の投資の下に出版事業を經營してゐる。彼の作品や現行の露西亞の諸作家の作物が、質素な低價な列冊の形で續々出版されて來た。ゴーリキイが創作から得た物質上の收入は一時は極めて巨額なものであつた。けれども彼はその最多くを他人の救濟に投出して聊かも自分のために蓄貯しようとはしなかつたさうである。彼の今の出版事業は世間に向つて甚大な利便を與へるものとして非常に歡迎されてゐるといふ。私のこの本の卷頭の寫眞は、比較的最近のゴーリキイを髣髴するものである。

露光量違いの為重複撮影

花の揃ひ着を着て輝いてゐた。」

といふ敍述のごときも、基督敎信徒の堅信禮につゞく最初の聖晩餐式には、女たちは眞つ白い着物を着て列席するといふ風習を知つてゐなければ理解が出來ない。又、三七七頁から引例しても、

「……最初の神の基督は、丁度フィーニックスのごときも、埃及の神話を知つてゐて、それが或、たものだ。」

といふ記述がある。このフィーニックスが焰から生れたやうに、人間の心から生れ鷲に似た鳥で、五百年に一回アレビヤの荒野からヘリオポリスへ來て、自から祭壇の上で燒け死にをした後に、灰から再び蘇生して美しい鳥に化するといふ傳說が解つてゐなければ、與へられた比喩は了解し得られない。一々例示すればまだいくらでもある。けれどもいづれも大體から言へばほんの一さい一部分の記述であるから、解らない人は解らないまゝでづん〳〵讀んで行つても何の差つかへもないと思ふ。たゞ譯者としては氣になるから一言斷つて置くまでゝある。

□私は上條に傳記した以後のゴーリキイに就いては、彼の作物以外には詳しい動靜を知り得る便宜に出會はなかつた。彼は一九〇五年に或同盟罷工事件に際して無政府主義的の言

行に禍を得て露西亞から追放され、伊太利に亡命し、更に亞米利加へ渡つたが、もとから患はされてゐた呼吸器病のために痛く健康を害して、再び伊太利に歸り、カプリ島に棲んで攝養してゐた。それから數年前に政府から許されて露西亞に歸つたが、爾來とかく不健康であるために、しばらく一切の筆を絕つて、田舍の靜寂に退隱してゐるといふ事が傳へられた。かういふ風で彼は最近の十年間は「懺悔」以下二三の作の外には殆何等の見るべき作品を出してゐない。今度の對逸戰爭について、從軍記者として出征したといふ事が何かの新聞に電報されてゐたが、果してそれ程に健康を回復したのであらうか。彼はまだ年齡も五十に達してゐない。われ〳〵は彼が再び從前のごとき光輝ある創作的生活に歸ることを熱望せざるを得ない。

ゴーリキーは數年以來、自身の投資の下に出版事業を經營してゐる。彼の作品や現行の露西亞の諸作家の作物が、質素な低價な列冊の形で續々出版されて來た。ゴーリキイが創作から得た物質上の收入は一時は極めて巨額なものであつた。けれども彼はその最多くを他人の救濟に投出して聊かも自分のために蓄貯しようとはしなかつたさうである。彼の今の出版事業は世間に向つて甚大な利便を與へるものとして非常に歡迎されてゐるといふ。私のこの本の卷頭の寫眞は、比較的最近のゴーリキイを髣髴するものである。

大正四年十月十日

鈴木三重吉

懺悔

一

私の身の上話をして聞かさう。たいして時間を潰させはしない。また聞いたつて何も害になるはずもない。

私は恥辱の子である。捨て子である。私生兒である。自分の母がだれだといふことも解らない。ただクラスノグリンスク行政區のソコルといふ村で、ロセヴといふ人の地面に棄てられたのだといふことだけが私の知つてゐる總てゝある。私の母か、それとも他のだれかゝ、或人の屋敷の中にある、ロセヴの年老いた夫人を葬つた、小さい埋葬堂の

階段へ私を置き去りにして行つた。そして私は園丁のダニル・ヴィアロヴに見附け出された。ダニルが、或朝早く〳〵そこの屋敷へやつて來ると、襤褸にくるめられた小さい子供が、その埋葬堂の戸口のところに轉がつてもが〳〵してゐた。そして畑色をした猫が一匹、その子供のぐるりをおづ〳〵とうろついてゐた。

私はまる三つを出るまでダニルのところにゐた。けれども、ダニルには子供がうぢやうぢやゐた。だから、私は勢ひ、自分の食ふものは自分で探しに歩かなければならなかつた。時によると食べものが何んにも見附からないこともあつた。そんな時には、私は一寸の間ぎやん〳〵泣き叫んで、そのまゝ饑じいなりに寢入つて了つた。

私が四つのときに、教會堂の番僧のヒラリオンが私を貰ひ子にした。この男は、餘程の變りもので、全く〳〵の一人ぼつちで暮してゐた。彼は單に退屈でしかたがないから私を貰つて來たのである。でつぷりした顏をした、髪の赤い、背の低い男で、豚脂入の肋肉のやうに圓く肥つてゐた。彼の聲は女の聲のやうに柔らかであつた。そして心も女のやうで、誰に對しても親切であつた。彼は杜松子酒が非常に好きで、いつも飲みたい放題

に飲み浸つてゐた。眞面目のときには、彼は、世間一體に對して頭の上らない人間でゞもあるやうに、半ば目を閉つて、何一つ口も聞かないで歩いたけれど、醉つぱらふと讃美歌や新教會聖歌を謠つた。そして顏をのし上げて、あらゆる人に微笑んだ。

彼はいつも、仲間のものからたつた一人かけはなれて、貧しく暮してゐた。持つてゐた一區劃の地面も、自分の教區の坊さんにくれて了つた。夏と冬とには、彼はいつも釣りをやつた。それから囀る鳥を捕つて暮しを立てた。私にも、その鳥を捕ることを教へてくれた。

彼は鳥を大變かはいがつた。そして、鳥の方でも一寸も彼を怖れなかつた。私は、彼が飼つてゐたナットハッチが、他の事には非常におづ〳〵した鳥だのに、それがとき〳〵、火のやうに赤い彼の頭の髪のまはりを飛び廻つて、髪に引つかゝつたり、それから肩の上へ棲つて、その小さな狡猾さうな頭をゆす振りながら、ぢつと彼の顏を見入つてゐたりした狀を、未だにあり〳〵とした情緒を持つて記憶してゐる。それから、もう一つの畫も想ひ出される。ヒラリオンが、頭や鬚の上へ大麻の實を一ぱいばらまいて、ストーヴの

側の腰掛の上に横になつてゐる。 すると鶯や、金翅雀や、トムテットや、てりうそが、その木の實へ向けて飛んで來て、ヒラリオンの髪の上に群がつたり、背中を上つたり、耳をつゝ突いたり、鼻の上にとまつたりする。 ヒラリオンは思ふさま笑つたり、眉毛をすぼめたり、彼等と打とけて話しをしたりしながら、ぢつとしてゐる。——私はヒラリオンが羨ましかつた。 鳥は私を怖れてゐた。

ヒラリオンは氣立の穩かな男であつた。 すべての動物はちやんとそれを理解してゐた。併し私は世間の人間がさうだつたとは得う言はない。 そのために彼等を非難するのではない。 世間の人間が愛撫で飼はれないのは解り切つてゐるからだ。

冬になるとヒラリオンはひどい暮しをしたものであつた。 彼には焚きものが無かつた。それを買はうにも買へやしない。 お金はすつかり飲む方に使つてしまつてどうすることも出來なかつた。 彼の部屋は、鳥が囀つたり謠つたりしてゐたつて、全で穴倉のやうに寒かつた。 彼はいつもよく、鳥を相手に口笛で何をか言ひかけた。 彼は口笛で不思議な程可愛らしい音色を出した。 そこへ、大きな 嘴 のやうな鼻をして、髪の赤い頭をして

ゐるから、彼れ自身がすつかり交喙のやうであつた。

『まあ、聞けよ、マトヴ。 一寸聞いて見ろ。』

マトヴといふのは、私が洗禮を受けたときに附けられた名前である。

ヒラリオンは、手の平へ頭を乘せて仰向きになつたまゝ、目を閉つて、非常にいゝ聲で哀傷歌の一くさりを謠ひ出すのであつた。

鳥は自分の歌をやめて耳を傾けて、それから互に張り合つて囀り出した。 その中でヒラリオンの聲が一等よく通つた。すると、鷺と金翅鳥とが眞から忿り出した。 或はつぐみや椋鳥が怨る。 ヒラリオンは、自分で自分の謠つてゐる歌に引き入れられて、ぽろ〳〵と涙を流すやうなことが屢々あつた。 そして留め度もなく泣いたゝめに、顏が灰色になつて見えた。

かういふ風に謠ふのを聞いてゐると、だれでも屢〳〵もの悲しい困惑した氣分になつた。

私は或時徐と彼に聞いて見た。

『伯父さんはどうしていつも死のことばかり謠ふの？』

彼はふいと途中で止めて、私の顔を見て、笑ひながら答へた。

『悄げるなよ。ばかな奴。——なぜ死の歌を謠ふかつて、さういふ歌は美しいからだ。教會のすつかりの儀式の中で、この、死んだ人のために歌つてやる哀歌より美しいものはない。人間に對する慈愛といふものが、その主調音になつてゐる。それから人間に對する憫れみもやつぱり主調になつてゐる。われ〳〵人間の間には、死んだ人に對するより以外には同情といふものはないのだ。』

私は彼がかう言つたのや、それから、いろんなことを言つて聞かせた事を、そのときには解らないながらも、一々注意した。人といふものは、自分の子供のときのことは、ずつと後にいゝ加減に年を取つて、物の分別がつくやうな時代にならないと解らないものである。

私はそれから、或とき、なぜ神はこんなに一寸も人間を助けてくれないのかと彼に聞いたのを記憶してゐる。

『それは神の知つたことぢやないさ。』とヒラリオンは説明した。

『自分で自分を助けろよ。そのためにお前の理解力といふものが授けられてゐるのだ。神は死からその恐ろしさの或部分を剪み切つてくれるために存在してゐるのだ。どんなに活きて行けばいゝかといふことは、お前が自分で氣をつけるまでだ。』

私はこの言葉をちきに忘れて了つて、それからずつとよほど後になるまで思ひ出さなかつた。そのために私は、必要のない苦痛を澤山嘗めなければならなかつた。

このヒラリオンといふ男は實際飛んだ變りものであつた。ほかの人は、だれだつて、釣をやるときには、魚を威かして遁がしては駄目だと思ふから、大きな聲を出したり口を聞いたりなぞしやしない。けれどもヒラリオンは、歌を謠つたり、私に聖徒の話をして聞かせたり神について話してくれたりするのであつた。それに、魚は愕くどころか、いつも彼にのぼせて氣が狂いでもしたやうに、どん〳〵喰ひついた。それから鳥を捕るのでも、だれでもそつとしてるのがきまりだのに、ヒラリオンはのべつに口笛を吹いて鳥を引きつけたり、彼等と話を續けたりした。それが一寸も鳥を捕る障りにならなかつた。罠をかけようと網を使はうと、鳥は彼のところへ群がつて來た。それから蜜蜂の場合で

も、新しい蜂の一群を巣に入れたり、その他、何にしろさういふ風な問題になると、いかに慣れた蜂飼ひだつて、それをやる間は祈りをするのが常である。それでもときには甘く行かないことがある。そんなときにはヒラリオンのところへ加勢を頼みに來る。するとヒラリオンは、しまひ迄ひどく罵り又は呪ひながら、蜂を追ひ出したり殺したりした。しかも何事もみんな罠で鳥を取るときのやうな手際に行くのであつた。彼は蜜蜂を好かなかつた。彼の娘は蜜蜂にやられて盲目になつた。その小さい女の子はその時三つだつたが、それが蜂の巣の上へ上つてゐるところへ一匹の蜂がその子の目へ向けて飛んで來て、それを刺した。その片目は惡くなつて閉れて了つた。それから一方の目も同じく閉れた。女の子はしまひに頭が痛んで死んでしまつた。お袋はそのために狂人になつた。

ヒラリオンは他の人に對しては、何んでもすることがまち〳〵であつた。けれども私にだけは全で母のやうにいつも變らず親切によくしてくれた。村には私に分けてくれるやうな慈愛は一つもなかつた。人々は、それこそ窮乏した、ひどい貧しい生活をしてゐた。私はその人々に取つては全で赤の他人であつた。私は不意に人の麵麭の切れをふん

だくりでもするかのやうに、餘計な厄介ものに見られてゐた。

ヒラリオンは、教會堂で彼の手傳ひをすることも矢張り私に教へた。私は彼の職掌の手だすけをした。一緒に合唱席で歌つたり香爐の炭を眞つ赤におこしたり、そのほか必要な事を一々した。監守人のヴラッシの手傳ひをして教會堂の中をちやんと始末をした。私は冬には殊にそれが好きだつた。教會は石造で、十分に間溫めがしてあるので、中へ這入つてゐると嬉しくて溫かであつた。

私は朝の禮拜よりか晩の禮拜の方が好きであつた。夜になつて人々が勞働の塵を振ひ、自分の苦勞を忘れたときには、みんな敬虔なしつとりした心持になつてゐる。人々の精神が溶けて小さい焰をした蠟燭のやうに輝く。さうなると、互に顏こそ一々違つてゐても、體は同じ一つのものになつてゐるのが見得られる。

ヒラリオンは教會堂の禮拜が非常に好きであつた。彼は目を閉つて、赤ばしれた頭を、喉ぼとけが突き出るまでに後に反らして、勢よく謠つた。彼は屢々謠ふのに夢中になつて、餘計な先の方まで謠ふことがあつた。坊さんは、祭壇の上から、彼に向けて相圖

をしなければならなかつた。

『おい〜、どこまでその歌を引つ張つて行くつもりかい？』

彼は讀むのでも、感情に充ちた、はつきりした、謠ふやうな聲をして、美しく情緒深く讀んだ。坊さんは彼を好かなかつた。彼の方でもその坊さんを厭つてゐた。彼は私に向つて、一度ならずこんなことを言つた。

『あいつは何てえいゝ坊主だらう。あんなのは坊さんぢやない。あれは俗習と强迫とが撥でたゝく太鼓だよ。ほんとに俺が坊さんだつたらなあ。——俺なら人間ばかりぢやない、壁の聖畫まで泣かせるやうな禮拜をやつて見せるんだ。』

その點は彼のいふのが當つてゐた。私たちの坊さんは、見てくれの立派な人物ではなかつた。だつて、火藥でこがされでもしたやうな黑い顏の眞ん中に、そつくり反つた鼻が喰つ附いてゐて、口が大きくつて齒がなかつた。口鬚と言つたらくしや〜だし、頭の髮は薄いし、額際には禿げがあつた。兩腕が片輪のやうに長かつた。彼の聲はしやがれてゐた。そして恰も彼の力に叶はない重たい荷物でも引きづつてゐるやうに唸つた。

貪慾で、いつもかも氣むづかしい男であつた。彼は大勢の家族を抱へてゐたが、村は貧乏だし百姓の地面も惡いので少しも金の取れる機會に撲つ附かれなかつた。

ヒラリンと私とは、夏になつて蚊が澤山にゐる時分でも、晝夜森の中に坐つて鳥を捕つたり、それでなくば河へ行つて釣をした。所中何とか敎會の用事が出來て來る。番僧がゐないとなると、どこへ行けばゐるのか誰れにも解らなかつた。そんな時には村中のすつかりの子供等が彼を探しに驅り立てられた。子供等は若い野兎のやうにそつちこつち、そこいら中を走り廻りながらかう言つて怒鳴つた。

『ヒラリオンよう。番僧よう。おゝい〜。急いで歸れよう。用事だよう。』

さんざ手かずをかけた後に、やつと彼は目附け出された。坊さんは彼を罵つて、訴へると言つて威しつけた。けれども百姓たちはたゞ笑つてゐた。

二

ヒラリオンにはサベルコ・ミグスといふ友達がゐた。この男は評判の泥棒でそして飲んだくれであつた。これまで色んな惡事を働いて、幾度となく鞭で引つぱたかれたり牢へ入れられたりした。併し非常に珍らしい人間であつた。彼は歌が謠へたし、考へ出すと愕かれる程上手に、色んな物語がやれた。

私は幾度となく彼の話しを聞いたものだ。今でも尙、あの男が、私の前に立つてゐるところをあり〳〵と目に見得る。ぼろ〳〵の着物を着て、毛が三本もないくらゐの口鬚を生やした、楔形の顏の痩せた威勢のいゝ男であつた。彼の額は廣かつた。その額から、愉快さうな、惡ずれた眼がどんよりした二つの星のやうに瞬いてゐた。

彼は所つ中杜杉子酒を一瓶持つてはやつて來た。ヒラリオンに買はせもした。そして二人で向き合ひにテイブルにかけた。するとサベルコが言つた。

『番僧さん、あの懺悔の讃美歌を謠へよ。』

二人はぐいと一飲引つかける。すると初めは何だかもぢ〳〵してゐたヒラリオンが謠ひ出す。サベルコはそこんとこへ根を下ろされたやうに坐つてゐる。例の申譯ばかりの鬚が振へて目に涙が滲んで來る。彼は目ばたきをして、手の平で額を横に擦つて、そして指先で頰つぺたの涙を拭きながら笑つた。

そのうちに彼は印度護謨の毬のやうに飛び上つて大きな聲で怒鳴り立てる。

『い、〳〵。素敵だよ、ヒラリオン。俺は神が自分の讃美のために作られたこんな美しい歌を持つてるのが本當に羨ましい。ね、ヒラリオン、人間の出來ないことが何だつてあるかい？　人間といふものは、善良で氣高くさへあれば偉大な或物だ。さういふ人間は神の前に立つて、「おゝ神よ、私は、あなたに私の靈をすつかりさし上げてるのに、あなたは私に何にもくれやしない。」かう躊躇なく言ふんだ』

『神を瀆しちやいけない。』とヒラリオンは言つた。

『俺がかい？』とサベルコは大きな聲をした。

『俺はそんな事を思つてやしない。そんなことはこれまで考へた事もない。それだのに

俺がいつ神を瀆さう。そんなことは斷じてないよ。私はたゞ神のために喜んでゐるだけだ。その外には何にもない。――まあ、それはそれとして今度は俺が何か謠つて聞かさうよ。』

彼は立つて、兩手を披げて謠ひ出した。彼は全くしいづかに、變怪的に歌ふのであつた。彼の目は大きく開いて變な火の色を持つて光つた。その突き出した手の皺ばつた指は恰も虛つぽな空間の中に何物をか探り求めるやうな恰好で絕えず動いてゐる。ヒラリオンはそちらで壁に倚りかゝつて、兩手を腰掛の上に載せて、口を開いて、愕いたやうな顏をして立つてゐる。私は柔かな陰鬱に壓へられながらストーヴの上に寢そべつてゐた。サベルコの姿は眞黑く見える。たゞその小さい白い齒が光つてゐるばかりである。彼の乾き上つた舌が、蛇の舌のやうに動く。そして顏には汗が大きな粒になつて溜つてゐる。彼の聲は、恰も盡きるところがないやうであつた。牧場の中の小川のやうに漲り、流れ、きら〳〵する泡を立てた。

彼は謠がすむと、のそり〳〵よろめきながら席に歸つて、片方の手の平で顏の汗を拭く。二人はそれから再び飲んで、長い間沈默したまゝ坐つてゐる。

『ヒラリオンよ。今度は「大洋の浪へのやうに」を謠へよ。』

やがてサベルコがかう叫ぶ。

こんな調子で二人は終宵互に樂しみ合つて、しまひにはどちらともへゝれけになる。さうするとサベルコは、坊さんや地主や王などについてのいろんな面白い話をやり出すのであつた。ヒラリオンはそれを聞いてさわぎ笑つた。私も笑つた。けれどもサベルコは次から次へと話を引いて行つて、人が笑ひ死に死にでもしさうな程滑稽に話すのであつた。

併し彼は休日に居酒屋で謠ふときにはもつと甘かつた。そのときには彼は聞き手の前へ進み出て、額がすつかり皺になる程固く目を閉つて謠つた。彼を見てゐると、殆んどその歌が地から湧き出るやうに見えた。大地が彼にその言葉を暗示し彼の聲に自分の力を貸してゐるやうであつた。百姓たちはぐるりに立つたり腰かけたりしてゐた。中には頭を屈めて藁をちび〳〵嚙るものもゐるし、輝いた顏をしてサベルコを見つめてゐるものも

あつた。女たちは彼の謠を聞いてしく〳〵と泣きまでした。

彼の歌が終ると、彼等は叫んだ。

『もう一つ聞かせておくれよ、サベルコ。ほんのもう一つでいゝから。』

そして彼等はサベルコに杜松子酒をおごつた。

このサベルコについては一つの話がある。或とき彼は村で何をか盗んだ事があつた。百姓たちはそこを捉まへた。

『かうなればじたばたしたつて駄目だ。もうお前にはうんざりした。これから絞め殺してやる。』

彼等はかう言つた。するとサベルコは答へた。

『そんな、くそ馬鹿な真似をするのは止せよ百姓奴。お前達の企むことには何一つ氣の利いた事はないや。お前たちは私が盗んだものをちやんと取り回したちやないか。だから何にも損はないんだ。お前達は小錢ならいつだつて儲けられる。けれども俺のやうな人間をもう一人探し出さうつたつてどこにもゐやしないぜ。俺が死んだら誰がお前達の

心を慰めるんだい。』

『甘いことを言はあ。――だつていくら喋つてもそれで命は救へないよ。』

彼等はサベルコを絞殺するために森へ引つ立てゝ行つた。併し彼は、その途中を引つ切りなしに謠つた。百姓たちははじめは彼を急き立てたが、その内に足を緩めた。そしてしまひに森へ來た。彼等は縄の用意をした。けれども、彼が最後の歌を謠ひ了へるまで待つた。と、或一人が他のものに言つた。

『もう一つ謠はせてやらう。けどもそれがこいつの最後だ。』

彼はもう一つ謠ひ、また一つ謠つた。その間に日が上つた。百姓たちはぐるりを見ると、光り輝いた明方が東の方に明け放れて行つた。サベルコは笑ひながらみんなの眞中に立つて、少しも怖れないで死を待つてゐた。

百姓たちは當惑して叫んだ。

『よう、おい、こいつを許してやらうよ。この男を絞め殺したら、こちらは神に對して重い罪を犯すのだ。その上に熱湯の中へ投げ込まれる。』

彼等はかうしてサベルコを許してやることに極めて了つた。

『お前の技量のためには、帶のあたりまで屈んでも頭を下げてやる。併し、お前が泥棒したのを忘れないやうに何かくれといてやらなけや。』

彼は輕くひつぱたかれた。その後で皆は彼と一緒に歸つて來た。

これは、恐らくはすつかり拵へた話であらう。併しそれが百姓たちの虛榮心に投合した。そしてサベルコの上へも信用を反射した。つまるところ、よしやそれが單に話に過ぎないとしても、人間といふものが全く惡いものではあり得ないといふことはこれで解る。それでなくば、彼等はこんな美しい話は拵へ得ない譯だ。

サベルコとヒラリオンは歌を謠つたばかりではない。二人はいつも、あらゆる題目を捉へて話し合つた。彼等の話は屢々惡魔の上に向けられた。二人とも惡魔を輕視して居た。

私はヒラリオンが或ときこんなことを言つたのを記憶してゐる。

『惡魔はお前自身の凶惡を畫いた畫だ。お前の精神上の暗黑の反射だ。』

『從つて俺の愚鈍の反射だと言ふんだらう?』とサベルコが言つた。

『全くさうだ。實際お前の言ふとほりさ。それだけのものだよ。』

『俺もそれにちがひないと想ふ。だつて、若し惡魔が本當にゐるものだつたら、きつともう疾つくに俺の襟頸を引つ掴んだはずだ。』

サベルコは笑ひながら言つた。

ヒラリオンは惡魔といふものを全く信じなかつた。或とき彼は運柳床の上で彼と反對の意見を持つてゐる百姓達と議論をして、かう叫んだことがある。

『それには少しも惡魔のやうな惡いところはない。それは單に獸性なんだ。一體善でも惡でも人間の中にあるのだ。善が欲しければ善が得られる。もし惡を望むなら、惡はお前の中から出てお前に來る。神はお前に善をも惡をも強ひやしない。人間は神とは何の關係もなく造られてゐるのだ。だからお前がすることはそれが善からうが惡からうが、みんなお前自身の自由意志でするのだ。だがお前の惡魔と言つたら貧乏と無智とだ。善といふものは實は人間らしいといふことなのさ。といふのはそれが神から來るのだからだ。

お前の惡は惡魔とは何の關係もありやしない。その惡は獸性から出て來るんだ。』

『何だこの赤髮の邪教徒め。』

彼等は彼に向つてかう叫んだ。

けれども彼はいつも自分の言ふことを張り通した。

『それだから惡魔は角があつて山羊の足をしてるやうに畫かれもするのだ。惡魔は人間の中にある獸的分子だからだ。』

ヒラリオンは基督の話を非常に美しく物語つた。私はあの光輝ある神の子の慘酷な運命を默考する度に泣かずには居られなかつた。殿堂での博士たちとの論爭から、ゴルゴタで磔刑になるまで、私は彼が純潔な愛らしい子供として私の前に立つて居るのを見た。民衆に對する言ひ表はし難い愛を抱き、すべての人に對する情深い微笑みと愛らしい慰めの言葉を持つて立つて居るのが目に見えた。どのときだつて、彼は彼の美しさであらゆる人々を眩目させる子供であつた。

『基督はその殿堂で、博士たちと子供のやうに話しをした。』

ヒラリオンはかう言つた。

『だから、彼等には彼の純朴な賢こさの中に、彼等自身よりももつと高い或物があるやうに見えたのだ。マトヴよ、いつもそれを考へろよ。お前の一生涯の間、お前の心の中にこの子供らしい要素を保存するやうにしろよ。その子供らしいといふことに眞理が含まれて居るんだから。』

私は彼に言つた。

『そして基督はいつまた來るの？』

『つい直き來るよ。人間が再び彼を求めてるといふ話だから、彼は間もなく來るに相違ない。』

ヒラリオンはかう言つた。

今ヒラリオンの言つた言葉を思ひ浮べると、彼は神といふものは最も美しきものを創造した偉大なる主だと考へ、人間といふものは、地上の行程を迷つた助けのない生物だと思つてゐたやうである。そして人間を、神がこの世で人間に與へた巨大な富の不幸なる相

續者として憫んでゐたやうに思はれる。

ヒラリオンもサベルコも同じやうな信仰を持つてゐた。

私は或とき私たちの村から一枚の不思議な畫が出て來たのを思ひ出す。秋の或朝早く、或一人の女が水を汲みに吹上井戸へ行くと、何か知ら井戸の底に光つてゐるものがあるのが、不意と目についた。女は人々を呼び集めた。警視もやつて來た。坊さんもそこへ出かけて來た。ヒラリオンも驅けつけた。一人の男が井戸の中へ下ろされた。そしてその男が水の中から『燒け燃える荆茨』の畫を取り出した。早速感謝の禮拜がその場所で行はれた。そしてその井戸の上へ禮拜堂を建てることに極つた。

『みなさん、お供へものを持つて來なさい。』

教區の坊さんはかう叫んだ。

警視までも、みんなにそれを强ひた。そして彼自身は三ルーブルの紙幣を出した。百姓たちは財布を開いた。女たちは熱心に亞麻や、いろんな果物や野菜なぞを持つて來た。村中のものは非常に歡喜した。私も復活祭の朝のやうに嬉しかつた。

けれどもその感謝の祈禱の間、私はヒラリオンが陰氣な顏になり、だれにも目を注がないでゐるのに氣がついた。同時にサベルコは二十日鼠のやうに群集の中をこそ〳〵潛り歩いて忍び笑ひをした。

その晩私はその奇蹟的な畫を見に行つた。薄い烟のやうな、青味がゝつた靄が、恰も目に見えぬ生物が徐に呼吸をしてゐるやうに、例の井戸の上に漂うてゐた。そして井戸の中から立ち上つた。井戸にはそのために光と溫度とが與へられた。

それを見つめてゐると、私の心には、悲しさと嬉しさとが錯綜した。

家へ歸ると、ヒラリオンが怒氣を帶びた調子でこんなことを言つてゐるのが聞えた。

『あんな聖母があるものかい。』

サベルコは笑ひながら憎さうに言つた。

『俺にも解つてるよ。丁度モーゼスが基督よりずゝと前にゐなかつたとでもいふやうな出鱈目だ。——本當に何といふ詐欺師だらう。あッはッは、とんだ奇蹟だ。うふ、あいつ等は何といふごろつきだらう。』

『こんな惡ふざけをするんだからあの巡査も坊主も二人とも牢屋へ撲ち込まなくちやいけない。それで以て、利慾のために人間の中にある神を殺さないやうに敎へてやらなきや。』

ヒラリオンは極小さい聲でかう言つた。

こんな二人の話は私には何だか面白くなかつた。それで私は、ストーヴの側に寢ころんでゐて、そこからかう言つて聞いた。

『伯父さん、二人でそこで何の話をしてゐるの？』

そこには死んだやうな沈默があつた。二人とも明らかに激昂してゐた。そしてたゞひそ〳〵と私語いてゐた。

すると、サベルコがヒラリオンに向いて叫んだ。

『何だつて？　お前は世間の奴等のことをぶつ〳〵言つて、奴等を馬鹿だつていふ癖に、あの小さいマトヴを鈍物にするのは恥ぢないんだな？　それはどういふ譯だ。』

かう言つて彼は飛び上つて私に言つた。

『おいマトヴ、これ見ろよ。これは爲寸だぜ。こいつを手の平へあてゝかう擦する。

いゝかい？——おいヒラリオン、ランプを消してくれ。』

彼等はランプを消した。すると、その暗がりの中で、サベルコの兩方の手は、丁度、さつきの、井戸から漁り出されたあの奇蹟的な畫と同じやうに、青味がゝつた靄で光つてゐるのであつた。それは不思議なと同時に厭らしい光景であつた。

サベルコは何とかかとか言つたけれど、私はストーヴの側の片隅に這ひ込んで了つて、指で耳を閉つたまゝ一と言も言はなかつた。

二人は杜松子酒を持つて、私がストーヴの上で寢てるところへ上つて來た。そしてしまひには、二人で本當の奇蹟と、人間の信仰に反對する詐欺的の徒黨との對抗について話しはじめた。私は二人が議論をしてる間に眠つて了つた。

ところが、二三日たつと、坊さんや役人たちの一群が村へやつて來て、あの畫を沒收した。警視は役を奪はれた。例の敎區の坊さんは法律上の處分を加へると言つて嚇された。私もそのときに彼等の詐欺が解つた。私はそれが女たちから亞麻を獲つたり百姓から小錢を取らうとして企まれたのだといふことが、いかにも厭でならなかつた。

私がかれこれ六つになつたときにヒラリオンは私に教會用のスラヴ語を讀むことを敎へた。それから二年たつて冬期の學校がはじまつたときは、彼は私をそこへ通はせていろんな課業を受けさせた。最初は私はヒラリオンから少し遠ざかつた。私は學問を喜んでひどく本が好きだつた。ヒラリオンは私の學課を目の前で復習はせたときには、彼はいつも、

『甘いぞ、マトヴ。』と言つた。

或時彼は私に言つた。

『お前は血管にいゝ血が這入つてゐる。お前の父親は馬鹿ではなかつたに相違ない。』

『それぢや私のお父さんは誰だい？』と私は聞いた。

『そんなことは分りつこはない。』

『百姓？』

『男だといふことだけは慥だが、どんな身分の人間だか誰れも知つてやしない。しかしお前の顏や皮膚から判斷すると、お前の父親は滿多に百姓ぢやないよ。どんな性格の男

かといふことは別としてだ。——どうもちやんとした紳士のやうに思はれる。』

彼が出任せに言つたこの言葉が私にはいつまでも忘れられなかつた。それは私には幸福以外の何事をも證據だてた。學校で小兒たちが私のことを捨て子だなんていふと、私は直に怒りたけつて、彼等の『三』の前で怒鳴つてやつた。

『お前たちは百姓の子だ、俺の父さんは紳士だつたんだぞ。』

かう言つて私は力んだものである。誰しも侮辱に對しては何とか自己を防禦しなければならない。その時私にはこれ以外には何等の防禦手段も思ひ浮ばなかつた。

私はそのために學校朋輩から愛されなかつた。彼等は私にあらゆる綽名を附けた。けれども私は彼等をうんと撲り附けはじめた。私は頑强な子であつた。喧嘩となれば威勢よく喰つてかゝつて人に引けは取らなかつた。その内にいろんなことで私のことを言つ附けに來た。子供等の父親やお袋なぞがヒラリオンのところへ押しかけて來て、

『あのやくざな小悴のごろつきをしつかり拘り附けといておくれよ。』

かう言つた。ところが中には、私のことを一寸も言つ附けには來ないで、耳を捉らま

へて私をぐん〳〵引き摺つたり、腹に入るだけ搖りこづいたりするものもあつた。

そんなときヒラリオンは私に言つた。

『だつてマトヴよ。お前は將官の子かも知れないよ。さう言つたつて慥に言ひ過ぎぢやない。――人間はみんな同じやうにして生れたのだから、位といふものは皆んなが一樣に持つべき譯ぢやないか。』

けれどもそんなことを言つてくれたつてもう間には合はなかつた。私はそのときには十二であつた。だから村の子供等の嘲弄を鋭く感じた。ヒラリオンは私を彼等の仲間から引きはなした。そして私は再び、より密接にヒラリオンへ接近した。二人はその冬中ずつと、森の中を彷徨ひ歩いて鳥を取つた。併し私は學課の方は餘り進歩しなかつた。

私は十三で學校を下がつた。するとヒラリオンは、なほこの先私をどうしたらいゝものかと當惑しはじめた。二人は時々ボートに乘つて出かけた。私が漕いだ。彼は艫に腰をかけて、空想で、運命の、考へ得るだけのあらゆる行路を通して私を運んで行き、私の取るべき經歷を企んだ。

私はその頃から、坊さんになる積りでゐた。併しヒラリオンが兵隊になれとか、小商人になれとか言つてくれる提案は、どれも私の心を引かなかつた。

『お前それぢや何になりたいといふんだい。』

ヒラリオンは私の顔を見て笑ひながら言つた。

『まあ併しそんなことは心配するな。どうかかうか足場が目つかるだらうよ。たゞ兵隊に取られないやうに要慎しろよ。兵隊に取られたらもう人間ではなくなるんだからな。』

聖母昇天祭の後間もない八月の或日、二人は鯰を漁りにリュウビュシヤの田地へ向けて漕いでゐた。ヒラリオンは少し醉つてゐた。そこへまた杜松子酒を持つて來たのであつた。時々彼はそれをちび〳〵引つかけて、咳をして、それからありたけの聲を張り上げて謠つた。彼のボートは餘り物の役には立たなかつた。小さくつて損じてゐた。ヒラリオンが、そのボートの中で不意にくるりと向き變つた拍子にボートが引つくり覆つて、二人とも河へ落ちこんだ。二人はそんな目に會つたのはこれがはじめてゞはなかつたので、私は一寸も愕きはしなかつた。で、もぐり上つて見ると、ヒラリオンは、

『お前は岸へ泳いで行け。　このくそボートは己が一人で直すよ。』

と、頭を搖り〳〵かう言ひながら、私の方へ泳ぎ附いて來るのであつた。

岸の近くでは流れが緩かつた。　それで私はそこへ來ると徐かに泳いだ。　ところが不意に誰か知ら私の足を引つ張りでもするやうな氣がして來た。　冷たい　ところへ來たのだと私は思つた。　後ろを振り返つて見るとボートは龍骨を上に向けて、さかさになつて漂うてゐた。　けれどもヒラリオンの姿は片影も見えなかつた。　どこを見てもゐなかつた。

私は石で以て頭を撲ちなぐられでもしたやうに、恐怖の急痛が心臟を射し通した。　私は痙攣に襲はれてそのまゝ沒んで了つた。

土地監理人のイェゴール・ティトヴが野原を横ぎつて驅けつけて來た。　彼はボートが轉覆してヒラリオンが水の中に消えたのを見たのであつた。　私がぶく〳〵沈んだ時には、彼は已に川岸へ來て着物を脫ぎ捨てゝゐるところであつた。　彼はそれから私を救ひ上げてくれた。　けれども、ヒラリオンはその晩になるまで見附からなかつた。

三

その懷かしい親切な人は亡くなつて了つた。　そして陰鬱と冷たさとが不意に私の上に落ちて來た。　みんながヒラリオンを埋葬したときには私は病氣になつて寢ついてゐたので、私があれほどまでに愛してゐた人に最後の尊敬を拂ふことが出來なかつた。

私は再び立ち歩けるやうになるや否や、早速最初の墓まゐりをした。　私は涙を流すことすら出來ないで、そこへ坐つてゐた。　それほど私の悲痛はひどかつた。　私は記憶の中に彼の聲の響きを思ひ返した。　すると彼の言葉は再び生き返つて來た。　あゝ、親しみを以て私の頭へ手を置く只一人の人は今はもう此世にはゐないのであつた。　すべてが見馴れない、遠くはなれたものになつて了つた。　私は目を閉つてそこに坐つてゐた。

不意とだれだか私のところへやつて來て、手を取つて私を起したものがある。　見ると、それはティトヴであつた。

『お前こゝにゐたつて仕方はない。　私について來いよ。』と彼は言つた。

かうして彼は私をつれ去つた。私は受動的に伴れられて行つた。途中で彼は言つた。

『小僧よ。お前には感心な心根がある。お前は自分の受けた親切を忘れない。』

さう言つて貰つたつて何も私に取つて大した慰めにはならなかつた。私は返事をしなかつた。ティトヴは續いて言つた。

『はじめお前が見附け出されたときに、結局私がこの子を貰はうかと私は一人で考へた。けれども私の行きやうが遲すぎた。併し今神さまはさうさせたいお覺し召しと見える。二度目にお前の命を私にお預けになつたんだ。だから、つまり、來て私と一緒にお暮しよといふんだ。』

けれど、そのときには、私は生きてゐようがゐまいが、又、どんなにして生きようが、だれのところで暮さうが、そんなことは私にはどうでも構はなかつた。だから私は、生活の狀態をそれからそれへと移つて、それに氣附きもしなかつた。

少らくたつと、今度の人たちにも氣が置けなくなつて來た。ティトヴは、兵隊のやうに極短く髪を刈つた、背の高い色の黑い男で、大きな口鬚を生やしてゐた。併し頬と

とは剃つてゐた。彼は恰も自分が一言でも言ひ過ぎるのを怖れでもするやうに、又は自分で自分の言葉に氣が引けでもするやうに、そろり〳〵口を聞く男であつた。いつも兩手を背中へやるかポケットに突つ込むかしてゐた。恰も自分の手を辱ぢてゐでもするやうであつた。私は村の百姓が、――その行政區一般でもさうだけれど――みんなで彼を厭がつてゐるばかりでなく、二年前にはマリニナといふ小さい村で彼をうんと引つぱたいた事があつたのを知つてゐた。彼が、いつもピストルをポケットに入れて歩き廻つてゐるといふ事も人から聞いた。彼のかみさんのアナスタシヤ・ヴァシリエヴナは慢性の病氣さへなかつたら、綺麗な女なのだけれど、いつも痩せてゐて、貧血性な顏に附いた大きな目が熱病のやうな光りを持つて輝いてゐた。そして苦しさうな表情をしてゐた。二人の間には私より三つ年下な、オルガといふ一人の娘があつた。この子もやつぱり非常に色の青ざめた、弱い子であつた。

彼等の周圍はすべて非常にしんとしてゐた。床の上には厚い絨氈が敷かれてゐて、こといふ足音も聞えなかつた。だれもかれも殆んど口を聞かなかつた。聞いてもたゞぞ

つとした調子でやるのであつた。壁にかゝつた柱時計すらもちやんと考へて音を立てた。聖徒たちの畫の前にはいつもランプが點いてゐた。最終の審判だの、使徒たちの殉難だの、拷問臺の上で拷問されてゐる聖バーバラだのと、いろんな畫像がそこいら中に貼りつけてあつた。片隅のストーヴの側の腰掛の上には、光澤のある煙色の牡猫が全で自分のぐるりの靜かさを見張り護つてゐでもするやうに、綠色の目をして、すべてのものをじろじろ見廻してゐた。私がこの壓せられるやうな沈默の中にゐて、ヒラリオンの歌や、二人で飼つてゐた謠ひ鳥のことを忘れ得るやうになるまでには長い間かゝつた。

ティトヴは田地の監理をする事務所へ私を連れてつて、そこの事務を私に敎へ出した。私は全力を盡した。私はティトヴが、どんなにぢいつと私のする事を見守つて私を試してゐるかを見た。それも、私から何物をか期待してゐもゐるやうに默つてさうしてゐるのであつた。私は氣が置けて何だかもじ〳〵された。

私は未だ曾て愉快な氣分を見たことのない人間ではあるけれども、このときこそは私は全くがつかりし切つてゐた。だれ一人と一話し相手もなかつた。それに自分でも一寸も

口を聞く氣もなかつた。ティトヴとおかみさんとは私にヒラリオンの事を聞いたけれど、私は彼のことを餘んまり彼等に語りたくなかつた。そんなことを人に話すのは何だか神聖を瀆しでもするやうな氣がした。

私の心は陰氣であつた。痺れて沈んでゐた。ティトヴ一家の生活は、彼等の訝かしい沈靜と共に、私には全く厭であつた。私は熱心に敎會へ通ひ出した。そしてそこの小使や今度の番僧なぞの手助けをした。今度來た番僧は學校敎員の階級の人間で、綺麗な若い男であつたが、怠けものゝ卑屈屋で、坊さんの手にキッスをしたり犬のやうにその後を追うて走つたりするやうな奴であつた。彼は單に私が彼と同じやうに敎會の儀式に通じてゐて、何事をも言ひ附通りにちやんとやつて行くのが氣に喰はないといふだけで以て、全で何の理由もなしに私をがみ〳〵言つた。

凡そこの前後から私の生涯での重要な時期が始まつた。私は信仰家になつた。

或時夕方の禮拜前に蠟燭の手くばりをしてゐると、私は聖母とその幼兒とが、畫像からぢつと鋭く私を熟視してゐるのを見た。私はしく〳〵泣き出して、膝まづいてその二人

の前に祈禱をした。ヒラリオンのために祈つたのだつたと思ふ。どれだけの間さうして祈念してゐたか知らないけれど、私はそれで慰められた。私の心は輝いた。私は私の中に開かれた新しい生活を感じた。

ヴラッシは禮拜堂で忙しく何かやつてゐた。そして分のわからない小下りもしないことをぶつ〳〵つぶやいてゐた。私は彼の傍へ行つた。

『何といふ嬉しさうな顔をしてるんだらう。お祝でも拾つたのかい？』

彼は私の顔を見てかう言つた。私には彼がそんなことを聞くわけが解つてゐた。私はこれまで屢々床の上で金を拾つたことがあるからであつた。けれどもこのときには彼の言葉は、丁度彼が私の心臓を突き刺してでもしたくらゐ私を悲しませた。

『神に祈つてゐたんだよ。』と私は答へた。

『どの神さんに？こゝには神さんは百體よりもつとござるよ。けどもどこに生きた神がゐるだらう。木で彫つたのでない、本當の神はどこにゐるのだい？さ、行つてさういふ神を探して來い。』

彼はかう言つた。もとよりほんのつまらない冗談だといふことは十分解つてゐても、そのときばかりは不愉快であつた。ヴラッシは殆んど足の動かない老人であつた。膝の關節を挫いたのでいつも竹馬に乘つて歩く人のやうに、よろ〳〵してゐた。彼は齒が一本もなく、顔と言つたら古襤褸のやうに黑くて、爛れた二つの目が突き出てゐた。この老人の死を司つてゐる天使は非常に老いぼれ果てゝ、この殆ど腑の抜けた、狂人じみたばかりつぶやく老練者に手を貸してやる程の力もないらしかつた。

『私は小使ぢやない。家畜の世話人だ。牧者だ。私は牧者に生れて來たんだから、牧者で死ぬんだ。もうこの敎會にはゐたくない。こゝをよして廣い野原へ行つて了ふつもりだ。』

こんなことを彼は言つた。彼が、生れてからそのとき迄家畜の世話をしたことがないのは誰だつて知つてゐた。

『敎會といふものは墓場のやうなものだ。死んだ場所だ。けれども私はこゝから、生きたところへ引き出されるのだ。私は家畜の群の番をするんだ。私の先祖はみんな羊飼な

んだ。私だつて四十二の年までは牧者だつた。』

彼はかう言つた。そのときにまだ存命でゐたヒラリオンはこの老人を笑つて、ふざけてかう言つた。

『昔家畜の神さまがゐた。ヴオロスといふ神さまだ。これがお前の先祖ぢやないのか。』

ヴラッシはヒラリオンにヴオロスに就いて知つてることを一々話させた。そしてヒラリオンが話し了るとヴラッシは言つた。

『それだ〳〵。私はもう前から私はだれかといふことはちやんと知つてゐた。だけどあの坊さんが怖かつたんだ。番僧よ、このことはあの人に何んにも言つてくれるなよ。時が來たら私が自分で言はうよ。さうだ、私が言はう。』

老人は私にひつこく言つた。私は彼の頭の狀態は分つてゐながらも、彼が言つたことが腹が立つた。

『神さまの罰を受けないやうに要慎するが好い。』

と私は言つた。けれども彼は吃りながら言つた。

『私は自分が神さまだよ。本當だ。』

すると彼は不意に足臺に躓つまづいて、もつとで倒れかけた。私はそれを天からの徵號だと解釋した。

私はその日から教會の事と言つたら何に對しても一々燃えるやうな熱心に充ちた。私は私の子供心のありたけの熱心を以て自分を捧げた。私の目には教會に關係あるあらゆる物がみんな神聖であつた。聖畫や禮拜用の本ばかりでなく、蠟燭や香爐や、香爐の中の炭までが私には至愛に感ぜられた。私はすべてのものに、歡喜と畏怖との交ざつた心持を以て近づいた。禮拜堂へ這入ると、心が穩かになつた。そしてそのたゝきの石をでもいつなりと接吻し得るのであつた。私は神の目の後光の漲つた中に生きてゐるやうな氣がした。神は私の歩みを導いて下され、超人間的の力を以て私を掩護し、そして、人間が神の外は何物をも見ないやうに二つの目を眩惑させられてゐるその神聖な光りを以て私を溫めて下さつてゐるやうに思はれた。時々私は、ぐるりがすつかり暗くなつて了つても、たゞ一人教會堂に殘つてゐる事があつた。私の心は輝いた。その中に神が宿つて

お出でだからであつた。且つ、そこには子供らしい悲痛や、人が私に加へた非行に對する恨みや、それから人間の生活の部分、要素たるやうな物は全て容れられる餘地がないからであつた。人間は神に近づけば近づく程、心はます〳〵人間から遠のけられて行くといふ事をよく言ふ。これは眞實な言葉である。勿論それはその當時の私にははつきり解らなかつた。

私は宗教的の書物を讀みはじめた。實際私は手に入り次第に何でもかでも一々讀んだ、讀んで行くにつれて、私の心は、神の言葉の美の、優麗な音樂を以て充たされた。私の魂はその妙なる露を貪り飲んだ。そして感謝深い涙の泉がそこから熱く湧いて出た。

私は屢々、會衆が來るより前に、教會へ行つて、三味一禮の記號の前に投げ伏して、何の考へる事もなく、祈りもなしに、思ふさま、そして謙虛に私の涙をあふらせた。それは、私が本當のところ、何一つ神に求める事もなく全て我慾なしに神を畏敬して居たからであつた。

私はヒラリオンが言つた言葉を考へた。

『お前が唇を以て祈るときには、お前は神に向つて祈るのではなくて空中へ祈るのだ。神は人間と違つて、お前の言葉でなくお前の思つてることを視て下さるのだ。』沈默の祈禱、

ヒラリオンはかう言つた。けれども私はそんなときに物を思つた例がない。只跪づいて、歎ばしい讃美歌を殆んど口の内で謠ふばかりのことであつた。そして、私はこの世界に一人ぼつちでゐるのではない、神のぢき側にゐるのだ、神の保護の下にゐるのだといふ事を認めて非常に喜んだ。

それは私に取つては光輝ある一時期であつた。平和と愉悅との樂しい時であつた。私は、ぐるりに何の騷音もなく私語きさへもなしに、たつた一人教會の中にゐるのが大好きであつた。さうやつてゐると、私のすつかりの精神がその靜けさの中に上へ昇つて行つて、言はゞ雲の上までもさまよひ上るのであつた。その高みからは人間も見えなければ、人類を思ひ出させるやうな物さへも何一つ見えなかつた。

けれども、私の專念は年老つたヴラッシが、風に搖すられた樹木の蔭のやうに振へ乍ら、齒のない口でつぶやいて、板石に沿うてのそり〳〵足を引摺つて歩くので妨げられた。

『私は本當にこゝで何の用事があるのだらう？　こんな仕事が私のすべきものだらうか。私は神だ。地上のすべての家畜の牧者ぢやないか、ね、おい。私は明日は野原へ行つて了ふんだ。この寒い暗いところで何をしてゐなければならないのだらう？　これが私に當て嵌つた仕事だらうか？』

こんなことをヴラッシはつぶやいた。私はさういふ神を瀆す言葉は全く不愉快であつた。私にはそのとき、彼が神の殿堂の清淨を汚がしてゐるやうに思はれたからであつた。且つ神は自分の神聖な寺院の中でこんな老人を見たら悲しまれるに相違ないといふ氣がしたからであつた。

私の信仰と宗教的熱心とは、教區の坊さんが私を見ると鼻息をはげしくし出して、彼の特別の祝福を與へてくれる位に著しいものであつた。その祝福を受ける間、私は坊さんのいつも冷たく汗ばんだ手を接吻しなければならなかつた。私はこの坊さんが非常に神の奇秘に通じてゐるのは羨ましかつたけれど、嘗て一度もこの人を好いたことがなかつた。いつも怖かつた。

併しティトヴは、顏の上に釦紐のやうに見えてゐる小さなどんよりした目で以てだんだんと注意深く私を見調べるのであつた。だれもかれも私を硝子かなぞのやうに要愼深く取扱つた。小さなオルガは一度ならず、

『ぢやあなたは聖徒になる積りなの？』と私に言つた。私はこの女の子に親切を盡した。或は聖徒たちの話や宗教上の話なぞをして聞かせた。それだのに彼女は私にはひどくはにかんでゐた。冬の晩には私は「ブローログ」とか「ミネイア」といふやうな信仰上の本の抜萃を讀んで聞かせた。戸外には氷りつくやうな雪嵐が野原を横ぎつて吹き狂ひ、壁に撲ち當り呻き咆つた。室内には沈默が漲つてゐた。だれ一人動くものもなかつた。ティトヴは頭をこゞめてゐて顏が見えなかつた。アナスタシヤは目を見張つてぢつと私を見つめた。小さいオルガは夢の中にうとうとしてゐた。そして霜が罅れると、ふつと目を開いてぐるりを見廻し、私を見て大人しやかに微笑んだ。時々オルガは、私の讀んでゐる本の中の、或表現が解らなくてその意味を私に聞いたりした。オルガの美しい小さな聲が室を充たした。それがすむと再びすべてがひつそりとなつた。たゞ外の方で、さ

ら〜〜と鳴る翼を搏いて、休み場を探しでもするやうに野原を横切つて急いで行く雪嵐が、悲しい音を立てゝ反響してゐるばかりであつた。

私の心にはあの、神のために闘つて生と死とに於て共に神の力と崇厳との證を立てた聖徒たちが至愛に感ぜられた。人類に慈惠を施した柔しい同情深い聖徒や懺悔者たちも私に深い印象を刻んだ。けれども、神のためにこの世を棄てゝ洞穴や沙漠の中に住んで、惡魔の誘惑と苦闘してゐる人たち——圓柱の上で苦行する僧や隱遁者——だけは私には譯が解らなかつた。

ヒラリオンは惡魔の存在を否定した。けれども私は、惡魔はゐるにちがひないと思つた。聖徒たちの生涯がその證據である。惡魔がゐなければ『人間の墮落』といふことが解らなくなつて來る。ヒラリオンはたゞ神のみを、全智全能な、打ち勝つことの出來ない、この世界の只一人の創造者として信じてゐた。けれども、それなら醜怪と兇惡とはどこから來たのだらう。セイタンがあらゆる怪異な兇惡なものゝ製作者であるといふことは聖徒の傳記で明白である。神は櫻實を造つたが、惡魔は毬を造つた。

併し梟を造つたのは惡魔である。——

私は惡魔といふものゝ本性をかういふ風に考へた。

つまりかうである。私は惡魔がゐるといふことは認めても、彼が私の信仰に關係があるといふことは否定した。のみならず私は彼を少しも怖ろしく思はなかつた。惡魔は私に、兇惡といふものゝ存在を説明するに役立つた。併し同時に私は、彼に於て神の偉大さの減却を見た。そのために彼は私の厭惡を昂らせた。私はそんな問題なぞは考へ込まないやうに出來る限り努力して見た。けれどもティトヴはいつも私に罪惡や惡魔の力を考へさせた。

例へば、私がデイビッドの頌歌の一節で、この王が自分の人間的の弱所を懺悔するところを讀むと、ティトヴは直きにかう言つて反對した。

『だから彼もやはり罪惡を犯し〜〜したのだ。併も彼は神のお氣に入りだ。つまり惡魔の方が彼より强かつたんぢやないか。そんな王のやうな人ですら惡魔には勝てないとして見れば、我々どもの如き憫れな人間たちが惡魔に反抗して何をし得ようかい。』

彼は屢々かういふ題目に話を導いた。私は彼の言ふ事が解らないながらにも、彼の話はいつも私には不愉快であつた。さうしてゐる間に百姓たちは私の信心深いことをますます喋り合つた。ティトヴはよく私の耳に私語いた。

『マトヴよ。私と私の家のみんなのために熱心に祈つてくれよ。本當にお願だから祈つてくれ。さうしてくれゝば私がお前を私のうちへ引き取つて養つてやつた報いになるんだ。』

それが私にどういふ結果を興へたらう。――このときまでは私の祈りには何の目的もなかつた。私はたゞ鳥が太陽に向つて歌ふのと同じやうに神に祈つてゐた。けれどもそれからといふものは、私はティトヴやおかみさんのために祈るやうになつた。そして、もうその時にはしとやかな、いぢらしい、しほらしい娘になつてゐた小さいオルガのためには、全心を注いで熱烈に祈つた。私は詩篇の作者ディビッドの詞や、それからその他の私の知つてゐるだけの祈禱の詞で神に願つた。それらの韻律的な高い響のある詞句を繰り返すのが私の只一つの喜びであつた。けれども全く奇態なことには、私は自分の祈りの

中でティトヴのことを言つて。

『おゝ神よ。あなたの大いなるお情で、あなたの下僕イェゴールの上に恵あらせ給へ。』

と祈るや否や、私の心は譬へば冷たくなつた。私の熱心な信仰の流れは不意に停止した。私の歡びの輝きは鈍つて來た。そして私は神の前に出てゐるのが恥しくなつた。否、私はもうそこにゐることが出來なかつた。

私は聖畫の中の神聖な顔を見ないやうに視線を下げた。そして半ば悲しみ半ばさまり惡く立ち上つた。私はどこからこんな感情が出て來たのだらうかと考へて困惑した。それを知らうと試みたけれども解らなかつた。私はティトヴのために心に祈禱の歡びが亡くなつて了つたのを悲しんだ。

四

村のもの等はます〳〵私のことをにかまひはじめた。

私が日曜日や休日に外へ出ると、人々は好奇心を以てぎろ〳〵私を視た。私に向つて眞面目に挨拶するものもあり、笑ひながら言葉をかけるものもあつた。けれどもだれ一人私を注視せずに擦れちがふものはなかつた。

『おい見ろよ。例の祈禱賣りがやつて來るぜ。』

と或ものは言つた。

『いようマトヴ、お前は聖徒になるつもりなんだらう？　おい。』

『笑ふもんぢやないよ、子供等よ。この人はまだ坊さんぢやないんだから金儲けのために神を信じやしない。』

『もと百姓だつた聖徒はゐないかい？』

『何んでもよい事はみんな我々から出て來るのだ。けども情ないことにはそれは私等に

何の足しにもならないや。』

『それぢやあれは百姓かい？　あの子は小さい私生兒の貴族だぜ。』

彼等はこんな事を半ば冗談に半ば惡意で喋つた。

私はそのときには非常に奇態な心持になつてゐた。私はすべての人類と仲よく生きて行きたかつた。そしてみんなに親切にして貰ひたかつた。私はその望みを遂げるために出來得る限りの事をした。けれども私の善意は何の足しにもならなかつた。サベルコ・ミガスは私を嘲弄つた。彼は私を見るとすぐ膝を突き、平伏して、こんなことを言つた。

『私はあなたさまの前に平れ伏します。どうぞサベルコを叩き壞さないやうに神さまに祈つて下さい。どうしたら神さまのお氣に入るんだか、そこんとこを私は非常に知りたい。全く泥棒をやめるべきものか、それとも、慥な良心を以てもつと盜人をして、その上で蠟燭を一束燃やして私の魂を救つてもいゝものでせうか？』

人々は笑つた。けれども私は彼がこんなところで嘲弄しなくもよいことだと思つていやであつた。併し彼はしやあ〳〵して言い續けた。

『正教派の皆さん。この信心深い若い人の前に頭をお下げなさい。――この人は事務所では巧く百姓たちを欺してゐるにはちがひないが、でも一方では百姓たちの嘆きを神さまのところへ屆かせないやうに、讃美歌を謠つて邪魔をしてくれてゐるんだ。』

私はその時十六であつた。だからそんな嘲弄の詞に對してはサベルコの口の上を挫ける程撲ちなぐるだけの御馳走なら十分出來たらうけれど、併し私は彼を相手にしないでゐた。するとサベルコはそれと知つて尙餘計に侮辱するやうになつた。彼は歌を一つ作つた。そして休日にはバラ、イカに合せてそれを謠ひながら街々をぶらつき廻つた。

『若いおしやれのとこの戸口に棄てられた赤ん坊が、
早速拾ひ上げられて、おまけに、
百姓たちを卷き上げ得る、
神聖な平和な家を見附けた。』

歌は非常に長かつた。あらゆる人のことが這入つてゐた。特に私とティトヴのことが讀込んであつた。サベルコは私には非常に亂暴な眞似をした。それだから、彼が、ちよ

つぴりした鬚と禿た頭をして、帽子のふちを耳の上で無遠慮に反くり返らせてやつて來るのを見たゞけでも、私は手足が一々振へた。私は彼に突つかゝつて、あいつの皮膚の中のすべての骨を一つ〳〵挫いてやりたくてたまらなかつた。

けれども、私は年は若かつたけれど、すつかり感情を押へてゐた。彼が口の中でうん〳〵謠ひながら私の後を歩いても、私は彼の惡口を氣にしないやうな風を見せて、何にも聞えないものゝやうに徐かに向うへ歩いて行つた。

私は祈りより外には何一つ私の精神を護つてくれるものがない事を感じたので、尙餘計に祈りに熱中した。併しもうそのときには私が神に訴へる哀願の中へ、いつしか激しい言葉と非難とが這入つた。

『おゝ神よ。どうしてあなたはこんなにひどく私を試みるのですか。私の父や母が私を棄てゝ生垣の中へ小猫のやうに投げ込んだといふのでもつて、私がお咎めを受けるのですか。』

私はその外に何の罪があるとも思はなかつた。私は人間が、自分〳〵の特別な仕事と

各人に取つて法律ほどの力を持つてゐる銘々の習慣に心を奪はれて、生活の海岸にごつた返しに投げ捨てられてゐるのを見た。そのときの私に、自分と、世間や一般の人類との關係が解り得る譯がない。

併し私は段々と深く物事を學びはじめた。私の心中の煩悶がますます苦しくなつて來たからであつた。

私たちの貴族領地の持主のコンスタンティン・ニコライエヴィチ・ロッセヴは大きな田地を持つてゐる金持であつた。彼は、私たちの住んでゐる土地へは滅多に見向きもしなかつた。私たちの小さい村は彼の家族から不凶な場所と思はれてゐたからであつた。ロッセヴの母人はこの村でだれとも分らぬ暗殺者に絞め殺された。彼のお祖父さんに當る人もやつぱり同じこの村で馬から落ちて死んだ。それから彼のおかみさんが駈落をしたのもこゝからであつた。私はその主人を見たのはたつた二度だけしかなかつた。その人は背の高いがつしりした人で、金縁の眼鏡をかけて、士官の着る外衣と赤で縁を取つた帽子を着てゐた。人の噂では、彼は宮庭でも高い位地にゐる人で、廣くものを讀んで居り、いくつも本を書いてゐるといふ事であつた。彼はいろんな場合にティトヴをうんと叱りつけた。それのみでなく。彼の顔に拳骨をさへ振つた。

ティトヴはソコル村の管理に關係してゐる只一人の重要な人間であつた。田地は大きくはなかつた。穀物は監守人のために必要なだけしか作られなかつた。殘りの地面は百姓たちに貸してあつた。そこへ、土地の賃貸は再續させるな、それよりも、近傍へ紡績工場が出來たから亞麻を蒔けといふ命令が出た。

事務所には私の他にイヴアン・マカリッチ・イューディンといふ、打ちとけ惡い性格の男が一人つとめてゐた。彼は嘗てしらふでゐた例しがなかつた。これまでは電信技手をやつてゐたのだが、飲んだくれるので解雇されたのであつた。この男がすつかりの會計を預つてゐた。それから通信文を書いたり百姓たちとの契約書の下書をしたりした。怖ろしく默り込んでゐる男であつた。だれが話しかけても、たゞ肯頭いて、一寸ばかり含み笑をやるだけで、

『よろしい。』と答へるのが精々であつた。

彼は背の低い痩せた男で、顔が圓くぶくぶくしてゐた。目が殆んどあるかないか分らないくらゐであつた。頭は全て禿げてゐた。そして丁度盲目のやうに、足の指先で、音をさせずによろよろと歩いた。

カザンの聖母祭の日に、百姓たちが彼を杜格子酒でづぶろくに醉はせた。そのために彼は死んでしまつた。それで事務所には私がたつた一人になつた。私はオルガに手傳つて貰つて、ティトヴから年四十留の俸給を受けて、すつかりの仕事を一人でやつた。

私は已にその前から、百姓たちが、狼が餌をあさつて罠のぐるりをうろつき廻るやうに、事務所のまはりをうろうろするのに氣がついてゐた。狼には罠がちやんと目に見える。けれども飢えてゐる。そこへ餌がおびきよせる。それで彼等はそれへ嚙りつくのである。

私は事務所でたゞ一人になつて、すつかりの帳面やすべての仕組に接して見ると、まだほんの少しばかりの經驗にも係はらず、田地の管理が、全て素面の泥棒仕事だといふことがすぐ解つた。百姓たちは過大な重荷を背負はされてゐた。だれもかれも借金に纏はれ

てゐた。そして自分自身のためでなく全てティトヴのために働いてゐるのであつた。私はそれを見て愕いたとか、それを恥かしく感じたとは言ひ得ない。私はサベルコが、私がどうもしないのにいつも私を極めつけたり罵つたり侮辱したりした譯がそのとき解つた。さういふ泥棒を教唆したのは私だつたらうか。

私はティトヴが自分の使用人を騙して、出來る限り自分のポケットを充たしてゐるのに氣附いた。私はその前には、私がゐなくてはティトヴが困るのだと感じたので、彼に對していろんな勝手な眞似が出來た。そして今その譯が解つた。彼は神の目から自己の惡事を隱すために私が要るのであつた。

ティトヴとおかみさんとは神の前へ出ては、一緒に縛りつけられた二匹の馬のやうに、頭をこゞめて歩いた。二人は、その苦痛な怯懦の下に、窃盗よりもつとひどい罪惡を隱してゐるやうに見えた。私はティトヴの手が氣に喰はなかつた。いつもかも兩手を隱してゐる。それが恐ろしい疑惑を促した。恐らくはその二つの手は人を一人絞め殺したのかも分らなかつた。血がついて汚れてゐるのかも知れなかつた。

『マトヴよ。　私たち二人の罪人のために祈つてくれよ。』

夫婦はいつも、かう言つてゐた。

『あなた方はほかの人よりも餘程罪が深いんですか？』

私は或日押へ切れなくなつてかう叫んだ。　アナスタシヤは溜息をして引き下つた。　けれどもティトヴは私に返事もしないで他の方へ行つて了つた。

彼は家にゐてはかみさんや娘に餘り口も聞かないでいつもぢつと考へ込んでゐた。　口を聞いても只事務上の用事のことだけであつた。　彼は百姓たちを口にかけて侮辱することは少しもしなかつた。　けれども、彼等に對して傲慢なことは凌辱よりもより多く人をひかつかせた。　彼は百姓たちに對して少しも讓歩しなかつた。　一度かうと言つたら、全で腰のところまで土の中に埋められでもしたやうに、固くそれを意地張り通した。

『この事はわれたちのいふ通りになつておやりでなけやいけません。』

或時私は彼に言つた。

けれども彼は答へた。

『いゝや決して一インチたりとも讓いてはいけない。　さうしないとあいつ等はエルふんだくるよ。』

また或時にはティトヴは私に計算をいゝ加減に拵へさせようとした。

『それぢや違つてゐるぢやありませんか。』と私は言つた。

『當りまいさ。』

『そんなことをしては罪惡です。』

『だつて罪惡を犯すやうにお前を强ひてるのは私だよ。　お前が私を强ひてるんぢやない。私の言ふ通りを記入しとけ。　だれもそれに對してお前に説明を求めるものはゐやしない。お前は只私の手の代りをするだけだ。　そのためにお前の信心深いといふ評判に障りが出來るなんて心配するなよ。　お前は私だつて他のどんな人間だつて月十留の月給で以て正直に活計ていけるものぢやないといふ事は解つてる筈だ。』

『ふん、この騙りの惡者め。』と私は一人心で思つた。　それから構はずかう言つてやつた。

『もう澤山です。　こんなことは止さなくちやなりません。　かういふ恥づべき事をするの

をお止めにならなけや私はあなたの惡事をすつかり村中のものに言つ附けて了ひますよ。』

すると彼は鼻の上まで口鬚を引つ張り上げ、肩を耳の所まですぼめ、齒をむき出して、目を圓くしてぐる〳〵廻しながら、私の顏を見つめた。二人はどちらが力が強いか互に狙ひ測つた。

『お前は本當にそんなことを村の奴に喋る氣かい。』

彼は低い聲でかう聞いた。

『えゝ。言つた通り。』

ティトヴは笑つた。彼の笑ひ聲は片手一ぱいの銀貨を床に投げつけたやうに響いた。

彼はそれから言つた。

『よろしい。小さい聖徒よ。ほんとに俺はさうすべき筈だつた。これからは萬事これまでと違つたやり方でやつて行かう。小錢なんぞに氣を揉まないで金貨にこびりつかうよ。泥棒といふものは、もう何にも盜むものがなくなると正直にならうと試みるものだ。』

彼は出て行つた。そして窓硝子がびり〳〵する程ぴしやりと戸を閉めた。

それからといふものはティトヴはこれまでよりか正直にやるやうに見えた。併しそれはすつかりあてには出來なかつた。けれども、もかく彼は私を安心させた。

彼は非常にけちな男であつた。自分のしたいことは一寸も抑へてはゐなかつたにしても、金の値打はよく心得てゐた。彼はいゝ暮しをするのが好きで、そして女が大好きであつた。彼はだれでもかれでも拇指の下に押へてゐたので、村で彼のいふことを拒まうとする女は滅多にゐなかつた。彼は娘たちには手を出さないで結婚した女にばかり目を附をつけた。彼はいくども私を墮落させようと試みた。

『何でそんなに自分を抑へてるんだい。大膽にお前の幸運を捉まへろよ。女を捉まへるのは施しになるんだぜ。こゝらあたりの女はどいつもこいつも皆戀がしたくつて堪らないんだ。あいつらの亭主は弱いやくざな奴等だ。さういふ奴が何に適かう。ところがお前は綺麗な顏をした逞しい若ものだ。だから滅多に刎ねつけられはしないよ。』

このならず者には、どんな惡行にでも都合のいゝ理窟がつくのであつた。

或時彼は私に言つた。

『マトヴ、何を考へ込んでるんだい。　お前のやうな信心深い男なら神さまをどうにでも出來やしないかい。』

私はそんなことを聞かれるのは厭であつた。

『知らない。』と私は答へた。　彼は一寸考へて、それから言葉を繼いでかう言つた。

『例へばさ、神はロットをソドムから導き出したらう。　それからノアを救つた。　けれども他の何千といふ人間は火と水とで殺されたんだ。　併も「汝等殺人をなすべからず」と書いてある。　私はよく、さういふ何千人の人間は、何のことはない、その中の二人のものが、正しく、そして神を怖れてゐたために死んだのだといふ氣がするよ。　神には、自分が與へた酷しい命令にも係はらず、或ものはちやんと神聖な生活をし得るといふことが分つたのだ。　ソドムに正しい人間が一人ゐさへしなかつたら、神には、自分の掟を守り得るものはだれもないといふ事が分るのだ。　そしたら恐らく、あれ程澤山な人間を死刑にはしないでみんな許してやつたかも知れない。　それでもやつぱり我々は神をこの上もな

い慈悲深い方だと言つてゐる。　けども今の例で言へばどこに神の慈悲があるだらう。』

私はそのときには、ティトヴが、たゞ罪を犯す言ひ拔けを目つけようとしてゐるのだといふことが解らないで、彼の言つたのを聞いてひどく忿り出した。

『あなたは神を瀆すことをお言ひだ。』と私は答へた。

『あなたは神を怖れてゐるばかりで、神を愛してゐやしない。』

すると彼は兩手をポケットから出して、さつと後ろへ廻した。　そして眞青な顏になつた。　彼が忿つてゐるといふことがあり〳〵分つた。

『さうだかどうか私には分らん。　たゞ私は、神はほかのものゝ罪を測る尺度にお前たちのやうな信心深い人間を使つてるんだと思ふだけさ。　お前たちがゐなかつたら神は罪を裁判するのに面喰はあ。』

彼はこんなことがあつてから、當分しばらく私を見向きもしなかつた。　けれども私の心には、彼に對する押へ難い憎みが增大した。　私はサベルコよりもずつと彼の方が憎かつた。

私は晩に祈りの中で彼の名前を言ふと、私の心は怒りに燃え上つた。私が初めて自分で作つた祈りの言葉でかう言つたのはそのときであつた。

『おゝ神よ。私は盗棒に恵みをかけて下さいと願ひはいたしません。どうかそんな人間を罰して下さい。盗棒に刑罰も受けずに貧しい人たちのものを強奪させないで下さい。』

私はティトヴの運命が心配になつた程、熱情的に彼の不爲ばかり祈つた。

それから間もなく私は再びサベルコに會つた。彼は私がたつた一人でゐるところへ樹の内皮をくれろと言つて事務所へやつて來た。

『サベルコ。お前はどういふ譯でいつも私をからかふのか。』

私はかう言つた。すると彼は齒をむき出して、例の刺き通すやうな目で私を覗き込んだ。

『別に大した用事ぢやない。たゞ木の皮を少々貰ひに來たゝけだ。』

私の兩脚は振へた。私の手の指は無意識にぐつと握られた。私は彼の喉をつかまへて輕く彼を搖すぶつた。

『私がどんな惡いことをしたい。』

彼は愕きも怒りもしずに、たゞ私の手をつかまへて、私でなく彼の方が強い相手でゝもあるやうに、喉からその手をはづした。

『お前だつて喉をしめられてゐちや口は聞きにくいよ。はなしてくれ。私はもうこれまでに厭といふ程撲ちのめされた人間だ。だからもうお前に撲ぐつて貰はなくも澤山だ。それにお前は殊に人を撲ちなぐつてはならない筈だぜ。そんなことをしては神さまの誡めに反くわけだ。』

彼は低い聲で冗談のやうに徐にかう言つた。

『この事務所に何の用事があるのか。』と私は叫んだ。

『木の皮を少しばかり。』

彼に口を聞かせることが出來ないのを見ると、私の怒りの發作は了つた。私はたゞこの野郎から侮辱され押しどけられたといふことを感じたゝけであつた。

『併しお前たちは何といふ惡い獸だらう。兩親が棄て子にしたといふだけで以て世間

のものが人を侮辱することがどうして出來る。』

私はかう言つた。彼は一々石を投げるやうなあてこすりを私に投げつけた。

『おゝこの詐欺師。何といふいたづらものだい。

こちとらには吠える聲で犬だと解るぢやないか。

貧乏な奴らが顔をかくしてゐる間に

お前は盜んだ麵麭で肥えて行く。』

『お前は嘘つきだ。私は働いて私の食ふ麵麭の切れを得てるんだ。』

私はかう叫んだ。

『昔話にあらあ。だれだつて多少は面倒も見なくちや鷄の一匹だつて盜めないとさ。』

彼は惡魔のやうな嘲笑を以て私を見た。そしていたはるやうな聲で言つた。

『あゝマトヴよ。お前は先にはどのくらゐいゝ子だつたらう。それに今ぢやお前は書記だ。神を輕蔑する男だ。そしてロシヤ中のすつかりの盜棒と同じに、總ての人間が不幸にして揃つて長い手を持つてゐないといふ事を土臺にして、お前の宗教を立てゝゐる。』

私は彼を事務所から追ひ出した。私は彼のあてこすりの意味を知りたくもなかつた。そして私はやつぱり自分を本當の神の下僕だと考へた。そして人の判斷よりも、自分自身の判斷の方をより多くあてにした。私は心の中では淋しく不安であつた。そして私の精神的の力が段々と衰へて行くのが感ぜられた。

私は神に向つて人間に對する不平は言はなかつた。そんなことを言ふのは餘りに卑屈なので私には出來なかつた。私は僞善者ではなかつたけれど、自分自身を非難すべき點を一つも持つてゐなかつた。私の精神は、神が讀んで下さるやうに開いた書物であつた。私はアバラズクの聖母の畫像の前に膝まづいて、ぢつとその顏を見つめた。天に向けてさし上げてゐる、その細そりした兩手のところまで見上げた。すると、一つの蔭が默つて畫面の上にそつと廣がつて、氷のやうな息で私の心に觸れたやうな氣がした。それからは私と神との間に、目に見えぬ奇態な何物かゝ介まつた。そしてそれが苦痛を以て私を充たした。私には祈りの歡びがすつかり亡くなつて了ひ、悲しみが私を捉へた。オルガが側にゐてくれる事すら慰めにはならなくなつた。

五

オルガは段々と親切に私を見た。私はそのときは十八で、髪の褐色な青い顔をしたきれいな若者であつた。私はオルガにもつと接近したかつた。けれども、私はまだうぶだつたので極り悪さに妨げられた。村の女たちはそのために私を笑つた。時にはオルガにすら微笑が見えるやうな氣がして苦悶した。が一方では、私は恍惚となつて、

『あの子ならそれこそいゝ女房になるんだがな。』と思つた。

私は事務所ではいつも全一ん日つゞけて、オルガの側に默つて坐つてゐた。ときゝ、オルガは事務上の事で私に質問をした。そして私は答へた。二人の話はそれだけに限られてゐた。オルガは若い赤楊樹のやうな、美しいきやしやな女で、夢のやうな青い目をしてゐた。そのしとやかに陰氣なところが非常になつかしく可愛らしく見えた。それが私には奇態に思はれた。或日オルガは私に言つた。

『マトヴさんはどうしてそんなに陰鬱におなりになつたの？』

私はこれまで自分自身のことを人に話したことはなかつた。このときでも沈默を破りたくなかつた。ところが不意に私は自分の心を開いて、私の悲しみの原因をすつかりオルガに打ち明けた。——私が自分の兩親のことではづかしく思つてゐるといふこと、私が人の嘲弄物だといふこと、それから私の心の寂しさや慘さ、オルガのお父さんについて世間の人が言つてることをも話した。私は自分自身については何んにもこぼしはしなかつた。たゞ私の最も秘めてゐた考へを彼女に知らせたゞけであつた。そんな考へは私にはそれこそ澤山すぎる程積つてゐた。そしてそれはどれもこれもつまらないものであつた。それがどんなに下らないかを考へると自分でも悲しかつた。

『私は僧院へ這入つた方が徐つぽどましだ。』

私はかう言つた。オルガの顔には蔭が横切つた。彼女は顔をうつ向けたまゝ何とも答へなかつた。オルガの沈默は私を悲しくしたけれど、彼女の悲しみは嬉しかつた。

それから三日して、オルガは私に呼いた。

『あなたはそんなに世間の言ふことを氣になさるのは間違ひだわ。だれだつて全く自分

一人のために生きてるのぢやありませんか。それはあなたは今はこの世の中にたつた一人ぼつちで入らつしやるにはちがひないけど、一家をお持ちになつたらだれも要りやしません。さうなつたら自分の家で自分の棟下で他のみんなの人のやうに暮してお行きになるんですもの。私の父のことは裁判しないで下さい。だれ一人あの人を好く人がないのは私だつて知つてゐます。ですけど、あの人がどの點が他の人たち以上に惡いのか私には解りません。世界中どこへ行つたつて愛といふものには出會はないぢやありませんか？』

オルガの言葉は多くの慰めに充ちてゐた。私は事務にかけてはいつも手早くものごとの極りをつけて行くやうに、この場合にも、廻りどほく持ちかけないでてきぱきと言つた。

『私と夫婦になつてくれないか？』

『えゝ。』と、オルガは脇の方を向いて私語いた。

そのことは極つた。翌る日には私はオルガと互に愛し合つてゐることをティトヴに告げた。

彼は笑つて口鬚を撫でた。そして私を苛め出した。

『では家の婿にならうといふんだな。それは譯はないことだよ、マトヴ。だれが聞いたつて神さまのお示しだと思ふだらう。私は婚約には反對はしない。お前はしつかりした、慎み深い逞ましい若者だ。いつも俺たちのために神に祈つてくれてゐる。どの點から言つてもお前は寶玉だよ。これはお世辭のないところだ。併し人といふものは安樂に暮して行くには實務が解らなくては駄目だ。ところがさういふ方面へかけてはお前の性質は不完全に發達してゐる。之がまづ第一の障碍だ。第二の障碍は、お前は二年立つたら兵役がかゝる。その義務に服さなけやならない。お前が金を少しばかり、まづ凡五百留にしろ蓄めてゐれや、免除して貰へもしようがそいつは駄目だらう？——私はそこんとこを甘くやつてやるんだつたんだが……けども金がないとなればお前はオルガを女房とも寡婦ともつかないまゝにして出て行かなけやならない。』

彼のばかげた言ひ草は私をひどく怒らせた。彼の口鬚は振へた。そして兩の目には綠色の光りがちらめいた。私は兵役なるものが意味する事柄を考へ畫いた。それを考へる

と恐ろしくそして厭になつた。私がどんな兵になるだらう。兵營でいつも大勢のものたちと一緒に暮さなければならないといふ事だけでも私には厭だ。醉どれ、下種ばり、喧嘩なぞは言ふまでもない。私には兵役が厭なものだといふことが解つてゐた。ティトヴの言葉で私はすつかり悄げ込んで了つた。

『それぢや私は僧院に這入る外仕方がありません。』と私は言つた。ティトヴは笑ひながら、

『もうそれは遲いよ。直ぐ坊さんにはしてくれやしない。見習僧になればやつぱり徵集されるんだ。駄目だよマトヴ。お前の運命を遁れるには賄賂を使ふより外仕方がないんだ。』

『そんなら金を下さい。あなたには金は澤山あるんだ。』

私はかう答へた。

『ハツハそれがお前の小さい計畫かい。問題は私がそんなことを好くかどうかだ。お前はかういふことを忘れないでくれよ。私はそれこそひどい罪惡を犯して私の金を拵へたんだ。ひよつとしたら、その金を得るために自分の體を惡魔に賣つてるかも知れないの

さ。私が罪惡の泥の中を涉つてゐたのに引きかへてお前は正直な生活をしてゐた。そして尙これからも私の罪惡に負擔させて正直に生きて行きたいといふんだ。罪人が脊中へ乘せて運んで行くなら信仰深い人が天國へ這入るのはざうさはないや。だが私の帳簿がお前の踏み臺に使はれちやたまらない。それよりかお前も一緒に罪惡をやる方が餘つ程氣が利いてら。神はお前を許してくれるだらうと思ふ。お前はたしかにもう前以て神の許しを受けてゐるに違ひないもの。』

私はティトヴを見た。すると彼は不意に私よりも頭と肩だけ上へ突き出てゐるやうに思へた。そして私は彼の足下にへたばつてゐるやうな氣がした。私は彼が私を嘲笑してゐるのが解つたので、話を途切つた。その晩私は彼女の父が言つた言葉をオルガに話した。オルガの目には涙がちらついた。そして耳のはたの小さい青い血管が脈を打ち出した。その脈動は私の心に反響を見出した。けれどもオルガは微笑みながら言つた。

『いろんな事が思ふとほりに行かないのね。』

『けども終ひにはすべてがちやんとよくなるよ。』と私は答へた。私は考へもなしにさう

言つたのであつた。併し已に婚約は結んでゐる。そしてそれを破ることは厭であつた。

その日から私は不正直な生活を始めた。それは長い放蕩のやうに、暗い兇惡な時期であつた。私は丁度、出火のためにぼかんとなつて烟の雲の中をぢたばたしてゐる鳩のやうなものであつた。私はオルガを戀してゐて、オルガを女房にしたくても思ふやうにならないのが情なかつた。殊に一番不愉快だつたのは、ティトヴが私よりもより強くそしてより頑固なのを認めた事であつた。私の自負心にはそれが別つたのが堪らなくなつた。私は彼のいろんな惡事と惡い根性とに對して彼を賤しめてゐたのに、今は彼の中に私を征服する力があることを見出した。

村中のものは直に、私がオルガに結婚を申込んで拒絶されたことを知つて了つた。娘たちはそれで以て私を笑つた。女たちは噂をし合つた。サベルコは思ふさまにあてこすりを浴びせた。それはみんな私の感情をむか〳〵させるやうな言ひ草ばかりであつた。私の心は搔き亂された。私の精神はまるで暗黑の中に投げ込まれた。

私は祈りをしてゐると、ティトヴが私の後に立つてゐるやうな氣がした。彼の息が私

の頸にあたるやうに感ぜられた。それが私の祈りの力から敬虔を奪ひ、そして祈りをかき亂した。私は少しも神に歡喜しなかつた。私の考へは自分がこれからどうなるだらうかといふ、自分の俗事にばかりに向けられた。

『神よ。私を助けて下さい。そしてあなたの道から迷ひ出ないやうに私の魂が罪惡に沈まないやうに私を敎へ導いて下さいまし。あなたは大きな力のある方であります。そして同情に充ちてお出です。それだからあなたの下僕を惡魔から保護して下さい。そして誘惑に反抗して鬪ふ力を與へて下さい。敵の誘ひが私を打ちまかさないやうに、またあなたの愛の力の疑が私を滅ぼさないやうにお願ひいたします。』

私はかう叫んだ。

私はそんなにして、自分の下らない日常の累らひについて私の援助者となつて貰ふやうに、神さまをその言ひ盡し難い美しさの頂きから引き下ろした。そして神をそんな風に辱めておいて自分自身は賤しい卑陋に沒んで行つた。

オルガは日に〳〵いれ惱んで痩せて行つた。私は假にオルガが他の男と暮らしてゐる

ところを考へようとした。　けれども彼女の一生の配偶者として私自身より外には何人をも考へ畫くことが出來なかつた。

人間といふものは自分の愛の力によつて、自分自身の中にもう一つ別の自己を創造するものである。　だから私はオルガが私の心を了解し私の考へを讀んでくれ、そして私が私自身に取つてなくてはすまないやうに、私に取つて缺くべからざるものであることを信じた。　彼女の母はこれまでよりも一層陰鬱になつた。　そして涙と溜め息を通して私を見入つた。　けれどもティトヴは彼の脈らしい兩手を隱して私のぐるりを音を立てないでうろつき廻り、私の頭の上をまひ〳〵した。　丁度、烏が死にかけた犬の上をさうしてゐて、犬が息を引くと直ぐにその目玉を引き拔かうとしてゐるときのやうであつた。　已にものゝ一月ばかりも經つたのに、私には成行がすつかりもとのまゝであつた。　私は、言はゞ斷崖になつた谷のはしへ來てそれを横ぎるすべを知らないやうなものであつた。　私の心は苦しくそして悄げ沒んでゐた。

或日ティトヴは事務所へやつて來て、低い聲で私に言つた。

『ね、おい、マトヴ。　こゝにお前のためにいゝ機會があるんだ。　お前一人前の男になりたかつたらこの機會を攫へろよ。』

その好機といふのは、つまりかういふことであつた。　それは百姓たちが澤山の金を損をし、地面が僅かの儲けを上げ、そしてティトヴが二百留ポケットに入れるのであつた。

彼はそのやり口を私に說明した。　そして言つた。

『どうだ。　やる度膽があるかい？』

彼がちがつた聞き方をしてこの問ひをかけたなら、私は彼の罠には落ちなかつたのだけれど、彼のさう言つた言葉が私をそゝつた。

『盜棒をやるだけの勇氣ですか？　盜棒するには勇氣ぢやない卑劣な性根さへあればいゝんです。　よろしい、そんなら二人で盜みませう。』

私は答へた。

ならずものは笑つてかう言つた。

『そしてその罪は？』

『私の罪は私が自分で責を負ひます。』

『そんならよしだ。ぢやいゝかい、これから一日〳〵がお前を結婚へ近づけて行くんだぜ。』

彼は言つた。彼はかういふ風にして丁度お伽噺にある狼と子山羊との場合のやうに、私がばかになつてるところを罠にかけたのであつた。

それから二人はやりはじめた。私は事務にかけては頭があつた。そしてこれまでいつも大膽にやつて來た。二人は競走して百姓たちを騙しはじめた。全で二人で將棋をさしてゐるやうであつた。彼が一つ突いて來ると私はまた一つもつと思ひ切つて動かした。二人は默つて細工をした。そして互に顏を見合つた。彼の目は反諷を閃かした。私の目は狂熱を以て輝いた。彼は私との爭鬪に勝つてゐる。私はすつかり敗北したのだから、今度こそは彼に引けは取りたくなかつた。殊に不正直にかけては負けまいと思つた。私は亞麻を賣れば目方を胡魔化した。家畜が保管されると賠償金を着服した。實際のところあらゆる工夫で百姓から小錢を搾り取ることばかり狙つてゐた。併しその金は一寸も

自分では取らないで、みんなティトヴのポケットの中へ滴れ込ませた。無論それが私をも不幸な百姓をも救ひはしなかつた。

手早く言へば、私の生涯のその期間には私は寧ろ氣狂であつた。私はがつかりして息が窒つた。神のことを考へると、私は全で燒き焦されてゐでもするやうな氣がした。私は一度ならずこんな事を言つて神を責めた。

『なぜあなたはあなたの强い手で私の墮落を防いでは下さらなかつたのですか。なぜあなたは私の力の叶はないところまで私を試みたのですか。おゝ神よ、あなたには私の魂が滅びて行くのが見えないのですか。』

オルガまでが私には赤の他人のやうに思はれる時さへあつた。私はオルガを見て、非常な悲痛を以て考へた。

『不幸な少女よ。お前のために私は自分の魂を撲ち壞してゐるのだ。』

さうしたあとで私は自分で恥かしい氣になつて、オルガを出來るだけ親切にやさしくしてやつた。けれ共忘れて貰つては困るが、私は、自分自身やオルガに對する憫れみからで

はなくて、たゞ私がティトゥを壓伏し得ないといふ事と、否でも應でも彼の意志に從はせられてゐるといふのが腹が立つばかりで以て、自分自身を苛責したり齒がみをしたのであつた。私は彼が幾度となく信仰深い人々について言つた言葉を思ひ出すといまはしかつた。

彼は大恐悅でかう言つた。

『おい、小さい聖徒よ。お前さんは自身の隱室を求めてゐたが今その時が來た。お前さんがかゝみさんを持つと私たちの家がぎつしり詰まりすぎる。お前たちが子供を生むからな。』

彼は私のことを聖徒だと言つた。私は默つてゐた。

彼が私をさう呼ぶのが段々としげくなつた。併しオルガはます〳〵情合深くやさしくなつた。オルガには私がどんなに悲しんでゐるかゞ解つてゐた。

そのときティトゥは、自分の味方に引き入れてゐた、ロッセヴの代理人にねだり附いて少しばかりの地面を貰つた。彼はそこの貴族宅地のぢき後に一寸した一區劃の地面を貰つて、私たち二人のために小さい家を建てはじめた。私はといへばやつぱり引きつゞき

百姓を騙したり押へつけたりしてゐた。間もなく私にはすべてが思ふやうになつて來た。金もたまつた。家も建つて、小さいオルガの這入る鍍金をした鳥籠のやうにぎら〳〵と輝いた。屋根も已に出來上つた。たゞストーヴさへ附ければいゝので、秋までには棲まはれる手順になつてゐた。

或夕方、私はヤキモヴカといふ村で或百姓たちの家畜を借金のかたに取つて、家へ歸りつゝあつた。そして丁度小樹林へ這入りかけてゐると、私の家が、日沒のときのやうに蠟燭の如く燃え立つてゐるのが見えた。

私ははじめはそれを太陽の反射と間違へてゐた。その赤い光りが家をぐるりと包んで火焰を空へ上げてゐるのだと思つた。ところが人が逃げ走つてゐるのが目についた。そして焰が飛び散つたりぱち〳〵いふのが聞えた。

私の心は殆んど引き裂けるばかりであつた。私は神が私の敵であることを認めた。もし手近に石でもあつたら、天へ向けて投げつけたところであつた。私は自分の不正直の果實が煙と灰とになつて空へ上るのを見守つた。その光景に自分自身のからだも燃え上

つた。

『おゝ神よ。　あなたは私が塵芥と灰とを得るために私の魂を撲ち壞いたのだといふことを見せる積りなのですか。　私はそれを信じません。　私はあなたの屈辱を願ひません。あの家が燃えるのはあなたの意志ではなくて、百姓たちがティトヴと私とを憎んで火をつけたからです。私はそれがあなたのお怒りの結果だと信ずるのを拒みましても、それは、私がそんなことをされるいはれがないからといふのではありません。　あなたがお怒りになるのはあなたに不相當だからです。　あなたは私が危難に陷つてゐるときに、誘惑に抵抗し得るやうに、弱い私にあなたの助けを下さることをお拒みになりました。　ですから私でなくてあなたが惡いのです。私は人が暗い森に這入るやうに罪の路に這入りました。　罪は私を取り卷きました。　それをどうして振り放すことが出來ませう。』

併しこんなはけた言葉は私を慰めもしなければ、正當の理由を與へもしないで、却つて私に神を瀆す侮蔑の心を燃やした。

私の怒りが滅び盡くさない内に、私の小家は燒け果てゝ了つた。　それでも私は尙木によりかゝつて、私の怒りを助成しながら、森のはづれに立つてゐた。　その間、オルガの青い顏が、涙を浴び悲しみにやつれて私の目に浮んだ。

私は傲慢になつて、恰も神が私と同等のものかなぞのやうに言ひかけた。

『もしあなたが强いとしたら私もやつぱり强いものになりたい。　それは全く公平な正當なことだ。』

火事は消された。　すべてが再び暗くそして沈默になつた。　たゞ、二枚の火の舌が丁度子供が泣き止めたあとでしやくり上げるやうに暗がりの中にちら〳〵した。　それは曇つた晩であつた。　川は野原に忘れ遺された曲つたびか〳〵する刀のやうに輝いてゐた。

私はそれを握んで大地の上をびゆう〳〵鳴るやうに空中に投げつけたかつた。

私は夜中時分に村についた。　オルガと父親とは、明らかに私を待ち設けてゐる樣子で、貴族宅地の戸口に立つてゐた。

『どこにゐたんだ。』とティトヴは言つた。

『丘の上でぢつと火事を見てゐたんです。』

『何故やつて來て消さないのだ。』

『私は奇蹟を作り出すことは出來ません。あなたは恐らく、私が唾を吐けば火事が消えたんだと思つてお出でなんでせう？』

オルガの目は泣いて赤くなつてゐた。そして體は煙と煤とで黑くなつてゐた。オルガのその容子は私を笑はせた。

『一生懸命に働いたのかい？』と私は言つた。

オルガの答へはたゞ涙だけであつた。ティトヴは不氣嫌にかう言つた。

『私はこれからどうしたらいゝか解らない。……』

『もう一度家を建てはじめなけやいけません。』と私は答へた。私はいきなりその場所へ角材を引きずつて來てすぐにも家を再築したくてならなかつた。神の意志に對抗して鬪ふことは出來ないにしても、併し、神が自分に反抗してゐるかゐないかを見極めたかつた。

掠奪の仕組が更に初まつた。狡計と欺策とにかけては私はあらゆる企みをやり盡した。

昔は夜一と夜を祈りに明かした事がいくどもあつた。けれども今はどうしたらもう一留ポケットに入れることが出來るかと考へ込んで起きてゐた。さういふ考へが私の頭を占領して、その他のすべてのものを入れさせなかつた。併し多くの涙が私ゆゑに流されたといふ事も、私が幾つとなき飢えた口から最後の小食片を引つたくつたといふ事も、それから恐らくは幾人となき子供が私の貪慾のお蔭で飢え死をしてるといふことも知つてゐての上であつた。私がその時いかに貪慾であつたか、そしてそれでもまだ自分の惡を瞞り得たといふことを考へると、氣分の惡い厭な心持がする。

聖徒たちはもとのやうに情ある憫れみ深い目をして私を見下ろしてはくれなくなつた。そして丁度オルガの父親のやうに私に偵索の眼付を投ずるやうに思はれた。或ときには私は區長の事務所から半留の金を盜み出した。私はそのくらゐまで墮ち下つた。

或日實に珍らしい出來事が持ち上つた。オルガが儼へやつて來て、私の肩へそつと手をかけて言つた。

『マトヴさん、私はほんとうにこのすつかりの世界よりももつとあなたを戀してゐます。』

オルガはこの光輝ある言葉を、飾りのない言ひ方で言つたので、子供のいたはり親しむ語調のやうになつかしく響いた。私は傳説の中の英雄のやうに私の力が復活するのが感ぜられた。そしてその瞬間からオルガは私には限りなく可愛くなつた。この女が私を戀してゐるといふことを口に出して言つたのはこれがはじめてであつた。私はそのときはじめてオルガを抱いて情をこめてキッスをした。それで以て二人の魂は一つになつた。信仰深い熱心を以て祈りをした早い日のやうに、私は自分の箇性を忘れて了つた。

二人の小さい家は十月の朔日までには出來上つた。その朔日は聖母の執成の祭である。二人の家は材木に燒けあとがついてゐるのがあるためにまだらに見えた。間もなく二人の結婚式が擧げられた。そのときには私の義父は非常に醉つた。そして機敏な冗談を言つては、それこそ無暗と笑つた。併し母親は一言も口を聞かないで、涙を通して私たち二人に微笑んだ。

『おい〳〵、何でお前はめそ〳〵してるんだい？　手本にするほどの婿が出來たんぢやないか。え、おい。本當の聖徒が。』

ティトゥは叫んだ。

お客はこの界隈での重だつた人がすつかりであつた。教區の坊さんは勿論のこと、その行政區の長官や二人の理事や、その他いろんな歴々の人たちであつた。村のもの等は家の窓の下に集つた。その中でサベルコが特に目に立つた。彼は年は取つてゐても、相變らず快活な人間だといふ評判を失はなかつた。

私は、窓のところに坐つて、彼が六絃琴をやたらに鳴らし立てるのを聽き入つてゐた。そして彼の突き刺すやうな聲が聞き取れた。彼は私を犧牲にした彼のおどけを餘り高い聲では得う言はなかつたにしても、それでも私には彼がかういふ句節を謠ふのがはつきり聞えた。

『お前の分け前を、むしや〳〵喰ひ、ふんだくれり、飲めよ。
酒宴を開いて體が割れるまでがぶ〳〵飲めよ。』

そのときは彼の嘲弄が私には面白かつた。併し私はオルガが側へ寄り添うて私の耳に呟いたので、彼のことにかゝはつてゐる間がなかつた。

『こんな食べたり飲んだりするのがすつかり濟んでしまつて欲しいわ。』

オルガにはそんな亂食をぢつと見て居るのがかなはなかつた。私でさへさういふ光景が厭であつつた。

やつと二人きりになると、私たちはどちらも急に涙になつた。そして互に抱き合つて寢床の上に坐つて、いひ分のない結婚の狂喜する程の幸福の中に、泣いたり笑つたりした。私たちがまだ寢入らない間にもう朝になつた。けれども二人は接吻をしてこれから先の計畫に就いて話し合つた。二人はお互に顏が見えるやうに蠟燭を點した。

『みんなの人から好かれるやうに暮しませうね。マトヴさん私はあなたと一緒に暮すのがほんとに嬉しい。』

二人は言ふに云へない幸福に醉つた。そして私は言つた。

『お前が私のどんな咎のためにも涙を流してくれるなら、私は神さまにひどいことをされても構やしない。』

するとオルガは答へた。

『私はあなたに何でもして貰つてよ。そして氣の毒なさびしいあなたに母とも姉妹ともなつて上げるわ。』

六

オルガと私とは嬉しい夢のやうな生活を送つた。私は終日事務所で働き自分の仕事をして、何にも目に這入らず、何を見ようとも思はないで、急いで女房のところへ歸つて來た。そして二人で森や野をくゞつて一緒にさまよつた。

私は自分の子供の時代のことが思ひ出された。私は鳥を捕つた。この時にはあらゆる事が結婚式の鐘のやうに樂しかつた。鳥籠がいくつも壁にかゝつてゐた。そして鳥が謠つた。おとなしい私の家内はそれらの小鳥が大好きになつた。私が夜家へ歸つて來ると、家内はいつも、トムテットがどんなことをしたか、ホーフィンチがどんなに謠つたか、それを私に話した。

晩には、私は「ミネイヤ」や「プローログ」のところ〴〵をオルガに讀んで聞かせた。けれどもそれよりも、私の子供のときの色んな話をして聞かすことがもつと多かつた。ヒラリオンやサベルコの話や、二人がどんな風に、神に讃美歌を謠つたり神に就いて話し合

つたりしたかといふことや、そのときにはもう死んでから二年になる、ばかな老人のヴラッシのことなぞを話した。私は自分の知つてゐる總てを話した。私がいろんな人や鳥や魚なぞのことを非常に澤山知つてゐたといふことは疑ひなかつた。

私は自分がいかに幸福であつたかを、口では言ひ盡すことは出來ない。それに、私のやうにこれまで歎びといふものを殆んど知らない人間――その極めて少しの歎びを、それもほんの僅かの間だけしか味はなかつた人間には、とてもその幸福を描敍することは出來はしない。

二人は一緒に教會へ行き、一と隅に並んで坐つて、一緒に祈りをした。私は神に頌讃と感謝の祈りを捧げたけれど、それも窃かな誇りを持つてやつたのであつた。私は神の力に打ち勝つて、不本意ながらにも私を幸福にするやうに强ひつけたやうな氣がした。だから私は神を讃めたのであつた。

『おゝ神よ、あなたはよくおやりになつた。そしてあなたにふさはしいやうに正義を實行なさつた。』

ほんとに、何といふ哀れな異端であらう。

その冬は、眞に幸福な一日のやうに何事もなく過ぎた。或日オルガは、母親になるのだといふことを私に打ち明けた。それは私たちに取つては一つの新しい喜びであつた、私の養父は何をかぶつ〳〵一人ごとを言つた。併しお袋はやさしい同情を持つてオルガを見た。私はそのときから或る自立を得ることに就いて考へはじめた。そして、蜜蜂を飼ふことに極めて、自分に幸福を持ち來たすやうに、その蜂の巣にヒラリオンといふ名前をつけようと決心した。それから野菜畠を掘へたり謠ふ鳥を捕るのを熱心にやることにした。そんなことは人に何の損害をもかけはしない。

或日ティトヴは私に向つて非常に荒々しく言つた。

『マトヴよ、お前はどつちかといへば甘くなつて了つたぜ。その内ぢき酢つぱくならないやうに要慎しろよ。お前は今度の夏にはおやぢになるんだつてことを忘れたのかい。』

私はもういつからか、彼に、その當時私に理解つてゐるだけの、ほんとの事實を言ひたかつた。だから私は自分の心を話して聞かせた。

『私は自分がやらうと思つただけの悪い事はすつかり行りました。罪悪にかけてはあなたと同じ平面まで來ました。そしてそれがあなたの注文でした。けども私はあなた以上の悪い人間になりたかありません。』

『それはどういふ意味だか俺には解らない。』

彼はかう答へた。

『俺はたゞ、年に七十二留の收入では一家をさゝへて行くのに骨だといふことがお前に解らせたいだけさ。俺はお前に、俺の娘の持參金をやたらに使はせない積りだから、そこんとこはちやんと覺えてゐろよ。お前のその悪だくみは、たゞ私がお前よりか腕があるといふばかりで以て私を怨んでしてる事だ。そんなことをしたつてどちらにも何の得にもなりやしない。だれだつてまだ地獄で焼かれない間は聖徒と言へるんだよ。』

私はもう少して彼をうんといふ程撲りつけるところであつた。併し私は、手を控へてゐるのは六つかしかつたけれど、でもオルガのためにぢつと怺へてゐた。

村では、私が養父と仲がよくないといふ事が皆んなの間に話された。人々はそのため

に、尙更私に同情してくれた。私はといへば幸福が私の氣質を直してくれたのであつた。そしてオルガもやつぱり親切心が深かつた。私は百姓たちにこれまでの償ひをしはじめた。私は彼等の或ものを助けたり、又、或人たちのいろんなことを見遁してやつたりした。村といふものは丁度硝子張りの家のやうなものだ。一つ手を動かしても一々それが人の目につかずにはゐない。

『お前はもう一度神に媚び入りたいのかい？』

ティトヴがこんなことを言ひ出したのも免れ難い事であつた。

私は永久に事務所を辭かうと決心した。そして家内に言つた。

『月に六留だもの。それくらゐは鳥で儲ける。もつと儲ける。』

私の小さい女房はそれを苦にしてゐた。

『二人が乞食にならない限りは何んでも好きなやうになさい。私はお父さんが氣の毒です。あの人はあなたのことを思つてるんですもの。私たちのために、いろんなひどい罪を犯したんぢやありませんか。』

『あゝお前よ、私はあの人の親切を受けなくても充分すむんだ。』

私は心ごかう言つた。その翌日私は事務所の方をよさうと思つてるといふことを義父に話した。

『お前は兵隊に出たいんだらう。』

私は湯傷でもしたやうに彼の前に立つた。彼が私に十分あたんをし得るといふことが直ちに感附かれた。彼の多數の知人を以てすればわけもないことであつた。選り取られて聯隊に入れられでもしようものなら、それこそ破滅である。ティトヴは自分の娘のためを思つて私を救つてくれるやうな人間ではない。

輪索が私の愛着してゐる頸にかゝつてだん〳〵ときつく引き締められた。家内は竊に泣いた。そして目を赤くしてそちこちした。

『どうしたのかい。オルガ。』

『氣分が惡いんです。』

彼女はかう答へた。私はこの女に誓つたことを思ひ出して、恥辱と困惑とに充たされ

た。私は嚴とした決心を以て闘つたけれど、女房のことを考へれば悲しかつた。オルガさへゐないなら、私は軍隊に這入つて、それで以てティトヴから逃れたいのだけれど、オルガがゐてはそれも出來なかつた。

六月の末頃に二人に男の子が生れた。私はそのために再び長い間氣が氣でなかつた。それは難産であつた。オルガは叫び苦しんだ。私は彼女を氣遣つて心もはり裂けるばかりであつた。ティトヴはしかみ面をしてゐた。そして頭をうなだれて、貴族宅地の階段にすがつて彳ずみながら、體を振はせ兩手を捻絞つて、ぶつ〳〵獨り言を言つた。

『オルガが死ぬよ。…あの子が死んだら私の今日までの生涯はすつかり誤りになつて了ふのだ。…おゝ神よ。どうぞ哀れんで下さいまし。マトヴよ、お前子供を持つたら私の悲しみと私の生涯とが分る。そして人の罪惡を怒鳴るのを止めるよ。…』

私はその瞬間には、本當にティトヴのために悲しかつた。私は大きな家のぐるりを廻り歩いた。そしてこんなことを考へた。

『おゝ神よ、あなたはまたしても私を脅しつけてお出でになる。あなたは再び私に手を

お下しになつた。あなたは、私がこれまでの生活を改め正しい路を見附るだけの時間を許して下さらなければうそです。なぜあなたはあなたのお慈悲にけち〳〵なさるやうになつたのです？　あなたのすべての權力はあなたの御親切でどうにでもなるのぢやありませんか。』

私はかう言つたのを思ひ返すたびに、いつも、自分のばかだつたのに赤面されるのである。

子供が生れると、私の女房は變つて了つた。彝がこれまでよりしつかりして來た。頭をのし上げてつんとした。そして私との關係に於ても變化が目立つた。彼女は私の食べる一口づゝの食片を數へた。全く卑しくなり切りもしなかつたが、それでも貧乏人へものをくれてやる度數が先よりは少なくなつた。そして私に何んなものでも借りをしてる百姓のことを一々さう言つて所つ中私を突ついた。ほんの五六留でも、あの女には、それを私に考へ出させる價値があるらしかつた。私ははじめは、たゞ一時の狂望だと思つてゐた。その頃は私は鳥の商ばいをどん〳〵やつて、月に二度も町へ籠を持つて行つ

た。そして出かけるたんびに五留ぐらゐづゝは取つて來た。私たちは牝牛が一匹と、一ダースの鷄を持つてゐた。それ以上に何が要つただらう。

けれどもオルガの目には不愉快な表情が現はれて來た。私が町から物を買つて來てやると無駄だつて小言を言つた。

『そんなことをしたつて何の足しになるでせう。それよりかそれだけのお錢を貯めとい た方が餘つ程ましだわ。』

私は陰鬱になつた。だから慰めのために、これまでよりも尙熱心に小鳥捕りをやつた。私は森へ行つて網や罠をかけといて、地びたへ大の字に轉がつてしづかに口笛を吹いたり多く考へたりした。心がぢつと穩かになつて、何んにも欲しくなかつた。たゞ一つの考へが芽を出して私の心に觸れ、そして湖水に沈められた石のやうに、不知の世界へ消えて行つた。その渦が私の奥底の精神を通して振へた。それは神についての考へであつた。

さういふ時には、私は、光り輝いてゐる空や、ずつと向うの青い色の果てや、黄金の秋の仕着せや銀色の冬の着物を着て光つてゐる森の中に神を見た。川や野や丘や、星や花

の中にも神が見えた。綺麗な物は何んでも私には神聖に思はれた。神聖なものは、すべて魂と血つゞきのやうに思はれた。人間のことを考へると、私の心は、眠りを愕かされた鳥のやうにぞつとした。私は非常な不安と疑惑とを持つて人生を默想した。私には神の美しさは、とても人間の陰暗な慘ましい生活と調和させることは出來ないやうに思はれた。光榮ある神は、遙かの彼方に尊嚴と權威とを持つて帝王のごとくに坐つてゐる。けれども人間はといへば一緒に群がつて不幸と窮乏とに沈んでゐる。神の子等が何故に勞苦と飢餓との餌食になつてゐるのであらう。どうして彼等は、泥の中の蛆蟲のやうに凌辱されて地びたへ碎き潰されなければならないのであらうか。何故に、あゝ何故なれば神はそんなことをお許しになるのだらう。自分の造つた生き物が下げすまれてゐるのを見たつてそれがどうして神を嬉しがらせることが出來やうぞ。神を目に見、神の美を認めるものがどこにゐるだらう？　人間の靈は生活の陰黑な困窮のために盲目にされてゐる。飽き足れば歡喜だと思はれ、富が幸福と見做されてゐる。人々は罪惡を犯す自由を求めてゐる。けれども、罪から脫れる自由を彼等は未だ見たことがない。彼等のどこ

に天の父の愛の力があらう。どこに神の美があらう。つまり神がどこにゐるのだ？　神聖がどこにあるのだ？

と、不意に或前感それとなき仄かな豫知が、私の心に湧き上つて、あらゆるものを盡く叩き毀はし卷き込んだ。私の心は冬の地面のやうに冷たくなつた。私はそのときにはさういふ概念を敢へて言葉で言ひ現はさうとはしなかつた。けれどもそれが言葉を脱いだまゝ私の目の前に立つた時には、その力を感じた私は、丁度黑い巨鳥に突き出られた子供のやうに恐ろしかつた。私は飛び起きて鳥捕道具を取つて、急いで家へ歸つて行つた。私は自分の卑怯な恐怖から遁れようと思つて、自分自身を相手に歌を謠つた。

百姓たちは私を嘲笑し出した。鳥を捕る男は田舍ではばかにされてゐるからであつた。オルガは幾度となく深い溜息をついた。そして彼女までが私がそんな商ばいをするのを非難した。養父は私を叱つた。けれども私は何とも答へないで秋が來るのを待つた。私は多分徵兵を免れて、あの厭な目を遁れるかも知れなかつた。

家内は二度目の妊娠になつた。そして非常な陰鬱に陷つた。

『一たいどうしたつて言ふんだい？』と私は聞いた。オルガは始めには何でもないと言つてゐたが、或日しく〳〵泣きながら私の頸にとりすがつた。

『私はお產で死ぬんです。私にはちやんと解つてゐます。』

オルガはかう言つた。

女といふものはよくそんなことを言ふものだとは思つたが、それでも私は怖かつた。私はオルガを慰めようとした。けれども、私のいふことには耳を傾けようとしなかつた。

『私がさうなつたら、あなたはまた、だれ一人愛してくれるものもなく、たつた一人におなりになるんです。あなたはさうした交際ざらひな、きち〳〵した方ですもの。後生ですからどうか子供たちのためを思つて人に高慢ぶらないで下さいな。だれだつて神さまの目から見たらみんな惡いんです。神さまの目にはだれでもみんな罪人なんですから。』

オルガはよくこんなことを私に言つた。私はこの女が哀れでもあり心配にもなつて不安であつた。私はオルガの父と一種の休戰をした。すると彼は例のとほりに早速ぐんぐんそこをつけ込んで、『これに記名しろ』の『それは書くな。』と言つた。

私には非常に重大なことが問題になつてゐた。それは、間もなく新兵の募集がはじまることゝ再度子供の父になる期待との二つであつた。

村の新兵に這入るものたちはもう暴れはじめてゐた、彼等は私のところへ押しかけて來た。私が一緒に出て行くのを拒むと、彼等は私の家の窓を撲ち毀した。

私が籤抽をしに町に出て行かねばならない日が來た。そのときですらもオルガは家を出るのを怖がつた。併し養父が私について來てくれた。さうして、その途中をしまひまで、私のためにどれだけ骨を折つたかといふことや、私が彼に費をかけた金高や、彼がどんなに甘く萬事を取はこんでおいたかといふことばかり話しつゞけた。

『そんなことをしたつて、みんな無駄な骨折だつたかも知れない。』

私はかう言つた。

ところが偶然にも私は運のいゝ番號を引きあてゝ遁れた。ティトヴは最初には私がそれほど幸運だつたのを信じてくれなかつた。そしてあざ笑ひながら言つた。

『神さまがお前の味方をしてゐらつしやりでもするやうだね。』

私は返事をしなかつた。けれども私は言ふに言はれず嬉しかつた。兵役を遁れたといふことは私に取つては、私を壓へつけてゐたすべてのものから自由になるといふことであつた。殊に私の大好きな養父から縛りつけられてゐるのを遁れることであつた。

家へ歸るとオルガの喜びは非常であつた。可愛いあの小女は泣いたり笑つたりした。そして私が熊でも打ちとめた程賞めたりいたはつたりした。

『難有いことに、これで私は安心して死ねます。』

オルガはかう言つた。

私はオルガが自分を死ぬものと信じてゐるやうな氣がした。そんな事は自分の生活力を破壞する不幸な信念である。それだから私自身は全く困惑したけれど、口では彼女の恐怖を茶化した。

それから三月たつとオルガの產痛が始まつた。全二日の間怖ろしい苦痛になやんだ。そして三日目にオルガは死胎兒を產んどいて死んで了つた。私の哀れな、可愛い、いとしい妻は、自分で死ぬものと極めてゐたとほりに死んでしまつた。

私は長い間、盲目ごそして啞のやうな自分になつてゐたので、オルガの葬式のことは一寸も思ひ出せない。

さういふ狀態から私を目覺してくれたのはティトヴであつた。それはオルガの墓の側であつた。私はティトヴが私の前に立つて、私をぢつと見入りながらかう言つてるところを、今でもまだ心の目に見得る。

『とにかく、二人が死んでる人達の中で出會つたのはこれが二度目だ。私とお前が友達になつたのもこゝだ。二人はこゝでもう一度仲よくなつてはどうだ。』

私は雲から落ちて來たばかりのやうに、自分のぐるりを見廻した。雨が降つてゐた。葉の落ちた立木が鳥冠を搖ぶつてゐた。墓の上の十字架は、みんなぐるりの霧で茫んやりして、消えてゐた。景色は、霜ときつい濕氣に包まれて荒廢してゐた。私は雨と霧とが空氣を消し盡しでもしたやうに息が塞がつた。

『どうしろといふんです。あつちへ行つて下さい。私をそつとしてゐさせて下さい。』と私はティトヴに言つた。

『私はお前に私の悲しみが解つて貰ひたいのだ、神さまはお前のために私に罰をおあてになつたのかも知れない。お前が自身に當て箝つた生活をするのを私が妨げたから、それで私の娘を奪つてお了ひになつたのだらうよ。』

歩くと土が足の下に溶けて、べた〳〵の汚れものになつたのが私の長靴にごびりついて、ごつ〳〵いふ、ぱたつく音を立てた。

私はティトヴを撲んなぐつて、糠の袋かなぞのやうに地びたへ投げ飛ばした。そして彼に向いて怒鳴り立てた。

『こん畜生。ごろつき奴。』

そのときから私は狂亂の時期に這入つた。私は頭を上げることが出來なかつた。何だか、力强い手で打ち倒されて、どうすることも出來ずに地びたにころんでゐるやうな氣がした。私の心は苦悶に充たされた。そして魂は神に背いてゐた。私は聖像を見ると急いで遁げ出した。その時分には悔い改めることよりも口論や喧嘩の方がより多く好きであつた。

1921.1.21.

『おゝ神よ。それでいゝのです。あなたのお手は烈しいけれど公平です。あなたのお怒りはためにはなるが大きな怒りです。』

言ふまでもなく、謙遜に懺悔をして、かう言ふのが私に取つて正當だつたのである。

けれども私はさういふ言葉を、ちやんとした良心を以ては口へ出せなかつた。それだから私は、どうしていゝか解らないまゝで、考へもつれて惑ひ込んでゐた。

『多分あなたは、私が窃にあなたの實在を疑つてゐるためにこの苦しみを私に持つて來たのでせうよ。』

私はかう考へた。さう思うと非常に怖ろしくなつて言ひ譯がしたかつた。

『私が疑つたのはあなたの存在ではありません。あなたのお慈悲を疑つたのです。私には人間といふものが、あなたから助けても導いても貰へないで放つたらかされてるやうに思はれるんですから。』

これが私の頭の中で閃き燃えて私を苦しめた考へであつた。私は眠りも得うしないし、何をすることも出來なかつた。夜分には怪しい亡靈のために頸を絞められてゐるやうな

氣がした。オルガも目の前に出て來た。私は全く苦しさの餘りに、その先生きて行く力も亡くなつて了つた。

それで私は首を縊つて死なうと決心した。

それは夜であつた。私は着物もすつかり着たなりで横たはつて、寢床の上で轉がり廻つてゐた。私の心の前には、私の哀れな、罪のない妻が現はれた。そして青い目をやさしく光らせて、私を呼ぶのであつた。月が窓を通して輝いた。そのきら〳〵した反射が床の上に射すのを見ると、私の心は餘計に陰黑になつた。

私は飛び起きて鳥捕網についてゐる綱を取つた。そして桷に釘を打ちつけてわざを拵へて、椅子をちやんと置くべきところへ置いた。私は上着を脱いでシャツのカラーを引つぱりはづした。すると不意に小さいもの凄い顏がぼんやりと壁の表面に見えた。私は怖れに打たれて、もう少しで大聲を立てるところだつたが、と、それは自分の顏がオルゼの鏡に寫つたのだと解つた。私は髮はくしや〳〵で、頰は痩せ落ち鼻はしほれてゐた。そこへ息を塞がれてもがいてる人のやうに口を半分開けてゐたところは、全く狂人の相貌で

あつた。二つの目は深い烈しい苦悶に充たされて苦しさうに見するゐてゐた。

私はこの形相に、やさしみがすつかり亡くなつたのを憫んだ。そして腰掛にかけて、怪我をした子供のやうに、自分のそのさまを泣いた。すると、その大水のやうに涙を出した後では、さつきの綱が私にはばからしいものゝやうな自分自身の嘲笑のやうな氣がして來た。私は怒つてその綱を引つかき下ろして片隅へ投げつけた。死は全く、一つの新しい謎である。私はそのときこの人生の謎を解かうとかゝつた。

どうすればいゝのか解らない。もう已に二日の間といふものが過ぎ去つた。そして、私には、自分が欲しがつてゐるものは平和より外には何んにもないやうな氣がした。私は無理にでも自分に懺悔をやらせなければならないと、齒を食ひしばりながら考へた。それで坊さんのところへ出かけて行つた。

或日曜日の昏れがたに私は坊さんを訪ねた。すると、坊さんはかみさんと二人で坐つて茶を飲んでゐた。彼等の四人の子供が彼等のぐるりを取りまいてゐた。坊さんの黒い顏には汗の玉が魚の鱗のやうに光つてゐた。

『こゝへかけて茶を一杯お飲みよ。』と彼は親切に言つた。

室は暖かでそして明るかつた。そこいらにあるものはみんなきれいにきちんとしてゐた。私はこの坊さんが教會で禮拜をするときの等閑なやり口を考へ浮べて一人でかう思つた。

『たしかにこゝがこの人の教會だ。』

私は拂ふべき筈の謙讓を缺いた。

『ときにお前さんもおかみさんが亡くなつたのでさぞなさけないだらうね、マトヴさん。』

『えゝ、本當に情ないです。』と私は言つた。

『全くだよ。――ではお前さんは四十日の間あの人のためにお祈りをして貰つてやらなければいけない。あの人はお前さんの夢に出て來ますかい？』

『えゝ』と私は答へた。

『ではどうしても、今言つた新禱をやらせなくちやいけない。』

私は一言も言はなかつた。私はこの人のかみさんがそこにゐては口を聞くことが出來

なかつた。そのよろ〳〵した、息切れのする、大きなだるんだ顔をして、脂肥りに肥つたでぶ〳〵な女を私は殊に好かなかつた。この女はいつも高利で金を貸してゐた。

『オルガさんのために熱心に祈つてお上げなさい。嘆いちやいけない。嘆いては神さまに背くことになる。神さまは自分で自分のなすつて入らつしやることを知つてお出でになるんだ。』

彼はかう言つて聞かせた。

『本當に知つてゐられるんですか？』と、私はその時かう聞いた。

『それや當りまへさ。——あゝ〳〵、そんなことでは、いけないよ。——私はお前さんが人間に對してはどんなに傲慢だかよく知つてゐる。けれどもそのお前さんの傲慢を神の掟に反抗して持ち出すやうな向見ずをやつちやいけない。さうなるとお前さんの罰は百倍ひどくなるんだからな。これはヒラリオンの惡事の酵母がお前さんの中で醱酵してるのぢやないかな？　あの男は酒のために有害な邪教の中へ落ち込んだ。これは忘れちやいけないよ。』

彼は言つた。するとかみさんが脇から口を出した。

『あのヒラリオンこそは僧院に押し込めとくはずだつた男です。だけども親切深い家の人にはそんなことは出來なかつた。だから、一寸もあの人に對して手續をしなかつたんですよ。』

『それや違つてゐます。ヒラリオンはあなたの主人を不平がつてゐたんです。邪教のためぢやありません、あなたの主人が自分の職責を怠つてるからぶつ〳〵言つたんです。その點についてはあなたの御主人に罪があつた。』

私はかう言つた。

私たちは苛しい議論をはじめた。第一に坊さんは私を無禮だと言つて怒つた。そして私だつてちやんと彼が知つてるくらゐ知つてるやうな色んな事を彼は例證した。たゞ私に對する腹立ちでそれをこぢつけるのであつた。それから坊さんとかみさんと二人して私を罵詈し出した。

『お前とお前の養父とは盜棒の一對だ。』

彼等はかう叫んだ。

『お前たちは敎會のものをふんだくつてゐるぞ。モクリドルの乾草はずつとの昔から敎會のものだ。それだのにお前たちは私らを欺してそれをふんだくつたぢやないか。だから神がお前たちに罰を當てたんだ。』

『お前の言ふとほりだ。モクリドルは不正にお前たちから奪ひ取られたのだ。けれども、さういふお前たちはそのモクリドルを百姓たちから盜んだんぢやないか。』

私は歸つて行かうと思つて椅子を立つた。

『待てよ。』と坊主は言つた。

『四十日の祈りの禮金は？』

『そんな祈りが要るものか。』

私はかう言ひ返した。

そこを出ながら私は考へた。

『マトヴヨ、お前はお前の靈魂のためにいゝ慰藉を得たもんだ。』

それから三日たつて私の小さいサーシャは砂糖と間違へて砒素を嘗めて死んだ。彼が死んだつて私は何ともなかつた。私はあらゆることに對して全く感じのない、平氣な人間になつてゐた。

七

私はその頃、或大僧正の住んでゐる町へ出て行かうと決心した。その僧正といふのは信仰深い、學問のある人で、正教派の信仰の教理について非國教派の人たちと論爭するのが大好きであつた。そしてしつかりした判斷力を持つてゐる人だといふ評判を負うてゐた。

私は出て行くつもりだといふことを養父に告げて、私の家と、それから私の持つてゐるものをみんな渡すから、そのすつかりに對して百留くれないかと話した。

『それはいけない、そんな取極は問題にはならないよ。けども六箇月の期限で三百留の手形を書くなら百留貸してやらう。』

彼はかう言つた。

私は手形の裏書をした。そして旅行券を貰つて立つて行つた。

私はてく〳〵歩いて旅行した。さうしたなら、さだめし自分の心の苛立たしさも靜まるだらうと思つたからであつた。

私は懺悔をするつもりで出て行つたのだけれど、併し私は神のことは考へなかつた。半は、私が自分自身について考へることを怖れてゐたのと、もう一つには、私はまだ神に對して怒つてゐたからであつた。私のすべての考へは混亂してゐた。そして腐つた織物の斷片のやうにぼろ〳〵になつて了つた。私の空は陰氣であつた。

私は例の僧正に面會を得るのには非常に厄介な目を見た。最初私は入館を拒絶された。訪問者に應接する顏附のいゝ下僕が四度も私を追ひ歸した。

『俺は尊師の秘書役だ。俺に三留くれなけやいけない。』

『私は三コペッだつてお前にはくれないよ。』

『それでは通さない。』

『ぢやよろしい。私は無理にでも這入つて行く。』

私が屈服しないと決心してゐるのを彼は見て取つた。

『それぢやお這入りよ。今のはたゞ冗談に言つたのさ。お前は面白い男だ。』

彼はかう言つて、或小さい室へ私を案内した。その片隅には、痩せた、いかめしい顔をした小さい白髪頭の人が長椅子にかゝつてゐた。落ち窪んだ眼をして綠色の袈裟をつけてゐた。

『うん、この人なら何か私に言つてくれることが出來るだらう。』

私はかう考へた。

『どういふ用向かい？』と彼は聞いた。

『敎父よ、私の精神は非常に惱んで居ります。』

『尊師と言はなけやいけない。』

私の後に立つてゐたさきの秘書役の男が私に囁いた。

『どうかあなたの下部の方をあちらへやつて下さいませんか。私はこの人の前で話すのは極りが惡うございます。』

私はかう言つた。

僧正は私を見て、唇を嚙んだ。そして言つた。

『アレキシス、戸口の外へ出ろ。——さ、言ひたいことを話して御覽よ。』

『私は神の慈悲を疑つてゐます。』

私はかう言つた。

彼は額に手をあてゝ、しばらく私を見た。そして音樂的な聲を出してつぶやいた。

『何だつて？　何と言つたんだい？　え、おい。お前は何といふ馬鹿だらう。』

私は何も氣を惡くする理由もなかつた。多分それは不親切な意味で言つたのではないだらうと思つた。一體世間で私たちの目上にゐる人といふものは、實際の惡意からよりも、より多く、習慣と愚昧とのために人を侮辱するくせがあるものだ。

『どうか私の申しますことをお聞きなすつて下さい。』

私が椅子へかけようとすると、その老人は私に手附きをして叫んだ。

『立て。立てよ。お前は私に對しては跪づかなくてはいけない。すべを知らない奴だ。』

『なぜ膝を突くんです。もし私に罪があるとしたらそれはあなたに對してぢやなくて神に對してです。』

私は言つた。

彼はなほ餘計に怒つた。

『私はお前に取つて誰だと思ふんだ。私は神さまに取つて誰だい？』

私はそんな下らないことで彼と言ひ爭ふのを辱く思つたから跪づいた。彼は威かしがましく指で私を指して言つた。

『僧職にあるものに對して當然の尊敬を拂ふことを敎へてやる。』

私はもうこんな男と話をしたくもなかつた。けれども、その感情が全く消え去らない內に、私は喋り出した。全く彼が目の前にゐるといふことには無意識で、ずん〳〵喋つて了つた。私はそのときはじめて自分の思想に言葉を被せたのであつた。そして自分でその言葉に愕いた。

と、不意にその老人が叫ぶのが耳に這入つた。

『默れ。この下素野郎。』

私はどん〳〵走つてづしんと壁に撲つかつたやうな氣がした。彼は私の上に立ち塞がつて、怒つて指を振はしながらつぶやいてゐた。

『さいさまは自分で何を言つてるか解つてるのかい、この狂人の馬鹿め。さいさまはさいさまの惡事の度合を感じることが出來ないのか、ろくでなし奴。この虛言つきの邪敎徒奴。さいさまは自分の罪を懺悔しにこゝへ來たんぢやない。惡魔の使ひになつて私を誘惑しに來たんだ。』

私は彼の顏に描かれた恐怖を見た。怒りでなく恐怖を。——彼は振へてゐた。彼の口鬚と、私に向つて突き出してゐた彼の手とはがた〳〵振へてゐた。

私の方でも同じく愕りした。

『あなたは何を言つていらつしやるんです。私はまだ神を信じてゐるんですよ。』

『嘘をつけ、この極惡な犬め。』

彼は神の赫怒と復讐とを說いて私を威かした。全く穩かな聲でそれを話した。體中を振はせながら話すので、彼の袈裟が綠色の波のやうに彼のぐるりにさし寄せるやうに見えた。

彼が私に向つて畫いた神は、殘酷な、脅迫がましい、不氣嫌な、憐憫に乏しい、陰黑な顏をした神であつた。そしてその苛酷なことは昔のジホーヴァのやうであつた。

それで私は僧正に言つた。

『さうすると邪敎に落ち込んだのはあなたです。あなたの神は基督敎の神ですか？あなたは基督をどこへ隱して了つたんです？なぜあなたは人間の目の前に、友人であり援け手であるものを持ち出さないで、嚴酷な判決者を持ち出すのです？』

彼は私の髮を引つ掴んで私を搖すぶつた。そしてすゝり泣きをしながら呻いた。

『ささまは何ものだ、この惡漢め。ささまこそは警察へ送り、牢屋へ撲ち込み、僧院へ押し込め西比利亞へ追拂はなければならない奴だ。』

私はそれを聞いてかう思つた。人が自分の神を保護するために巡査を呼ぶとなれば、その人間も彼の神も大した力がある譯がないのは慥である。美しさはなほ更ない譯だ。

『放して下さい。』

私は立ち上つてかう言つた。

老人は喘ぐやうな息をして、

『ささまは何をし出さうといふんだ。』と叫びながら手をゆるめた。

『歸りたいんです。』

と私は言つた。

『あなたから何一つだつて敎はることは出來ません。あなたの言ふことは死んでゐる。あなたはおまけにその死んだ言葉で神を殺してゐるんだ。』

彼は再び巡査をどうするのと言ひ出した。併し私はそんなことには頓着しなかつた。巡査が來たところで、彼が私を扱つたよりより惡く私を取扱ふことは出來さうにもなかつた。

『神の光榮を見護つてゐるのは巡査ぢやない。天使です。だけどもあなたの信仰がそれをうそだと敎へるなら、敎へられるとほりをなさい。』

彼は鉛のやうに眞靑になつて私に突つかゝつて來た。

『アレキシス。こいつを擲り出せ。』

彼はかう言つた。

アレキシスはほめていゝ程の熱心を以て私を手荒く街へ叩き出した。

もう日ぐれであつた。私は僧正との話しに全二時間も費した。街々は暗がりに横つてゐた。それは陰鬱な光景であつた。到るところに騒がしい人の群が、笑つたり、ふざけたりしてゐた。その日は基督出顕祭の大祝日であつた。

私はのそり〳〵さまよひ廻つて、人々の顔をじろ〳〵見た。そして彼等のすることが腹が立つた。私はかう怒鳴つてやりたかつた。

『ハッハッ、笑はせやがる。お前たちは何でさう愉快なんだい。お前たちの神は叩き毀されて了つたぜ。氣を附けろい。』

私はむか〳〵怒りながら、どこへ行かうとするのかも知らないなりに、酔ひどれのやうにずん〳〵歩いて行つた。

私は自分の宿には歸りたくなかつた。そこには飲むことゝ、喧嘩との外には何にもなかつた。私は一番はづれの郊外へ向けて行つた。

そこへ行くと小さい別荘がいくつも立つてゐた。そしてその家々は黄色い窓々から、野原の方を見下ろしてゐた。風は彼等の顔へまともに雪を吹きまくつて、彼等を埋めて了はうとした。

私は酔つぱらひたくなつた。うんと酔ひたかつた。それも愉快な仲間なしで、一人こつそりと。——私は見ず知らずの人たちの仲にゐた。みんなの目からは罪人のやうに見えた。

『あゝ。この野原を突き切つたらどこへ出るだらう。』

私はこんなことを考へた。

すると、輕いみなりをした、一人の女が、寒さを防ぐためにたゞショールを引つかけたばかりで以て、不意と、とある戸口から飛び出して來た。そして私を一と目見ると、

『あなたは何といふ方？』と聞いた。

私はその女を占者だと思つた。

『何と云ふ方だつて？　それはお前さんには言ひたくない。私は一人の不幸な男だよ。』

『不幸ですつて？』

女は笑ひながら叫んだ。

『どうなすつたの？　それもこんな祝ひ日に。』

私は彼女のはしやいでゐるのが不愉快であつた。

『このあたりに宿屋はないでせうか。　しばらく休んで暖まりたいんだ。――ずゐぶん寒いね。』

女は私をじろ〳〵見調べた。　そして親切な調子で言つた。

『そつちの方へ入らつしやれば宿屋が一軒あるにはありますけど、あなたさへおよろしかつたら私の家へ入らつしてお茶をお上りなさいよ。』

私はたゞ何氣なく、受動的に彼の女の後について行つた。

私は間もなくその女の部屋に這入つてゐた。　その室の中には、片隅にランプが一つ、聖像の下の壁に點つてゐた。　一人のでつぷりした婆さんが何をかしやぶりながらそこに坐つてゐた。　テイブルの上には湯瓶が載つかつてゐた。　一つ〳〵のものが皆な暖かさう

にこゝとんまりしてゐた。

女は私を招じて椅子にかけろと言つた。　薔薇色の頰と大きな胸を持つた年若い女であつた。　婆さんはその坐つてゐる片隅から私を見調べて高笑ひをした。　彼女の、大きな雨風に打たれた顏は一寸見ると目が一つもないやうに見えた。

私は不安を感じた。　どうして自分はこゝへ來たのだらう。　そしてこの女たちは誰だらう？

私は若い女に聞いた。

『あなたがたは何の仕事をしてるんです？』

『私たちはレイスを拵へるんです。』

實際さうらしかつた。　だつて絲卷がいくつも群がつて、壁の棚から下がつてゐた。

すると女は、私の顏をぢつと見ながら、不意にしやあ〳〵して笑ひだした。

『それからね：：ときゞ〳〵私はこの近所を一寸い〳〵ぶらつくんですよ。』

婆さんは下卑た笑ひ方をした。

『まあタティアーナ、何といふいたづらつ子だらうねお前は。』

婆さんがかう言はなかつたら私にはタティアーナの言つた事が解らなかつたのである。私は女が言つた意味が解つたので極りがわるくなつて來た。私はこんな階級の女と接觸するのはこれがはじめてであつた。そして私は無論こんな連中を惡く考へてゐた。

タティアーナは笑つた。

『一寸ペトロヴナ、この人の恥しがつて入らつしやること。』

私はむか〳〵し出した。飛んだい〻仲間入りをしたものであつた。嘆き悔いる懺悔から眞つ直に非常な罪惡の中へ陷ち込むなんて。——

『お前さんはこんなことをして得意になつてゐられるの？』

私は叫んだ。

『ちやんと得意になつてるぢやありませんか。』

女は平氣な面をしてかう答へた。

婆さんは再びげら〳〵笑ひ出した。

『ずゐぶんだね、タティヤーナ、何です。』

私は何と言へばい〻か、どうして彼等から逃れたらい〻か解らなかつた。私はもぢもぢしながら口を聞かないでそこに腰をかけてゐた。風が頻りに窓に撲ち當つた。湯瓶はしゅん〳〵たぎつた。タティアーナは私を誘惑しにかゝつた。

『まあ、何てむし〳〵するんだらう。』

彼女はヂヤケットの前をほどきながら言つた。

彼女はきれいな顏をしてゐた。その目はしやふ〳〵した表情を持つてゐたけれど、それなりに矢張り私を引きつけた。婆さんは杜松子酒を一瓶とそれから果物の糖蜜とをテイブルの上に並べた。

『まあい〻や、指套一杯ほど飲んで金を拂つて出てやらあ。』

私はかう考へた。

『あなたはどうしてそんなに悄げて入らつしやるの？』

タティアーナは出し抜けに言つた。

『私はかみさんに亡くなられたんだ。』

私はかう言はずにはゐられなかつた。

『いつ亡くなつたんです？』とタティアーナはやさしい聲でかう言つた。

『五週間前に。』

女はちやんと着物のボタンをかけて、まじめな容子になつた。私はそれが非常に嬉しかつた。

『難有う。』

私は默つて女を見入つて、低く呟いた。私の心は悲しかつたが、それでも私はまだ年は若かつた。それに、二年の間の結婚生活から、女からいたはられる必要を感じてゐた。

婆さんはけなすやうな聲で言つた。

『へえ、かみさんが亡くなんなすつた。——だつて何もくよ〳〵するがものはないぢやありませんか。あなたはまだお若いもの。女なんざいくらでもゐますよ。それこそはどの街にもうよ〳〵してまさ。』

するとタティアーナは荒つぽく言つた。

『もうお寢みよ、ペトロヴナ。私がちやんとこの方を送り出して上げて戸締りをしとくから。』

婆さんがあちらへ行つて了ふと、タティアーナは親切な併し眞面目な調子で言つた。

『あなたは御親類がおありになるんですか？』

『一人もゐない。』

『それともお知り合ひの方は。』

『知り合ひだつて一人もありやしない。』

『これから何をなさるおつもりなの？』

『私にも解らないんだ。』

女は一瞬間考へ込んでゐた。そして言つた。

『ね、私のいふのをよくお聞きなさいな。——あなたは今どうすることも出來ないやうなはめになつておいでだわね。だから私言つて上げますけど——あなた一人でうろつき廻

らないやうになさいよ。あなたは殆ど私が一口さそつたゞけでぢきに私の家へ這入つて入らつしたでせう。あなたはこの町でざうさもなく破滅させられなすつたかも知れなかつたんだわ。今晩はこゝへ泊つて入らつしやる方がようございますんよ。あそこに寢床があります。惡いことは言ひませんから、さ行つておやすみなさい。たゞで私たちの世話になるのがお厭だつたら、いゝとお思ひだけベトロヴナにくれておやりになればいゝんです。私がゐてお邪魔になるなら、さう言つて下さい。私はほかのところへ行きますから。』

この女のさういふ言葉と、殊にその目の表情とが氣に入つた。私は或喜びの感情を示さずにはゐられなかつた。私は笑ひながら言つた。

『あゝ本當にあの僧正奴は。』

『どの僧正？。』

タティヤーナは愕いて聞いた。

私は說明に困つた。

『何、今のはたゞ私の口ぐせだよ。——口ぐせつて言ふほどでもないけど、私はよく一人

の僧正を夢に見るんだ。』

『ちや、おやすみ。』と女は言つた。

『まだ行かないでおくれよ。厭でなければ、もう一寸待つて欲しい。』

私は急いでかう叫んだ。女は再び坐つて笑つた。

『私は喜んでこゝにゐるわ。どうして厭でせう。』

女はしきりにお茶か杜杉子酒（シュナップス）かを喫めとすゝめた。それから何か食べるものが欲しくはないかと聞いた。彼女の際立つた親切は私の眼に涙を湧かせた。私は春の朝の、日の出のときの鳥のやうに嬉しかつた。

『だしぬけにこんなことを聞いてすまないけど、お前さんがついさつき言つたことは本當かい？　私は實際それが聞きたいんだ。それとも私を調弄つたの？』

女は厭さうな顏をした。

『本當ですよ。私はさういふ種類の女たちの一人なんですもの。』

かう言ひかけたが、

『でもあなたはどうしてわざ〳〵そんな事をお聞きになるの？』

『私はさう言ふ風な女に合ふのは初めてなんだ。だから苦しいんだよ。』

女はそつと、逆らはないやうに笑つた。

『どうしてゃす？　何にも苦痛なことはないぢやありませんか。』

『お前さんのせゐぢやないよ。自分がこんなだからなんだ。私がのろまだからだ。』

私は町の女たちについての私の意見を遠慮なく話した。女は默つてぢつと聞き入つてゐた。

『私たちの間にはそれこそいろんな女がゐますよ。中には、恐らくあなたが考へてゐらつしやるよりかもつと惡い人も。――私にはあなたは餘んまり正直すぎる方のやうに思へるわ。』

私はこのやうな娘が娼婦だとはどうしても思はれなかつた。それで私はかう聞いて見た。

『あなたは仕方なしにこんなことをしてるんですか？』

『私一等はじめは或る若い男にだまされたんです。だからその男を困らせてやらうと思つてまた一人他の男を拵へたんですの。そんな風にして私はずつと……とき〳〵は麵麭の片のためにこんなこともしなければならないんでせうよ。』

女は一寸も悔いる色もなく、全く簡單にかう言つた。

『敎會へ行きますか？』と私は聞いた。女はさう聞かれたのに驚いて、ひど〳〵顏を赤くした。

『敎會堂へ這入ることはどんな人間にだつて禁ぜられちやゐませんわ。』

私は彼女の感情を害したのを見て取つたので、急いで附け加へた。

『あんたは私の言つたことを誤解したんだ。私は福音書を知つてゐる。メイリー、マグダーレンのことも、それからパリサイ人が主を誘惑するために伴れて來た、罪深い女のこともすつかり知つてるよ。たゞね、あんたは自分の生活のために神さまを怒つてゐやしないか、神さまの慈悲といふものを疑つたことはないかどうか、それを聞いて見たかつたんだ。』

女は眉毛を顰めてしばらく考へ込んで、それからかう叫んだ。

『私は神さまがこんなことに關係があるとは思ひません。』

『どうしてゞす？　神はわれ〳〵の父われ〳〵の牧師ぢやないの？　人間の運命といふものは神の巨きな手の中でどうでもなるんぢやないか？』

『私はだれに對してもどんな惡いこともしやしません。だからどうして咎めを受げる筈があるでせう？　よし私が汚れた生活をしてゐるとしても、そのために、私より外のものへ誰に害をするでせう？』

女はかう答へた。私は彼女が何か善良なそして正直なことを意味してゐるのだとは感附いたけれど、彼女の言つてる事は私にはよく解らなかつた。

『私は自分の罪の責任は自分で引受けるつもりだわ。』

女はにつこり微笑んで私によりかゝりながらかう言つた。

『それに私には自分の罪がそれ程ひどいものだとは思へないんですもの。それや私の言つてることは間違つてるかも知れません。だけど、とにかくあなたには本當のところを

言つてるんですよ。私は教會へ行くのは大好きです。私たちの教會は建つてからまだいくらにもならないんですから、非常にきら〳〵して、きれいです。そしてあそこの唱歌隊がどんなに美しく歌ふでせう。とき〳〵私はその歌にすつかり涙が流れることがあるわ。それに教會ではだれだつて自分の苦勞を忘れることが出來るんですものね。』

女はしばらく默つてゐた。そしてやがて附け足した。

『それからもう一つ理由があると思ひます。――男たちが私を見るから。』

私はそれを聞いて顴顴から汗が流れ出した程愕いた。彼女がどうしてそれらの事柄を調和し得るのだか私には譯が分らなかつた。

『あなたはおかみさんをずゐぶん可愛がつてゐらつしたの？』

女はかう聞いた。

『あゝ、それこそ本當によつく愛してゐたんだよ。』と私は答へた。彼女がそれを聞いた單純な聞き方が何より私には嬉しかつた。

私はそれから、自分の精神上の苦しみや、神が、私を罪惡から保全してくれないでおい

て、あとになつて不當にもオルガを死なして私に刑罰を加へた腹立やを、この女に話し出した。女ははじめは顏色を靑くしてふさぎ込んだ。それから次には二つの頰が、輝いた眞赤な色に赤くなつた。そして目には火のやうな光りが閃いた。私はそれを見ると昂奮した。

私は生れてはじめて私の思想をして、私の經驗してゐた限りの、人間の生存の全範圍を橫過させた。そして私にはそれが何だか、不調和な、痙攣的な、そして泥に汚れた或物のやうな氣がした。何だか、その奸惡と無力と、そしてその哀しみとうめきと叫びとのために全く恥しい或物のやうに思はれた。

『どうです、その中に、神聖なものがどこにあるだらう?』

私はかう言つた。

『人間は一しよによせ集められてお互の血を吸ひ合つてゐる。到るところで麵麭の皮を爭つて獸のやうな喧嘩をやつてゐる。その中に神聖なものが何がある? 慈悲だの愛だの力だの美しさだのがどこにあるだらう。私は年は若いが盲目に生れて來やしない。

どこに神の子基督がゐるだらう。神の汚れのない心が蒔いた花はだれが踏みにじつて了つたのだらう。神の愛の智慧をだれが盜んで行つたんだらう。』

私は例の僧正が、彼の復讐の神を持ち出して私を怖ぢさせたり、彼の神を保護するために巡査を呼び入れて加勢させようとしたことをすつかりこの女に話した。タティアーナは笑つた。あの僧正が、何のことはない、全で大きな蝗のやうなざまをして、きい〜〜鳴いてびよこ〜〜飛び廻つたときには私だつてちやんちやら可笑しかつた。あの蝗奴が、自分自身でも問題の事項の眞實をほんとに信じてもゐないくせに、一ばし重大な職務を司つてゐるやうに構へてゐやがつた。

女は私が言つたことを聞いて笑つた。そしてそのあとでまじめになつてかう言つた。

『私にはあなたの仰しやつたことがすつかりは解らなかつたけど、それでも、私が聞いた澤山の事が私を愕りさせました。神さまについてあなたが考へてゐらつしやることは餘り亂暴すぎますわ。』

『人間は誰だつて神を目に見ないぢや生きてはゐられないよ。』

私はかう答へた。

『えゝ、それやさうです。だけどあなたはほんとに、拳固をかざして神さまとあくまで喧嘩でもし拔かうとしてゐらつしやるやうですもの。そんなことをして濟むでせうか。あなたが、この世は辛いものだと仰しやるのはそれは全くそのとほりです。私だつてときく〳〵。どうしてさうなのだらうと思つて譯が解らないことがあるわ。あのね、かうなのよ。この町からたんと間のないところに或修道院があるんですがね、そこに一人女の隱者がゐるんですよ。大變年取つた賢い女なの。——あなたはそこへ入らして其人に相談して御覽になるが一番いゝわ。その人は非常に美しく神さまの事を話すんですよ。』

『それは行くとも。——行くよ。私はどこへだつて行く。そして賢い神聖な人に一々聞いて、さういふ人たちにすがつて平和を求めたいよ。』

『ぢや私はもうあちらへ行つて寢てよ。』

女は私に手をさし出してかう言つた。

『あなたも、もうお寢みになるといゝわ。』

私は彼の女の手をキッスして、眞實に握手をした。そして、眞底からかう言つた。

『どうも難有う。私はあなたが何を與へてくれたかといふことが解らない。そして今はそれをちやんと本當に玩味ることが出來ないけど、併し私はあなたを親切な女だと感じてゐます。そして難有く思つてゐます。』

『まあ、何を仰るんでせう。お寢みなさい。』

女はかう言つた。

女は私が禮を言つたので極りを惡がつて顏を赤らめた。

『私はあなたがさつきとは少しは愉快におなりなすつたから嬉しいわ。』と女は言つた。

私は女がほんとに喜んでゐるのを見た。私はこの女に取つては全くの他人ではないか。それだのに彼の女は人に或小さい慰めを與へたと言つて喜んでゐるのであつた。

私はランプを消した。そして寢床に横になつてかう思つた。

『まあこれで全く思ひがけなく、神聖な祝ひ日を守つた。』

私の心はやつぱり沈んでゐた。けれども、其中に何か新しい そして善良な或物が芽を

出してゐるのが感ぜられた。私はとき〳〵刺戟に充ちたタティヤーナの目を見た。さうかと思ふと今度は眞面目な目もとになつた。そしてその目から、女性的といふよりももつと情のある或物が話した。私はその二つの目を考へると嬉しかつた。それに人に對してかういふ風な考へを持つといふことは、休み日の心持に似合つてはゐなかつたらうか。

私は、翌る日になつたら、あの女に青い石の這入つた金の指環をくれようと決心したけれど、併し不幸にも、翌る朝になると、それを買つてやるのを忘れて了つた。

それ以來十三年になるけれど、私は今だにあの女のことを考へるたびに、その指環をくれるのを忘れたのがいつも殘念である。

翌る朝早く、女は私の寢てゐる入口を叩いた。

『お起きになる時間ですよ。』

二人は久しい友達のやうに顔を會はせた。そして椅子にかゝつて茶を飲んだ。女は昨夜言つた女の隱者のところへ行くやうに勸めて、私にさうする約束をさせた。親しく別れの挨拶をしてから、女は私を戸口まで送つて出た。

八

私は町では、全く荒原の眞ん中にでもゐるやうな寂しい心持がした。尼院は二十五哩ばかり向うであつた。私は早速出かけた。さうして翌る日には、その尼院で早い朝の勤行を聞いた。

どつちを見ても、尼たちが大勢黑く群つてゐた。全く山が粉碎されて、その黑い斷片が寺院中にころがつてゐでもするやうであつた。

その尼院は富裕であつた。そこには澤山の尼たちがゐた。彼等はみんなでつぷりしてゐた。そして揑粉で揑ね上げたやうな、眞つ青な、弱い、悲しさうな顏附をしてゐた。僧侶は、いくらか急き過ぎはしたが併し熱心に、勤行を歌つてゐた。彼は低音の、いゝ聲をしてゐた。そしてやつぱりでつぷり脂ぎつてまる〳〵してゐた。唱歌隊の尼たちはみんなきれいな女であつた。そして神々しく歌つた。蠟燭は青ざめた涙を流した。その焰は人間に對する同情を以て搖めいた。

『わが靈は爾の殿堂に、爾の聖き殿堂に向ひて飛揚する。』と、年若い聲の集りはやさしく謠つた。

私は習慣に從つて、その勤行の詞を自身にくり返した。そしてそれと同時に、自分のぐるりを見まはして、この祈りを上げてゐる女のどれが、タティアーナの言つたあの尼だか、推測しようとした。私はさまで敬虔な心持にはなつてゐなかつた。私はそれに氣がつくと急に不愉快になつた。私は何も浮薄な動機から出て來たのではないからであつた。私の精神は空虛であつた。私は自分の思想を集中することが出來なかつた。私の心はぐるぐる廻つた。そしていろんな考へがお互の上をひよこ〳〵跨いだり飛び越えたりした。

私は二つの痩せこけた顏が目に附いた。それは聖像をぢつと見つめて、唇を動かしてゐる、半分死んだやうな二人の老いた女の顏であつた。けれども彼等が低語やいてゐる言葉は聞えなかつた。

勤行が濟むと私は寺院をぐるりと廻つた。それは晴れ〴〵したからりとした日であつた。雪がぎら〳〵光つて太陽の光線を反射した。木の上ではトムティットがちい〳〵啼

いて枝々から霜を搖り落した。

私は墓地の壁のところまで歩いて行つて、遠くの景色を見入つた。尼院は丘の上に立つてゐた。その前には樂しい母なる大地が、青味を帶びた銀色の、雪の外套できれいに裝はれて、遠く、大きく廣がつてゐた。ぐるりの小さい村々は陰鬱な顏附きをしてゐた。森は流れで分けられてゐた。いくつもの小路が解けた紐のやうにうね〳〵してゐた。多の太陽はそれらのすべてのものゝ上に、斜ひな光線を投げてゐた。どちらを見てもすつかり沈默と美しさと平和とに包まれてゐた。

それから間もなく私は尼院の頭のフェヴロニヤの隱室の中に立つた。私は睫の一つもない、いつもしく〳〵泣いてるやうな目をした、小さな年取つた女を見た。その顏の無數の皺の間には絕えず親切な微笑みが漂うてゐた。

彼の女は低い聲をして、殆んど私語きのやうな、節のついた調子で話した。

『お前さんよ、救世主の祭りの前に林檎をお食べなさるなよ。神さまが愛の心で、その林檎を熟させて下さるまでお待ちなさい。中の核が黑くなるまで待つてお出でよ。』

彼はかう言つた。

『それは何のことなんだらう？』

私は心に考へた。

『あなたのお父さまとお母さまを尊敬しなさいよ。』とつゞいて言つた。

『けども私は父も母もどつちもないんですが。』と私は答へた。

『それならそのお二人の靈の安息のためにお祈りをなさい。』

『けども多分二人ともまだ生きてるかも知れません。』

彼女は目から涙を拭き取つて、憫れみの微笑を以て私を見た。

それから頭を搖ぶつて、そして例の節のついた聲で言ひ繼いだ。

『神さまは非常に情深く入らつしやる。神さまは何人にも公平で入らつしやる。そしてその裕かなお情で、すべての人のために供給して下さります。』

『それですよ。私はそこを疑つてゐるのです。』

私は彼女がいかに愕いたかを見た。彼女の腕はぐつたりとなつた。彼女は一言も言はなかつた。兩の眼が涙を以て瞬いた。彼女はそれからやつと考へを集めて、再び低い聲で言ひはじめた。

『祈りには羽根があつて、どのやうな鳥よりも早く飛んで行きます。そしていつも神さまの玉座まで行きつきます。これを忘れてはいけません。馬の背中に乘つて天へ行つたものはまだ一人もないのです。』

彼女が言つたことから推し量ると、彼女は、神といふものは、親切な、性質のいゝ力のある主君で、彼女の考へでは、規則で拘束されてゐないものだと、かう思つてゐるらしかつた。彼女の考へはみんな比喩で言ひ現はされた。その比喩が厄介なことには私には一寸も解らなかつた。

私は辭儀をして出て來た。

『人間の子らは、銘々に自分の色んな必要に應じて勝手に神を解釋してゐやがる。』

私は一人かう思つた。

『神を情深い性質をしてるやうに見てる奴があるかと思ふと、或奴はまた殘酷な澁々した

ものゝやうに言ひ張つてゐる。坊主は神を日稼ぎ人足にして了つた。彼等は自分たちの甘い食ひ物を神に稼がせてその駄賃に香をたいてゐる。神を無限の偉大に於て見たものはヒラリオン一人きりだ。』

二人の尼が橇で雪を運びながら、くす〳〵笑つて私の側を通り過ぎた。けれども私はふさぎ切つて、どうしていゝものか自分で解らないくらゐであつた。私は塀の外へ出た。外には沈默が漲つてゐた。雪は輝き閃いた。霜に縛られた立木はぢつとみじろぎもしずに立つてゐた。天も地もすつかり瞑想に心を奪はれてゐるやうに見えた。そして親切な目をしてこの沈默した尼院を見入つてゐた。けれども、私は、この沈默がいつ或聲高い叫びのために破られるかも知れないのを怖れた。

晩禱式の鐘が鳴つてゐた。それはいかにも美しく鳴り響いた。その鐘は甘美にそして〳〵そゝり立てるやうに呼んだけれど、それでも私は教會堂へ行く氣になれなかつた。私はたれかゝ小さい釘を私の頭へ打ち込みでもしたやうな氣がした。

私は不意に、どこか、規則の嚴重な修道院へ這入つて、寂しい隱室で〳〵たつた一人冥想し

たり本を讀んだりして暮さうと決心した。さういふ寂寞の中にゐたら私の困亂した精神を抑へつけることが出來るかも知れなかつた。

一週間の後、私はサバスティン派の、或小さな寂しい修道院の院長の前に出た。

私はその人が好きであつた。彼は已に灰色になつた髮をした、頭の禿げた立派な見かけの人であつた。ずんぐりして、薔薇色の頰をしてはゐるけれど、顏附が重々しく、親切な目をしてゐた。

『お前さんはどういふ譯で世間から遁げようとするのかい。』

道院長はかう聞いた。

私はオルガの死のためにすつかり心が混亂して了つたことを說明した。併し、何ものかゞ私の言葉を阻害するやうな氣がしたので、それ以上を話すことが出來なかつた。

道院長は口鬚を引つ張つて、私を取調べた。そして言つた。

『お前は入院料が拂へるかい？』

『私はこゝに百留ばかり持つて居ります。』と私は答へた。

『ぢやあそこへお這入りよ。客間へお這入りなさい。明日正午の禮拜がすんだあとで話をしよう。』

來客の接待をするのは教父ニフォントの役目であつた。この人も私にはいゝ印象を與へた。

『われ〳〵の會衆は朴訥でそして本當に兄弟のやうだ。我々はみんな同じやうに働いて神に仕へてゐる。ほかの多くの家ではかうはなつてゐない。それは無論こゝにも頭のやうな人がゐるにはゐるが、併しその人は我々のすることに干渉しやしない。勝手にさせてくれてるのだ。こゝに這入つてゐればお前さんも自分の靈のために安息と平和を見出すことが出來る。こゝなら幸福が得られるよ。』

翌日私はまだ夜が明けない内にこの修道院をすつかり見て了つた。もとは森の眞ん中に立つてゐたのだといふことが明らかであつた。後になつてぐるりの林が切り倒されたのであつた。そこここに、木の切株が土の上に覗いてゐた。森は兩方から道院の塀まで延び廣がつて、丁度二つの黑い翼で取り圍んだやうに、青い圓屋根になつた教會堂と、道

院の白塗りの建物とを圍んでゐた。

その建物の前には、一面に氷に蔽はれた青い湖水が、新月形に横たはつてゐた。その湖水は、一つのはしから向うまで九バースト幅が四バーストあつた。建物の後には湖水の後の土地や、クディアロヴの三つの教會堂や、トロコンチェヴの聖ニコラスの金色の圓屋根なぞが見えた。そして道院から間もないところにクディアロヴ・ヴィセルコの小家と、そこの二十三軒の、農場の中の住家が立つてゐた。四方には、遠くの方まで大きな森が廣がつてゐた。

すべてが非常に美しかつた。そのために私の心は素直な情緒で充たされた。私はこゝで神と語つて、私の心の秘密を神に打ち明けよう。さうして、謙抑な固執を以て、神の神聖な掟の知得に行く路を教へて貰ふやうに神にお願ひしよう。

夜私は夜半禮拜に列席した。禮拜は當然の尊嚴と敬虔な熱誠とを以て歌はれた。けれども其唱歌は私にはどうでもいゝ樣な氣がした。一人もいゝ聲をした者がゐなかつた。私は祈禱をした。

『おゝ主よ、私があなたについて餘りに不遜過ぎる考へを持つてゐますなら、どうか許して下さいませ。全智なるあなたも知つてゐて下さいます通り、その考へは不信仰から來たのではありません。全く愛と熱誠の結果でございます。』

私の側に立つてゐた律僧が、ふいに微笑みながら私の方を向いた。私は思はず知らず大きな聲で悔悲の言葉を發したのであつた。私は彼が微笑んでゐる顔を見た。その人は實にきれいな顔をしてゐた。私は頭を垂れ目を閉つた。私はこれまでも、その後にも、こんなきれいな人を見たことがない。

私はしづかに歩いて行つて、その人のぢき側に坐つた。そしてその愕くべき顔をぢつと見つめた。僅かに灰色の觸つた、黑い鬚に緣附けられた、牛乳のやうに白い顔であつた。彼の目は大きかつた。そして潤ひのある、和いだ輝きと、誇りの目附を持つてゐた。彼は脊が高く、恰好のいゝ姿をしてゐた。鼻が鷲の嘴のやうであつた。彼の容子にはどことなく、氣高いやうな、いゝところに育つて來たやうなところが見えた。

彼は私に非常に深い印象を與へた。私は夜その人のことを夢に見たくらゐであつた。

九

ニフォント敎父は、その翌朝早く私を起こした。

『院長さまがお前に試しの仕事を任命された。麵麭燒場へお行き。この親切な兄弟が、そこへ伴れてつてくれるよ。それからお前の直接の上役になるのだ。さ、この律僧服をお取りよ。』

彼はかう言つた。

私はその服を着けた。それは擦り切れて汚れてはゐたけれど、私の體によく合つた。長靴の片方は底がはなれかけてゐた。

私は私の上役を見た。彼は廣肩の男であつた。額や頰に痣や吹出物が一ぱいに出てゐて、その中から灰色の髮の房が生えてゐた。顏には一面に羊の毛のやうなものが生えてゐた。その大きな額の深い皺と、唇のまはりのしまりと、その小さい拗ね込んだやうな目がなからうものなら、それこそをかしな恰好であつた。

『氣を附けろよ。』

と彼は言つた。彼の聲は荒つぽくてひゞれの入つた鐘のやうな響きを立てた。

『これはミカさんだ。——左樣なら。』

ニフォントは微笑みながら私に言つた。

二人は墓地の中へ這入つた。まだ暗かつたので、ミカはいろんなものに躓いた。そして怖ろしく罵り出した。

彼はそれから私に言つた。

『お前は麵麭粉が捏ねられるかい？』

『私は女が捏ねてるのを見たことがあります。』

と私は答へた。

『女？　お前はいつも女のことばかり考へてるんだな。女はそこいら中にゐる。人間の世界はあいつらのために呪はれたんだつてことをお前忘れやしまいな。』

彼はかうつぶやいた。

『だつて聖母だつてやつぱり女だよ。』と私は答へた。

『それで？』

『それからまた外にも神聖な女は澤山ゐる。』

私は心でかう言つた。

二人は麵麭燒場へ着いた。彼は灯を點した。

そこには袋で蔽はれた、大きな二つの捏桶と引割粉の這入つた長い箱とが横たはつてゐた。箱のすぐわきにはらい麥の引割粉の大きな袋が一つと玉蜀黍の粉の這入つた函とが置かれてゐた。どこもかしこも廢れ屑や汚れ物だらけで、蜘蛛の巣や灰色な塵埃が一ぱいであつた。

ミカは桶の一つから袋を取り出して、地びたへ擲り投げた。そして言つた。

『こゝへ來て習ひなよ。あそこんとこに捏粉があら。ね、そら、泡が立つてるだらう？あゝなればもういゝんだ。膨れたんだ。』

彼は三つ子ほどの大きさの引割粉の袋を取つて、桶のはしへ傾けて、ナイフで開けた。

そして叫んだ。

『水を手桶で四はい入れて、それから捏ねろ。』

彼はもう霜におほはれた立木のやうに眞つ白になつてゐた。私は頭巾を後へはねのけて兩方の袖をまくり上げた。

『それぢやまだいけない。股引を除れよ。足で捏ねなくちやいけない。』

彼はかう叫んだ。

『大分長い間ふろに這入らないんですが……』と私は言つた。

『だれがそんな事を聞いたい。』

『どうして汚い足で捏ねられるもんですか。』

『私はお前の生徒かい？　それともお前が私の生徒かい？』

彼は私に向つて咆り立てた。彼は頑丈な、巾の廣い齒の列んだ、大きな口を持つてゐた。そして怒つたときには長い二つの手で虚空を撲つのが癖であつた。

『驚いた野郎だ。』と私は心に思つた。

私は濡れたぼろ切で足を拭いて、捏桶の中へ這入つて、捏粉を捏ねはじめた。同時に私の先生は、怒鳴り立てながら麵麭燒場のぐるりを走り廻つた。

『鼻つ柱を挫いてやるぞ、この船中料理人の子め。謙遜と從順を敎へてやる。』

私は一桶に一ぱい這入つてゐたのをすつかり捏ねて、それから二番目のに取りかゝらうとしてゐた。その中の捏粉が膨れてゐるので、私はそれを捏ねた。

その次は玉蜀黍の粉の番であつた。それは手で捏ねなければならないのである。私は頑丈な男ではあつても、荒い仕事には馴れなかつた。引割粉が鼻や口や耳や目に這入つて、しまひには目も見えなければ、耳も聞えなくなつて了つた。額からは汗がどん〳〵垂れて捏粉の中へ落ち込んだ。

『汗を拭くやうなぼろ切れはありませんか。』

と私は言つた。するとミカは怖ろしく怒り出した。

『へん、天鵞絨の切れでも買つてやらうよ。この修道院は建つてからもう二百三十年になるんだから、お前がいろんなことをちやんとやり直してくれるのをたゞ待つてるんだ。』

私は笑ふまいと思つても笑はずにはゐられなかつた。

『私は私だけのためにこの揑粉を揑ねてるんぢやありません。ほかにも麵麭を食ふ人がゐるんだ。』

私はかう言つた。すると彼は怒つて猟鼠のやうに硬毛を逆立てゝ體中を振はせながら私のそばへやつて來た。

『そんなにいやに氣になれや袋を取つて顏を拭けい。おれはお前がどんな厚かましい野郎かつてことを院長に報告するんだ。』

私は怒り出すことも出來ない程この野郎に愕いた。

彼は止み間なく働いた。二百ポンドもある重たい袋も、彼の手にかゝつては輕い倚蒲團と同なじであつた。彼は引割粉の中で息をふさがれたまゝぶつ〳〵言つたり罵つたりした。そして私を絶えず慘酷に追ひ使つた。

『ぐず〳〵するない。——早くしろい。——氣をつけろい。』

だから私は目が廻るほど急いだ。

私は麵麭燒場での最初の數日の間に、もう從順が面倒くさくなつた。その麵麭燒場は食堂の下の地下室の中にあつた。天井が低くて圓頂形になつてゐる上に、そこのたつた一つの窓はびつしり閉つてゐた。だからその中の空氣は息がつまるやうであつた。粉はそこいらを濃霧のやうに立てこめてゐた。その中をミカは鎖でつながれた熊のやうにそつちへ行つたりこつちへ行つたり、のそ〳〵うろつき廻つた。そこへ持つて來て竈にはすさまじい焰がばち〳〵燃え立つてゐた。仕事ではなくて全く惡夢にうなされてゐるやうなものであつた。

そこには大概ミカと私とが二人ゐるきりであつた。他のものが手傳ひによこされることは滅多になかつた。それもたゞ罰として手傳はされるだけのことであつた。教會堂の禮拜式へ出る閑は少しもなかつた。

毎日ミカは私にいろんなことを言つて聞かせた。彼は大きな繩で私を縛り上げてゐるやうに思はれた。彼は世間を罵倒して全きり火と焰と狂激それ自身であつた。その間私は彼の說教の下に喘ぐ息を吐いた。そして私の道義心は恰も煤でおほはれでもしたやう

な氣がした。

『お前はもう今は世間の人間と何の關係もないんだ。あいつらはこの世界に罪惡の外には何ものも產み出しやしない。だからお前は世間を捨てたんだ。お前はからだで世間から遠ざかつたからには、精神上にだつて世間をはなれなくちやいけない。そして全く世間を忘れて了はなくちやだめだ。男のことを考へると、必ず考へが女といふものに向つて來る。この世界は、女のために罪惡の暗やみに沈んで、永久に桎梏をはめられてゐるんだ。』

彼はかう言つた。

私はこの鼻息のつよい斷言に反對を持ちかけようとしたけれど、彼は私が口を開くか開かないかにぢき怒鳴りつけた。

『默れ。經驗のあるものが言ふことはよく聞いとけよ。そしてお前より年上のものを尊べよ。お前は何か聖母のことを喋り出さうといふんだらう？　ちやんと己には解つてら。――だけども、基督が十字架の上で殺されたのは、正しく彼が、純潔なそして神聖なもの

として天から下りて來ずに、女の腹から生れて來たからだ。おまけに彼は一生涯の間あんな嫌な女どもに餘り親切をかけ過ぎた。基督が、あのサマリヤの女と話しなんかするのをよして、あいつをヤコブの井戸に投げ込んで了ひ、姦通の現場を押へられた女に最初の石を投げてくれたなら、それこそこの世界は救はれたかも知れなかつたんだ。』

『しかしそれは敎會が取つてる意見ぢやないや。』

『默れ。――さつきも默つとれと言つたぢやないか。何が敎義だか敎義でないかお前たちに解るものか。敎會といふものは全く俗つぽい坊主の手にあるんだ。下袴を着けてる女どものやうに、絹の着物を着て歩き廻つてる放蕩者やしやれ男の奴隷になつてるんだ。あいつらはみんな邪敎徒だ。方形舞踏を踊るに適當してるだけの話で敎會に向つて規則を下したりするのは全で柄にないことだ。結婚した男に汚れのない心を以て神のことが考へられるだらうか。そんなことは出來やしない。なぜつてば彼は原始からの罪惡を續けてるからだ。人間がそのためにイードゥンの園から逐ひ出された、あの恐ろしい罪惡を續けてるからだ。われ〳〵人間はみんなこの罪のために罰せられて永久に苛責を受け

てゐる。泣き悲しんだり齒を喰ひしばつたりさせられてゐる。その罪惡のために、われ
われは盲目にされて了つて、永久不變に神の顏を見ることが出來ない。坊主といふ奴は、
子供を生む限りは自分自身が罪惡の網を織つてるのだ。自分たちがさういふ手本を示し
て人々を眞直に地獄へ引つぱり込んで行くんだ。だから自分の犯罪に理窟をつけようと
思つてあらゆる掟を贋造しやがる。』

この男は段々と私を取り圍む石の壁を私のぐるりに建てた。そして、言はゞ、そこの
地下室の圓天井を、私の頭のところまで引き下ろした。私は彼の言葉から出る塵埃のた
めに、息を窒がれ壓へつけられるやうな心持がした。

『それぢやどういふ譯で主は「爾等產めよ殖えよ。」と言つたんだらう。』

かういふとその私の上役は顏色を眞つ靑にして、床板を踏附けながら、野獸のやうに咆
えまくつた。

『神はさう言つたさ。實際言つたさ。だけどお前には神の言つた意味が解るかい、馬鹿
野郎。神はかう言つたんだ。――「產めよ殖えよ、地に充てよ。我は爾等を惡魔の力に放

棄する。爾等はこれより永久無限に咀はれよ。」――神が實際言つたのはかうなんだ。そ
いつを自分で勝手に神の下部だなんて稱へてゐる、あの咀はれた放蕩ものどもが、その言
葉をこぢつけて神の掟の一つにしてしまつたのだ。どうだい、坊主どもの嘘と惡だくみ
が解つたかい。』

彼は丁度、一つの山が實際に私の上に落ちかゝつて來て私を窒息させでもしたやうに、
私の上に雷を轟かし稻妻を投げた。同時に私のぐるりはすつかり闇になつた。私の信
仰は破れてしまつた。けれども、彼が彼の怒りで以て全く私を攪亂して了つたので、私
は彼の迷信を反駁することが出來なかつた。私が聖書から一句を引用しようものなら、
彼は直ちにほかのところを三句も引き出して答辯して、私の手から武器を奪つて了ふので
あつた。聖書はいろんな色の花が一ぱいさいた草地のやうなものだ。赤い花が欲しけれ
ば赤いのが目附る。もし特に白い花を求めるなら白い花が思ひのまゝに得られる。

私は洪水のやうな彼の言葉に壓倒されて默つてゐた。けれども彼は勝ち誇つてゐた。
そして彼の目は狼のやうに熱し輝いた。

こんなことを論じながらも、その間二人とも迅速に働いてゐるのであつた。私は揑ねるし、彼は塊を拵へては竈の中へ入れて、いゝぐらゐに燒けると取り出した。私はそれを棚の上に並べた。そして同時に手を火傷した。私はからだ中が揑粉でねばつき、粉だらけになつて、盲目と同時に聾になつた。そして單に疲勞から、話しかけられる言葉が一言も解らなかつた。

仲間の院衆たちは屢々私等のところへやつて來た。彼等はいつも人に解らない引喩を使つていろんなことを話し合つては笑つた。けれどもミカは直きにむか〳〵怒り出して皆んなを麵麭燒場から追ひ出した。私はミカと一緒に暮すのが苦痛だつたので、まるで火傷でもしたやうな氣持がした。そして陰鬱になつた。私は彼を好かないのみならず、彼が怖かつた。

彼はいくども私に聞いた。

『お前は裸の女を夢に見るか？』

『い、え、一寸も見やしません。』

『嘘をつくない。なぜ嘘を吐くんだい。』

彼は怒つて私に向つて齒を剝き出し、私の顏の前に突きつけて拳固を振つた。

『きさまは下卑たごろつきだ。』

彼はかう叫んだ。

私は全く愕いてしまつた。どうして彼は私に女のことを話すのであらう。だれだつて朝の三時から夜の十時まで働いて、骨々が痛むからだをして床につけば、いくらか眠れるならば有難いくらゐなものだ。それにミカが女のことを言ふから愕いた。

或とき私は酵母を取りに貯藏室へ行つた。その室はやはり地下室にあつて、麵麭燒場と向き合つてゐた。そして眞つ暗であつた。見ると戸口が閉めさしにしてあつて、中に提灯が點つてゐた。私は戸を開けた。すると、そこにミカが床の上に轉がり廻つてうん〳〵哭いてゐた。

『助けて下さいまし、おゝ主よ。私を女から救つて下さい。私を救つて下さい。』

私はその場の有樣の本當の意味が一寸も解らないなりに早速引き退つた。

ミカはいつもひどく恨みを以て女のことを話した。いかにも嫌らしい顔附をして、女に關係のあることは何でもかでもむき出しの百姓言葉で罵倒した。それと同時に、唾をはきかけたり、世界中の一々の女をみんなずた〳〵に掻き裂かうとでもするやうに、指で空中を引つかいたりした。私は彼がそんなことをいふのを聞くと、厭になつて呻いた。

私は自分の女房のことや、二人が結婚の晩に流した嬉しい涙や、二人が經驗した非常な歡びを考へた。

『おゝ主よ。それはあなたが人間にお許しになつた一番惠深い賜の一つではないでせうか？』

私は自分自身にかう聞いた。

私はタティアーナの親切な心根と、彼女の純潔と正直とを思ひ浮べた。そして彼女の同性に對するこんな罵倒を怒つて涙を流して泣いた。

『院長が私を呼んだら、私は何もかもすつかり話して了ふ。』

私はかう考へた。

けれども、こゝへ來たはじめての日に私と話した院長は、急には私を呼んではくれなかつた。一ん日〳〵は丁度盲目が寄つて、互同志の上に躓き合ひながら狹い森の路を通りでもするやうに、經つて行つた。けれども院長からは一寸も呼びには來なかつた。私は待たされるのが情なくなつた。

私が自分の最初の白髮を見たのは丁度そのときであつた。私はまだ僅二十二であつた。

私は例のきれいな律僧と話しがしたくてたまらなかつた。けれどもその人に會ふことはそれこそ稀であつた。會つてもほんの瞬く間だけであつた。彼の誇りがな顏は、たゞ短い一瞬間だけ目に見えて、そのあとは、見ることの出來ない蔭のやうに、私は彼をあこがれた。

私はその人のことをミカに聞いた。

『はつはつは、あいつかい？』とミカは叫んだ。

『あの律院生活の面汚し奴。はつはつは。あいつは骨牌のときに詐欺をやつて、あいつのゐた聯隊から追ひ出されたんだ。それから女について厭な話があつたので神學校から

も叩き出された奴だ。――それやあいつは學者にはちがひない。――けどもあゝいふ奴が宗教學院では士官の禮遇で迎へられた。チュドヴでは、あいつはすつかりの坊主と賭博を打つてそいつらを騙したんだ。それからこゝへやつて來やがつて七千五百留出して入院させて貰ひ、少しばかりの土地をこの道院へ寄附したんだ。それで以て非常に尊敬されてゐやがるんだよ。あいつはこゝでは骨牌ばかりに漬つてるんだ。院長や貯藏庫番や會計係やあの野郎は所つ中骨牌をやつてるんだよ。それから、あいつは自分のところへやつて來る女を持つてやがるんだぜ。本當にあのならずもの奴。あいつは自分用の隠室を持つてゐやがつて、そこで全つきり勝手放だいな眞似をしてやがるんだ。全く憎いぢやないか。』

私はこの話を信用しなかつた。しようにも出來なかつた。

十

或日私は貯藏庫係の敎父イシドールに、院長に會つて話せるやうに計らつてくれる事は出來ないものかと聞いて見た。

『會つて話す？　何を？』

『信仰のことです。』

『信仰がどうしたつて言ふんだい？』

『私は院長さんに色々聞いて見たいことがあるんです。』

彼は私を見上げたり見下したりした。彼は全く私より頭だけ脊が高かつた。そして痩せて骨張つてゐて、すばしつこさうな人を嘲るやうな目と、長い曲つた鼻と、尖つた口鬚を持つてゐた。

『正直に打明けて御覽よ。お前さんは肉に惱まされてるのだらう？』

彼等は絶えずこの特別な問題について話してゐるのであつた。私はその質問には答へ

ないで簡單に自分の疑惑を話した。

彼は眉毛を皺めた。そしてそのあとで微笑みながら答へた。

『お前、それには祈禱よりほかには解毒劑はないよ。祈りをすれば精神の苦痛を直すことが出來る。けれども、お前が仕事に一生懸命なのと、それからお前の頼みの性質が稀らしいから、それに免じて院長にさう言つて上げよう。安心してゐなさい。』

彼は私の頼みを『珍らしい』と言つた。私にはその言葉が不思議でならなかつた。私はその言葉の中に、私に取つて凶い前兆を示してゐる、見えぱつた傲慢が見出されるやうな氣がした。

私はしまひに院長どの〻前に呼び出された。院長は私がお辭儀をするのをじろ〳〵見探つた。それから權式張つた調子で言つた。

『イシドール教父から聞くと、お前は信仰問題について私と議論がしたいのださうだの。』

『私は議論をしにまゐつたのではございません。』

『お前、目上の人が話すときには口を出すものぢやないよ。人が二人寄つて一つの問題

を捉へて對談をすればそれは則ち議論だ。どんな問題でも、われ〳〵の集團の日常生活に關した事柄に涉つてゐない限りは、みんな思想を誘ひ出すものだ。われ〳〵は勞働の組合を組織してゐる。われ〳〵はこの肉體と、一時假りにこの肉體の中に宿つてゐる靈魂とを養ひさゝへるために働いてゐるのだ。祈禱と、それからこの罪の深い世界に惠みをかけて下さることをお願するので以て、靈魂が天にお出でになる神のところへ無理やりにも行き着く力を見出すやうに、この肉體と靈とを養つて行かうといふのだ。その力は巧妙な詭辯で得られるものではない。全くたゞ懸命に勞働するのでもつて得られるのだ。われ〳〵に必要なものは知識ぢやない。正直な心だ。私はお前がミカとやつた議論を聞いてゐるが、私はお前のその議論には贊成が出來ない。お前は、誘惑に屈しないやうにお前の突飛な思想を加減しなければいけない。なぜといへば、放縱な思想は、詳しく言へば信仰で拘束されてゐない思想といふものは、つまりが惡魔の武器庫の中での一番鋭い武器だ。理窟は肉體から來るのだ。それから勝手放題な思想は惡魔から來る。けれども靈魂の力は直ちに神の精靈の一部分だ。默示は瞑想を通して正しい人々に與へられる

天からの賜だ。お前の教師の兄弟ミカはきびしい律僧だけれども、併しあの人こそは本當の、信仰を持つた戰士だ。そして勤勉だからみんなから愛されてゐる。私はお前の罪滅として、お前に命令する。晝の仕事がすんだら、毎晩、左側の祭壇のところへ行つて十字架磔刑の聖像の前で主の榮譽のために讃美の歌を三遍づゝ繰り返して誦へよ。それも十日間、毎晩つゞけてやるのだ。それからもう一つ命令する。お前に通知があつた場合には、聽悔僧の兄弟マアダリアスから敎戒を受けるのだぞ。お前は領園の執事のところに書記に傭はれてゐたのだつたね。安心して出てお行き。私はお前のことを心に思つてゐてやるよ。お前には親類が一人もないやうだの。行けよ。私はお前のために祈つてやる。もつと幸福になるときを希つてゐるがいゝ。』

私は自分の麵麭燒場へ歸つて、院長が言つて聞かせてくれたことを默想した。院長が言つたことは非常に淺薄なやうに思はれた。

人間の理性といふものは眞理の探究をする場合に路を迷ふことがあるかも知れない。けれども、羊のやうな生きかたを眞似て生活するといふことは、殆ど道理を辨へたものゝ

すべきことではない。私はこの當時には敬虔な瞑想は、私の精神の一番奥の、そこには靈のすべての根が固く喰ひ込んでゐる、そしてそこから思想が果のなる木のやうに芽を出す、その一番奥の隅々を測るものだと考へてゐた。

私は私の精神には何一つ惡いところも、譯の解らぬ點も見出さなかつた。私には神だけが不可解であつた。邪惡なのはこの世界ばかりであつた。だから全く私以外のことであつた。兄弟ミカが同僚の律僧たちから愛されてゐるといふのは院長のづう〳〵しい嘘の皮であつた。私は他のものたちからは離れてゐて、仲間の話にはだゞさはらなかつたけれど、でも、いつも目を大きく開けてゐたから年上の律僧も見習僧も、ミカを怖れてはゐるにしても、心では嫌つて輕蔑してゐるのは解つてゐた。

それのみならず、私はこの修道院が全きり商賣的な立場から經營されてゐるのだといふことが解つた。律僧たちはみんな材木の商賣をやつたり、百姓たちに田地を賃貸したり、湖水の漁業權を振廻して金を强請したりしてゐるのであつた。道院は製粉場といろんな市場と大きな果物畠を持つてゐた。そして林檎や苺やキャベッを賣つた。またその厩舍

には十八頭の馬がゐた。そしてものゝ五十人ばかりもゐる集團は、大半は强壯な、勞働の出來るものばかりで、年寄はたゞ四五人飼つてあるだけであつた。それもどちらかといへば、道院へ所中やつて來る巡禮者たちに見せて、そいつらに感銘を與へるのが主な目的であつた。律僧たちは酒を飲んだ。女も嫌ひではなかつた。年下の坊主たちは、近所の百姓どもの持つてゐる小屋で寢泊りをした。女どもは、床板を磨くといふのを口實にして、年上の坊主等の隱室へやつて來た。それから院衆たちが、女の巡禮者を汚したりすることも度々であつた。

私はさういふ所行を咎めるのではない。私はその中に何も罪惡を見ないからである。たゞそれを隱して嘘をつくといふことだけは厭である。

道院へは志願者も澤山やつて來た。けれども見習僧に課せられる懺悔の苦行が餘りに酷しいので、大抵のものはそれに堪へ切れなくて逃げ出すのであつた。私はその神聖なところに二年間ゐたが、その間に十一人ぐらゐは逃げて了つた。彼等は一月か二月辛棒しては飛び出した。

言ふまでもなく道院には、巡禮者の前に提供する、いろんな種類の呼び物があつた。例へば、死んだ兄弟ヨサファの鎖は、膝の痛みに効き目がある。彼の頭巾は頭の痛むところへおくとその痛みが癒る。それから森の中には氷のやうに冷たい泉があつて、その水であらゆる病氣が癒る。信者たちの目の前でいろんな奇蹟をやる基督昇天の畫がある。兄弟マアダリアスは未來を斷定して苦悶ある人を慰めた。あらゆるずるい仕掛けが整へられてゐた。だから五月の月には巡禮者がいくつも群をなしてそこへ集つて來た。

私は院長と面談してから後、どこか、すべてのことがもつと純朴な、もつと質素な、そしてこんな澤山の仕事を强ひられないやうな、ほかの修道院を探さうと思つた。律僧たちが彼等のすべき勤めを——つまりこの世界の罪深いことを認める勤めを、もつとしつかり守つてゐる修道院を探さうと思つた。けれども色んな事が湧いて、それを探すことが出來なかつた。

或日私は事務所に使はれてゐる、グリシャといふ見習僧と知合になつた。私は最早前から彼が目についてゐた。彼がいつも兄弟たちのゐる側を、さつさと足音を立てないで

通つて行くし、煙色をした眼鏡をかけて、平凡な顏をした、からだつきのずんぐり肥つた男だからであつた。彼は恰も自分の足もとより外には何んにも見ようとしないかの如く、いつも、頭を下げて歩いた。

グリシャは私が院長と話をした翌日、麵麭燒場へやつて來た。ミカは丁度勘定の決算をしに會計係のところへ行つてゐた。

グリシャはしづかに私に挨拶をした。そして言つた。

『あなたは院長さんのところへ行きましたか。』

『行きました。』

『何か議論をしましたか。』

『いゝえ。』

『ぢや院長が追つ拂ひましたか。』

『なぜ?』

彼は眼鏡を直した。そして極り惡さうに言つた。

『ご免なさい。』

『それぢや院長は君を追ひ出したんですか?』

彼はうなづいてさうだと答へた。

私は僧正が言つたことを話して聞かせた。その間々彼は引割粉の箱の片はしに腰をかけてからだを前に突き出して、から咳をして、箱の腹を踵でこと〳〵叩いてゐた。

すると彼は機で刎ね上りでもしたやうに、不意に飛び上つて眞直に突つ立つた。そしてはつきりした、憤激した聲で言つた。

『こゝは全で萬事外の俗世間と同なじに金を儲ける目的でやつてるくせに、どうして人の靈を救ふところだなんて言つてるんだらう。私は罪深い貪慾な仕打から遁れようと思つてこゝへ遁げ込んで來たのに、こゝでもやつぱりそんな仕打に撲つ附かるんだ。これぢやどこへ行つたらいゝんだらう。』

彼はからだ中を振はせて自分の身の上を私に話した。

彼は麵麭屋の息子で、商業學校の全科を卒業して、それから父親の商賣に入れられたの

であつた。

『それが麵麭屋の店でさへなかつたら、どんなところへ入れられたつて私は不平は言はなかつたらうと思ふんです。けども麵麭屋の商業だけは私は屈辱を受けるやうでうんざりしました。麵麭といふものは人間全體に取つてなくてはすまない物ぢやありませんか。誰だつて人間の必要物から利益を取る目的でこの商ばいを專斷すべき筈のものぢやないんです。父の貪慾がつまりは父を窮迫させました。そんなことがなかつたなら、父は怖らく私の厭惡をうち負かしたかも知れないのでした。私には妹が一人ゐました。活潑な快活な女で、學校も一流の學校へ通つてゐました。いつも大學の學生たちと交際つて、讀書が何より好きでした。すると或日父が不意に妹にかう言つたんです。

「エリザベス、お前もう學問は止してお了ひ。私はお前の婿を目つ附けたよ。」

妹は非常に愕りして、かう言ひました。

「私は結婚はしません。」

ところが父は妹の髪を引つ捉んで、無理やりに言ふことを聞かせました。父が妹

のために選んだ男といふのは或金持の葉茶屋の息子でした。その男はいつも自分の家に金があるのを鼻にかけてゐました。私の妹とこの男とは小さい二十日鼠と犬とほど違つてゐました。そして心の上でも南極と北極ぐらゐ離れてゐました。

「お前はばかな奴だ。これ以上のいゝことがあるものか。あの人はヴォルガ河に沿うた町には一々倉庫を持つてるぜ。」

かう父は言ひました。

で、たうとう結婚式をしたんでした。ところが、客が宴會をやつてる最中に、妹は自分の寢室へ上つて行つて、ピストルを取り出してわが手で心臟を射ち貫いたのです。私が行つたときには妹はまだ息がありました。そして私にかう言ひました。

「許して下さいよ、グリシャ。私はよつぽど生きてゐたかつたんだけど、さうは出來ない……生きてるのは全くこはい……私には出來ない、出來ない、それは出來ない……。」

グリシャはこのすつかりの話を、恰もさうした過去から遁げようとするやうに、忙き込んだ調子で話した。私はその間、目を見張つて竈を見ながらぢつと聞いてゐた。竈は、